

金の星

Z32-B88

昭和二年五月五日印刷
昭和二年六月一日發行

六月号



第九卷 第六号

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

童話作家協會

日本童話選集

第一輯

美裝判 五四〇頁
著者 柳田泉三 八葉
定價 三圓七十五錢
送料 廿七錢



附録—日本童話史・會員著作年表

(柳田泉三 編)

岡本歸一 村上四郎

村山知義 武井武雄 初山 滋

編纂委員—秋田雨雀・藏谷瀧村・安倍季雄・巖谷小波・岩井信實・宇野浩二・小川未明・小野政方・小寺誠吉・尾崎岩二・沖野岩三郎・北村透夫・久留島武彦・榎山正雄・酒井朝彦・藤澤清花・相馬泰三・千葉省三・豐島與志雄・中島

兒童の爲め

學校及家庭の文

庫に愛藏せらるべき

新興童話の傑作集(二著)



小川未明著

未明童話集 第一卷

著者 柳田泉三 八葉
定價 三圓
送料 廿七錢

初山 滋 武井武雄 柳田泉三 八葉
著者 柳田泉三 八葉
定價 三圓七十五錢
送料 廿七錢



東京日本橋通

丸善株式會社

横濱 福金 札幌

大阪 神戶 京都 名古屋

東京—神田・三田・早稲田・丸善

目次

さくらんぼの唄 (装幀・石版)……………岩岡ごも枝

五月雨の頃 (口繪・三色版)……………寺内萬治郎

瑞穂の國 (童話)……………野口雨情

同作 曲……………(一)藤井清水

二人は目的を達しました(童話)……………(六)沖野岩三郎

笑はぬ姫 (童話)……………(二)三宅房子

お空が青い (推薦童話)……………(三)野口雨情選

不思議な夢 (童話)……………(七)水島爾保布

木乃くんが知ってる(童話)……………(五)鳴海要吉

小石の塔 (童話)……………(四)杜仙之介

大石主税 (長篇)……………(八)三島霜川

自轉車發明物語(童話)……………(九)犬田卯



あ 白帆の唄 (長篇)……………(一〇)小城庄一

山 羊 (童話)……………(一)平木二六

京子さんと黒豆(入選童話)……………(六)得能愛子

漂流二百三十日(長篇)……………(五)久米絃一

泥棒の鑑札 (童話)……………(一〇)西川喜平

童話 句……………(一)野口雨情選

暗闇の城 (長篇)……………(一〇)小島政二郎

三十年の後の後 (童話)……………(一六)立石美和

港の棧 (橋子供篇)……………(二六)野口雨情選

研究編 究……………欄……………(一〇)

編者 だだよ……………(一四)

出版者 だだよ……………(一五)

出版者 だだよ……………(一六)



さみだれの頃



寺内萬治郎畫

トルストイ 童話集

世界少年少女名著大系の新刊二冊

(各冊)

▽定価金九拾銭
▽送料拾銭

支那英雄 物語

金の星編輯部編。ロシアのトルストイの童話は、作者トルストイの尊い精神が出てゐるので、面白ばかりでなく、また深い教訓を持つたものとして世界に有名であります。こゝに集めた四つの話「馬鹿のイワン」「二人巡禮」「船正と大泥棒」「コウカサスの捕虜」は、最も有名な作で、是非日本の少年少女に讀ませたいものです。課外讀本としても立派な價值のあるものですから、各學校の兒童圖書館等には、是非備へていたださうと思ひます。

三井信衛先生編。この本は、支那の有名な「漢書軍談」のお話をもとにして、皆さんに支那の英雄達の勇ましい一生を物語するために、作者は非常な苦心をばらつて此の本を作り上げました。項羽、劉邦、韓信などの支那の大英雄が互ひに火花を散らして、戦ひ合ふ物語りですから、讀者は思はず手に汗を流して、胸をとどかさすには居られないでせう。少年諸君には特に歡迎されるであります。

東京本郷區 金の星社 振替 五九五九番
東京本郷區 三町五番

兒童文庫必備書

子供達はこ
の讀本によ
つて世界文
學の大系を
領解すると
共に、その代
表作を面白
く味ふこと
が出来ます。

世界名作物語讀本

佐藤武編著

各三八〇頁

各定價貳圓五拾錢
送料拾六錢

一 卷

ハウプトマン物語
芥川龍之介物語
トルストイ物語
平家物語
ヤラシヤ神話物語
諸曲狂言物語
シエクスピヤ物語
菊池寛物語
アンデルセン物語

二 卷

夏目漱石物語
マーテルリンク物語
坪内逍遙物語
テニソン物語
印度神話物語
竹取物語
ユイゴ物語
古事記物語
アラビアンナイト物語

三 卷

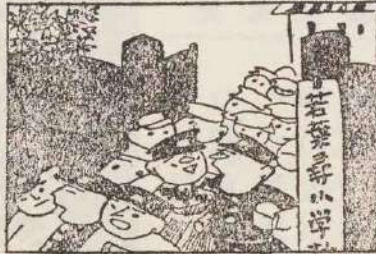
ロビンソンクルソー物語
島崎藤村物語
グッゾマ物語
瀧澤馬琴物語
ゴリキー物語
幸田露伴物語
ワイルド物語
シラード物語
淨瑠璃物語

株式會社 文教書院

東京市牛込區赤城元町
振替東京四四三三番
電話牛込三一七九番

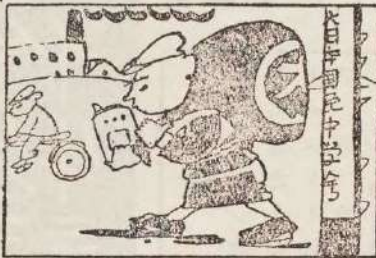
漫 信吉ノ成功

(一) 小学校卒業後
イヨヨノナカへトビダシタ
ヨノナカハ小学校ニキルトキ
オモツタホドダノシクハナ
カツダ。



小學校卒業後
行くことな事柄で上の學校へ
スガキ水會へ入會して日本一
中學講義館で勉強なさい。

(二) シンキチハ、ウチガビンガ
ウチガメ、テツチニダサレタ
ガ、ヒトニマケナイキテ、ダ
イニホシコクミンチユウガタ
クワイニフダワイシテ、コ
ノギロクゲヤメンキヨウシタ。

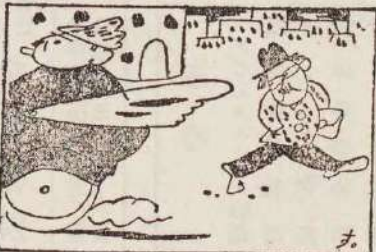


僅か一ケ年半で中
學卒業の學力と資
格が得られる。

(三) ヨサクモ、ウチノテツダイ
チシナガラ、コノギロクゲヤ
ンキヨウシタガ、トシキチト
ヨタロウハ、トウキヨウノ、チ
ユウガタヘハイツテモ、ナマ
ケテ、カツドウシヤシン、バカ
ヨミテアルイダ。



(四) 二十ホドダツテ、シン
キチハ、ヨツバナカイシヤノ
シヤチヨウニナリ、ヨサクハ
ソノカイギンニナツタガ、
トシキチトヨタロウハ、オチ
サケテ、シンキチノカイシヤ
ニツカツテモラツテイル。



○入會するには今が一番好いときてす
講義録見本つき規則書甲込金無代で送呈
駿河 東京 大日本國民中學會
電話 神田區靈堂邊 靈堂裏 靈堂邊 東京四二〇〇番

荒野の勇士

世界名作童話大系の二新刊・是非御一讀下さい。

定價金六十錢
送料十錢

英國ロングフェロー原作、三井信衛先生譯述

この物語はアメリカの大詩人ロングフェローの傑作「ヒヤワサの歌」を物語風に書き直したもので、此の物語を讀んだ方は、アメリカの大平原を渡る風の音を聞き、荒野に吠える野獣達の聲を聞くであろう。そして、また、勇士ヒヤワサが、その荒野の中に立つて、原始人の力強い勇者として、勇敢に闘ふ姿には、思はず胸をおどらすでせう。少年少年の皆さん、此の世界の大詩人の雄大な物語を是非お讀み下さい。

獨逸ハウフ原作、金の星編輯部編

ドイツの有名な童話作者ハウフのお話は、類のない不思議なものです。丁度アラビヤナイトを新らしくしたやうなものですから、一度讀んだら忘れられないお話ばかりです。中でも、この「幽霊船」のお話は最も奇怪なお話で、そして又、ステキもなく面白いお話です。尚、このお話の外に、「片手を切られた話」と「カリフの城」といふ大傑作を集めてありますが、これ等の話を讀んで満足されぬ讀者は一人もいないと思ひます。是非御一讀下さい。

幽霊船

東京本郷區 金の星社 振替 東京 九五三町 五番六九五

星の金社 世界少年少女著名大系

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

編第八	編第七	編第六	編第五	編第四	編第三	編第二	編第一
ギリシヤ神話	アラビヤナイト	ロビン・フッド物語	大人國小人國めぐりガリバー旅行記	コロンブス物語	ドン・キホーテ	ナポレオン物語	ロビンソン漂流記
ギリシヤ神話の神話	アラビヤナイトの物語	ロビン・フッドの物語	大人國小人國めぐりガリバー旅行記の物語	コロンブスの物語	ドン・キホーテの物語	ナポレオンの物語	ロビンソン漂流記の物語

星の金社 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

編第六十	編五十	編四十	編三十	編二十	編十	編九
聖書物語	ローマ英雄物語	西遊記	キリスト傳	日本文話	グリム童話	シエークスピア物語
聖書の物語	ローマ英雄の物語	西遊記の物語	キリスト傳の物語	日本文話の物語	グリム童話の物語	シエークスピア物語の物語

系大著名女少年少界世 星の金 編社

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

Table with 7 columns (編五廿第 to 編二廿第) and 1 row of titles (ハムレット, 新ロビンソン漂流記, ホムペイ最後の日, 少年鼓手, ロミオとジュリエット, 竹取物語, ジャンバルチヤン, みなし児).

系大著名女少年少界世 星の金 編社

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

Table with 8 columns (編四廿第 to 編七十第) and 1 row of titles (爲朝一代記, 青い鳥, アリス物語 不思議國めぐり, 母を尋ねて三千里, 小公子, アンデルセン童話, ギリシヤ英雄物語, 奴隸トム物語).

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編一第
系大傳人偉 編二第
系大傳人偉 編三第
系大傳人偉 編四第
系大傳人偉 編五第

ジヤンヌダルク

大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジヤンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。

銀十九金
錢十金料送

ローマ
英雄 シーサー

猶田史光先生著。シーサーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーサーの英雄は幾人と数へる程しかない。そのシーサーの神化しない運命を奮いたたが本書である。

銀十九金
錢十金料送

ネルソン

三井信齋先生著。トラファルガアの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。

銀十九金
錢十金料送

リンコルン

久米龍一先生著。最も優れた立派傳として、この「リンコン傳」をおすすめする。第一、本光一ツ貫への貫しいリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかち得たか。本書を讀まぬ者は一生の不孝である。

銀十九金
錢十金料送

太閤秀吉

三島雅川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。

銀十九金
錢十金料送

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第
系大傳人偉 編七第
系大傳人偉 編八第
系大傳人偉 編九第
系大傳人偉 編十第

ナイチンゲール

入交龍一郎先生著。女神様のやうに風高し心を持つたナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少年少女の爲に書れたばかりの本です。

銀十九金
錢十金料送

ワシントン

三井信齋先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。

銀十九金
錢十金料送

大楠公

三島雅川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ぜるでせう。面白くてそして本當の正成のお話がある本です。

銀十九金
錢十金料送

英雄 ヒーター大帝

大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシアを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極まりないヒーター大帝の物語です。

銀十九金
錢十金料送

お釋迦様

齋藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釋迦様の一生をわかりやすく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がない本です。

銀十九金
錢十金料送

金の星社發行

世界名作童話大系

錢十料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

編一第

魔法のバラ

悪い王子の爲めに國を追はれた優しい王子が女神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのおかげで、あらゆる困難から救はれるといふ面白いお話です。

編二第

ほら博士

ほら博士といふほど大はら吹きのお母さんの話です。實になんともかんとお話をかかへて笑はずにはゐられない面白いお話です。まあ一度読んでごらん下さい。

編三第

盗まれた王女

ベルシャの不思議なお話です。リンダガルといふ王女様が悪い魔法使にさらはれたので、それを王子があらゆる困難をおかして助けに行くお話です。

編四第

親指トム

西洋の一寸法師のお話です。親指の大ききしかない親指トムが、ありとあらゆる冒險を行ふ痛快な物語です。お腹をかへて笑ふ事程度が知れません。

編五第

アラビヤン航海の巻

有名なアラビヤン・ナイトの中でも一番面白い話だといはれてゐる「シンドバッドの航海」のお話です。恐らくこれ程面白い話は世界にも少いといはれてゐます。

金の星社發行

世界名作童話大系

錢十料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

編六第

利口な驢馬

驢馬が自分の一生を皆さんにお話したのが此の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほかでは聞かれない愉快なものです。見世物に出たりして、なか／＼面白いです。

編七第

大勇士

イギリスの有名な話です。ビオルフといふ勇士が、怪物退治に出かけて、恐ろしい人喰鬼と戦つたり、海の怪物と戦つたり、最後に火龍と戦つて退治する勇壯な物語です。

編八第

ピーターパン物語

活動寫眞でおなじみの「ピーター・パン」の本當のお話を書いたものですから誰でも一度は讀まねばなりません。これこそ本當の世界的童話だと誰でも感心するでせう。

編九第

魔法の小人

面白い／＼童話です。お母様の病氣を治すうと藥を買ひに行く孝行な少年が、悪い小人が出て来て、さん／＼になやましますが最後には王様のおほめにあづかります。

編十第

人買物語

日本の人買物語として最も有名な關子王と安藤屋のあはれたお話です。三莊大夫といふ人買ひにさらはれて、さん／＼な目に遇ふ話で、これ程哀れな話はありません。

金蘭社の新刊書

世界童話叢書第十三編
加治亮介編 池上浩裝幀
オランダ童話集

四六判箱入美本
本文三〇〇頁
原色版 四枚
凸版刷挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料 十二錢

オランダと云ふ國は歐洲の領國時代にあつても特に通商を許され、我が國文化の父とも云はれた關係深い國であるだけに、我々には非常に怪しみのある童話を持つてをります、殊に篇中「鬼の旅行」は日本を題材としたもので、是非御一讀下さい。

世界名篇物語叢書第十一編
大戸喜一郎編 高坂元三裝幀
ノートルダム の 僂 男

四六判箱入美本
本文一七二頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料 十二錢

パリイのノートルダム寺院を取巻いて此の物語りは生れ出でます。氣味悪い僂男の片眼、陰々とした鳴り渡る鐘の、深刻な場面は到處に展開されます。吾國でも活動的、動感となつて廣く紹介されてをります。原作は本叢書第七編ミゼラルの作者ユーゴです。

少年少女文藝講談叢書第六編
小久保陽三編 池上浩裝幀
由 比 正 雪

四六判總クローズ
原色版カヴァ附
挿畫三色版外十頁
本文一八八頁
定價金一圓
送料 十二錢

今まで吾人としてのみ語り傳へられて来た、由比正雪を、王政復古を計つた大義士と云ふ新解釋のもとに書いたもので在來の由比正雪の本をお讀みになつた方も、是非この興味ある新解釋に依る本書をお味ひ下さい。眞の正雪の心持が必ず皆様の胸を打つ事と信じます。

少年少女科學大系第二編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒 童 地 文 學

四六判總クローズ
ドイツ式裝幀
本文約一七四頁
定價金一圓
送料 十二錢

吾々が住んでゐる地球は、どんな風に出來たのか、又あの恐ろしい地震は如何して起るのか、噴火、海嘯等凡そ地球上に起るすべての現象の疑問は本書に依つてたちまち解かれます。

少年少女科學大系第三編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒 童 進 化 論

四六判總クローズ
ドイツ式裝幀
本文一七四頁
定價金一圓
送料 十二錢

人間の先祖は果して猿でせうか、先祖は同じであつても時代をふるに從つて其形が變つて遂には別種のものとなると云ふやうな、人類を始めとして動物、植物の進化の有機を興味深く書いた、自然世界の童話ともいふものです。



金の星

六月號

(通卷第九拾壹號)

東京市外 八二 金蘭社 振替東京一〇七番 電話小石六六六番

瑞穂の國

作曲 藤井清水

作謠 野口雨情

M.M. ♩ = 80

(子守うた風に)

mp

ゆいーいん せーど の たけやぶ
はーいーん すがーし に みけたれ
あこめだん の の までかいた
とつぷの の ママク
おれん の ン ン ク

りばいり
すずめ の ふ たゆめ
みかとつ の ノボノ たかしの
ひつづつ ホ オオオ ニ
ミヅホ オ クニ

はなさ ー か
こただ と ナ
あつた と ナ
できた と ナ

I. II. III. IV. V. VI.

瑞穂の國

野口雨情
寺内萬治郎畫

ゆうべ お春戸の竹藪で
雀のみた夢 話そうか

ゆうべ 雀のみた夢は
昔の昔のここだささ

お米をさがしに出かけたら
一粒お米があつたとき



一粒ひろつて蒔いたれば
十粒のお米が出来たささ
十粒のお米を蒔いたれば
百粒お米が出来たささ

千粒萬粒蒔くうちに
瑞穂のお國になつたささ





二人は目的を達しました

沖野 岩三郎
寺内 篤治郎 監

六

お隣りの支那では、まだ男の人がみんな天子様の命令で、頭のぐるりを剃つて、可愛い辮髪を後に垂らして、まんまるい頭巾を被つてゐた頃のお話です。或時、上海へ上陸した二人の青年がありました。その青年たちは支那の人ですが頭には辮髪がありました。

せんでした。二人共散髪で、立派な洋服を着たハイカラでした。

二人は上陸すると、すぐに湖北の武昌といふ所へまゐりました。そこには其の當時支那で大變名高い西湖總理の張之洞といふ偉い人がゐました。二人はその張之洞大人の所へ面會に行つたのです。張之洞大人は二人の青年に面會を許しました。そ

して聞きました。

「あなたは何んといふお方で、どちらから参りました？」

すると一人の青年は答へました。

「私は唐紹虞と申します。アメリカから歸つてまゐりました。」

「さうですか。あなたは？」

張之洞大人は他の一人の青年に訊きました。

「私は孫逸仙と申します。アメリカから歸つてまゐりました。」

そこで張之洞大人は、二人の顔を見くらべてゐましたが、

「唐さん、あなたはアメリカで、何を勉強して來ました？」

「私はあちらで専ら政治學を勉強して來ました。」

「さうですか、それは、學問を勉強して來ました。では、こちらで役人になるつもりですか。」

「はい、大人の御紹介で、どこかの役所で當分勤めたいのです。將來は政治家になるつもりですが。」

「よろしい。それでは朝鮮へ行らつしやい。朝鮮には私の友だちの袁世凱といふ人が公使をしてゐますから、そこへ紹介狀を書いてあげます。」

「ありがたうございます。では、どうぞお願ひいたします。」

唐さんは非常に喜んで、何度も何度も頭を下げました。

「孫さん、あなたは、どんな學問をして來ましたですか。」

張之洞大人はやさしく聞きました。

「私は醫學を勉強して來ました。私はドクトルです。」と、孫さんは得意げに答へました。

「なに？」と云つて、ちつと孫逸仙の顔を見てゐました張之洞大人は、怒つたやうに申しました。

「此の支那の國には昔から世界に誇るべき醫術があ

七

るではないですか。それにあなたは、わざわざアメリカまで醫學を研究に行つたのですか。それは馬鹿な話ですネ。」

それを聞いた孫さんは、むつと腹を立てました。けれども黙つてはゐられないので、

「しかし、アメリカの醫術は、支那よりも進歩してゐます。」と申しました。けれども張之洞大人は強く頭を振つて、

「い、え、醫術は支那が世界一です。私などはまだ外國の藥を一服ものんだ事はありませんが、此の通り達者です。」と申しました。そして、唐紹虞の方にふり向いて、

「唐さん、少しお待ちなさい。私、紹介狀を書いてあげますから。」と云つて奥の一室に入つて行きましたが、暫くすると、一通の手紙に金五十圓を添へてもつて出て來ました。

「唐さん、この五十圓を旅費として差上げますから

これから直ぐ朝鮮へ行らつしやい。きつと袁世凱君は、あなたを役人してくれまますから。」

「ありがたうございます。」と云つて、唐さんは頭を下げましたが、冷遇されたばかりか、折角勉強して來た學問を、けなされた孫さんは、頭を下げないで反つくり返つてゐました。

二人は其所を出ました。門の所で孫さんは申しました。

「あんな馬鹿な連中が總理をしてゐるやうでは此國も駄目だ。僕が大統領になつたなら、あんな男は大員にして置きはしない！」

唐さんはびつくりして、問ひました。

「それでは、君は醫者をやらないで、大統領になるつもりかい？」

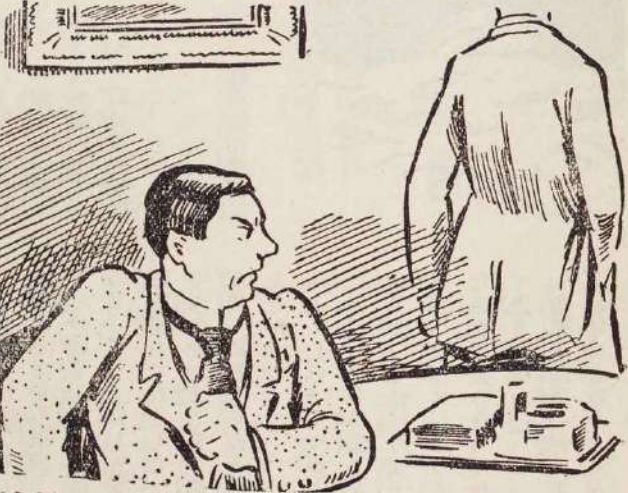
「さうだ。僕は大統領になつて、此國をもつと立派にしてみせる！」と孫さんは力をこめて申しました。

「それもよからう。僕も今はこんな貧乏書生だが、

いづれ大臣位にはなるよ。」と唐さんも負けずに申しました。「うん、何になりとなり給へ。僕はもう醫者は止した。大統領領々々々。」と云つて、孫さんは大手をふつて、腹立たしうに西の方へ行つてしまひました。

紹介狀と旅費とを買つた唐さんは、「うん、何になりとなり給へ。僕は政治家になるんだ。大臣々々。」と云つて、うれしそうに東の方へ行つてしまひました。

五十圓の旅費で朝鮮まで來



た唐さんは、張之洞大人の紹介狀を持つて、公使館へ行きますと、公使の袁世凱はすぐ唐さんを秘書官にしてくれました。ところが唐さんは、きかぬ氣の人でしたから、支那の政治のやり方を、いつも不満に思つてゐました。ことに上海の總稅務司をしてゐる赫德といふイギリス人のやり方が、不平でたまりませんでした。で、長い英語の論文を書いて、それを雑誌に載せました。それは、赫德さんのやり方が非常に間違つてゐる事を攻撃した文章でした。

徳さんは、大へん立腹して、其の時の總理大臣である肅親王殿下に手紙を出して、唐さんを叱つてやつて下さいと申しました。そんな事とは知らない唐さんは、自分の書いた論文を、赫徳さんが読んでくれば痛快だがなアと思つてゐる所へ、或日肅親王殿下から袁世凱公使の所へ手紙が来ました。それを讀んだ袁公使はびつくりして、



「唐君、君はどんな事をしたんだ。總理衙門肅親王

殿下から、拿問進京の手紙が来たぞ。」

拿問進京といふのは、日本語で云ふなら、取調べる事があるから早速上京しろといふ厳しい命令です。けれども唐さんは別に悪い事をした覚えがないので、すぐ上京しますと、肅親王殿下から、論文の事を尋ねられました。そこで唐さんは、堂々と赫徳さんのやり方の悪い事を述べ立てました。政治學を専門に研究してゐる唐さんの言ふ事に間違ひはありません。

「よろしい。すつかりわかつた。あなたに悪い事はない。しかし赫徳さんはイギリス人だ。このまゝにして置いては、外交上面白くないから、これから稅務署へ行つて、どうもすみませんでした。もうあんな論文は書きませんから……と一口言つてあやまつて置きなさい。」

肅親王殿下の仰せですから、唐さんもいやだといふわけにまわりません。やむを得ず稅務署へ行きます



すと、赫徳さんは腹が立つてゐましたから、唐さんを冷たい應接室へ待たせて置いたまゝ二時間も面會しませんでした。

唐さんは腹が立つたから、もう黙つて歸つてやらうかと思ひました。しかし、それでは肅親王殿下の命に反く事になりますから、ちツと我慢して待つてゐました。

すると、やつとの事で赫徳さんが出て来て、

「お待ちしてすみませんでした。あなたは私に何か御用があるんですか。」と問ひました。

「別に用事はありませんが、あの雜誌へ書いた論文のことで、一寸お詫びにまわりました。」

唐さんは、小さい聲で申しました。すると、腹の立つてゐる赫徳さんは、

「あれですか、君も随分ひどい事を書きましたネ。

君なんか、まだ書生さんで世間を知らないから、あんな事を書くんですよ。僕は別に腹も立てませんがその代り君の意見に従ひもしませんよ。まあ、君が大臣にでもなつたなら、其時は仰せの通りにしますからね。」と、ひやかすやうに申しました。そして赫徳さんは、さつさと出て行きました。

其時唐さんは、本當に腹が立ちました。門の外へ出た時に、

「よし、僕は今に大臣になつて見せる。さつとなつて見せる！」と獨語を言つて、東の方へ歸つて來ま

した。その時、唐さんは、始めて、孫さんが大統領になるんだと云つて、ぶつぶつ言ひながら、立腹して西の方へ行つた時の心持をよく悟りました。其後間もなく日清戦争が起つて、袁世凱公使も唐紹虞さんも支那へ歸りました。支那へ歸つた唐さんは、段々有名になつて、遂には郵傳部尙書といふ大臣になりました。それは日本でいふ逓信大臣です。或日上海の總稅務司赫德さんの所へ北京から一通の手紙が届きました。披いてみると、一寸お目にかかりたい事があるから、来て下さいといふのです。差出人は逓信大臣唐紹虞といふ名です。唐紹虞、唐紹虞と、赫德さんは何度も何度も頭を傾けて考へました。どうも聞いたことのあるやまな名前です。しかし、此の大臣には、まだ出會つたことがないと思ひながら、汽車に乗つて北京へまゐりました。そして、逓信省へ行つて名刺を出しましたが、一時間たつても、二時間たつても大臣は出て來



一三
ません。冷たい應接室でほんやり待つてゐた赫德さんは腹が立つたので、もう黙つて歸つてやらうかと思ひました。けれども大臣から折角手紙をくれたのだからと思つて、我慢して待つてゐました。

すると、間もなくそこへ出て來た大臣の顔を見た赫德さんは、
「始めてお目にかゝります。」と挨拶しました。ところが、大臣は笑ひながら、

「いや、始めてではありません、二度目です。」と云つて、ちつと赫德さんの顔を見つめました。するともう何年も何年も前に見た若い青年の顔が、だんだん赫德さんの眼に甦つて來ました。

「あなたは、あの雜誌に論文をお書きになつた唐さんで……」

言葉の終らないうちに、唐さんは申しました。

「さうです。あの頃私は世間を知らない青年でした。しかし、今は大臣です。あなたは私の言ふ事をき

て下さいますでせうネ。」

「はい。」と云つたまゝ、赫德さんは、うつむいてしまひました。以前腹立ちまぎれに、二時間も應接室へ待たせて置いた、敵を今日討たれたのだと思ひました。

間もなく赫德さんは、總稅務司の官を辭してイギリスへ歸つて行きました。

三

さて西へ行つた孫さんは、どうなりましたでせうか。折角學んだ醫術は政府から排斥されるので、醫者は開業しませんでした。そして支那を改革して、もつといふ國にしたいと思つて、アメリカへ行つたり、南洋へ行つたり、日本へ來て中山といふ姓を名乗つたりして國家のために必死になつて奔走してゐました。

支那は日本とちがつて、時々天子様が變ります。

其頃は明朝のあとの清朝の時代でした。けれども清朝も、もう段々亂れて、西太皇といふ女の人が勝つて手な政治をしてゐました。で、誰か偉い人が起つて一大改革をしなければならなくなりました。

そのうちに日本の大正元年に、支那の南の方から黄興といふえらい青年が出て來まして、いま／＼支那の政治を改革することになりました。日本にゐた孫さんも歸つて行きました。黄さんと孫さんとは、陸軍大將の黎元洪といふ人をホテルへ招いて、支那の政治を改革するために軍を起す相談をしました。ところが黎さんは、そんな事をするのは恐ろしいと云つて拒みました。黄さんや孫さんがあなたは陸軍大將ではないかと云つて、ひどく嘔鳴つたので、黎さんはぼろ／＼涙を流しながら寢臺の下へ逃げ込みました。

『では御互ひだけでやりませう。僕はアメリカへ行つて軍資金を作つて來るから。』と云つて孫さんは支

ゐた人で、其の頃は五萬人の兵隊を率ゐてゐた人です。この人なら軍資金もあり兵隊もあります。しかし、大變あなたを嫌つてゐますから。』と申しました。

『ななに、僕を嫌ふ？ どうして嫌ふんだい？』と孫さんは問ひました。

『あなたは口ばかり達者で、實行の出來ない人だと申しまして。』

『さうか、では、その僕を嫌つてゐる丘君に會はう。』孫さんは早速廣東に行きました。そして丘逢甲さんに會ひました。丘さんは、

『始めましてお目にかゝります。』と云ひましたが、孫さんは、

『あなたは私に始めてでせうが、私は、何十年前から、あなたをよく知つてゐます。あなたは支那全國に名高い丘さんです。いや世界に名高い丘さんです。』と申しました。其のあいさつを聞いた丘さんは

那を旅立ちました。そのあとで黄さんたちが軍を起して、あちらこちで戦争しました。ところが黄さんたち方には軍資金が續きません。そこへ孫さんから電報が來ました。軍資金三百萬圓もつて歸るといふのです。みんな非常に喜びました。

ところが孫さんはアメリカへ行かずにハワイまで行つて、お友達の謝良牧といふ人と二人で歸つて來ました。船が上海へ着いた時、孫さんは、三百萬圓どころか、三十圓も持つてゐませんでした。で、お友だちの謝さんから千圓借りて上陸しました。出迎へに行つた多勢の人たちは、孫さんが三百萬圓もつてゐると信じてゐます。孫さんは、たつた今借りた千圓のお金を、ばツばと遣つて、

『軍資金は十分だ。しかし、僕一人に骨を折らせないで、僕の外にも軍資金を出す人がありさうなものだネ。』と申しました。すると或人が、
『廣東に丘逢甲といふ人がゐます。此人は元臺灣に

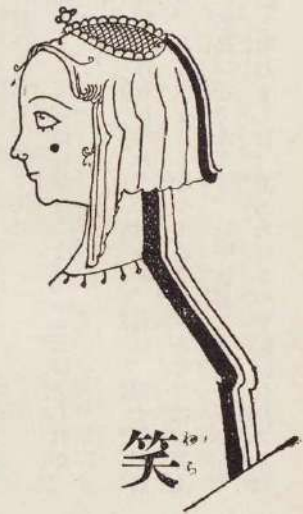
すつかり喜んでしまつて、早速孫さんの味方になりました。そして孫さんと丘さんは大勢の兵隊をつれて黄さんを助けました。

其の戦争の結果、愛親豊羅といふ人の創めた清の國が滅びて、中華民國といふ名になりました。其の第一回の大統領は誰だつたかといふに、それは、武昌で張之洞大人から、つまらない學問をして來たと罵られた、當時の青年孫逸仙でした。

孫さんは、二三年前病死しましたが、唐さんは、今に上海で達者に生きてゐます。いつか此人も中華民國の大統領になるかも知れません。とにかく二人はめでたく目的を達したのです。

此のお話は中華民國で名高い丘聞さんが、伊香保の宿で、私に話してくれたお話です。
大へん面白いお話でしたから、みなさんに差上げることになりました。

(をはり)



笑はぬ姫

三宅房子
初山滋畫

この世の中が、何んなに廣い事か！ そして、廣い世の中には、どんなに大勢の人達が住んで居る事か！ 貧乏な人も、お金持ちも、悪い人も、いい人も、ある人は、何も彼も思ひのまゝになつて、せいたくに暮して居るのに、片一方では、朝から晩まで、汗にまみれて働いて居る！ そして、誰も彼も、その人々に應じて、せねばならない事をして居る！ ……そんな事を考へると、神様は、何といふ尊いお力を持つて居られるのでせう！ まあ聞いて下さい！

さて、ある所に、高い塔があつて、その上方の、美しい御部屋に、美しい王女様が住んで居られました。
このお姫様程、仕合な人が、またこの世にあつたでせうか？ 大勢の腰元達にかしづかれて、美しい着物を着て、欲しいと思ふもの、喰べたいと思ふもの、見たいと思ふもの、何一つとして、お姫様の思ひのまゝに、ならない事はありませんでした。
それなのに、何うした事か、このお姫様は、生れてこの方、まだ一度も笑つた事がないのです。

誰一人として、やさしい微笑が、お姫様のくちびるをはころばせたのを、見た人がありません。誰一人として、お姫様の笑ひ聲が、綺麗な御部屋の空氣を、すつたのを、聞いた人ありません。

お姫様はうれしいと思つた事がないのでせうか？ お父様の王様は、悲しさうな姫の顔を見るのが、何んなにつらかつたか知れません。お殿中をあげりあげて、誰れでも、お姫様の御部屋へ行ける様にして、誰れでもいゝから、お姫様を少しでも、樂しませて呉れ、ばいと思つたりしました。が、何の役にも立ちませんでした。とうとう王様は、國中へ布告を出して

「誰でもよろしい、姫を笑はせて呉れた者には、姫を與様にあげる」と云ひました。
王様が、さう仰言るか仰言らない間に、早くも、うわさが國中へ廣まつて、方々から、種々な人が集つて來ました。

公卿も、男爵も、侍従も、將軍も、中には位もない兵卒や、町人まで、先を争つてお城へつめ寄せて來ました。
毎日の様に、毎晩の様に、音楽會や、舞踏會や、まだ、手品や、滑稽話や、ありとあらゆる楽しい事が催されました。けれど、笑はぬ姫の唇は、悲しげにとちたまゝ動きませんでした。

話がかわつて、外の町の、町はずれに、大變貧乏な男が住んで居ました。
この男は、朝早く起きると、町の道路を掃除してお晝になると、あづかつた家畜をつれ出して、飼草をやり、牛の乳をしぼるやら、きれいに洗つてやるやら、ほんとうに、朝から晩まで、人と話をする間もない程働きつゞけて居るのでした。
主人といふのは大變音無しい、正直なお金持ちでした。で、この男が、大變よく働いて呉れるのを、

よく知つて居ましたので、一年経つと、テールの上へ、金貨の一杯入つた袋を置いて、若者に

「ここにお金があります。お前さんの欲しいだけ取つておいて下さい。」

さう云つて、次の部屋へ行つて終ひました。若者は、テールへ近づき乍ら、よく考へました。

「神様のお心に反てはいけません！ 自分が働いたより、多い金を取つてはきつと神様のお怒りに觸れるに異ひない。さうだ。多いより、少ない方がいゝだらう。」

さう思つて、貧乏な男は、袋の中から、金貨を一つだけ取つて、ポケットへ藏ひました。すると、若者は、急に、喉がかわいて、水が飲みたたくて、堪らなくなつて來ました。で、早速井戸の方へ行つて、水をくもうと思つてかゞみますと、何うした



はずみか、ポケットの中からさつきの金貨がすべり出て、すうつと、井戸の底の方へ沈んで行つて終ひました。
可哀さうに、若者は、まる一年、一生懸命に働いて、一文のお金も手にする事が出来なかつたのです。けれど、若者が考へるのでした。

「これも、神様の御思召にちがひない！ 私の働きが足りないのだ。それで神様が、お金を御取りあげになつたのだ！」

それからの一年間、若者は、また去年の倍も精を出して働きました。

一年たつと、主人は大變よろこんで、今度は、去年の倍も大きい袋へ、金貨を一杯入れて、机の上へ置くと、
「何うも御苦勞でした。何うか、いゝだけ取



つて下さい。」

さう云つて、また次の部屋へ行つて終ひました。

併し、若者は、また一年前と同じ事を考へたのでした。そして、今年も、金貨を一つだけポケットへ入れて、外へ出ました。

表へ出ると、若者はまた水がのみたくなりまして。

で、またあの井戸の所へ来て、水をくもるとまた金貨が、ポケットからすべり出て、井戸の中へおちて終ひました。

何んといふ事せう。人によれば、こんな時、聲をあげて泣いたに異ひありません！ わめく様な聲で、自分の不幸を、神様にうたへたに異ひありません。

併し、若者は考へるのでした。

「仕方がない。神様は、ある人にはお金をお與へにやるし、ある者からは、御取りあげになる！ みんな

な御覺召した。自分の働きが足りなかつたのだ！」
またその次の一年、若者は、今度こそ、死にも狂ひになつて働きました。

誰も彼も、若者の、働きのいゝのを見て驚きました。朝は、誰よりも早く起きました。夜は、誰よりも晩くまで働きました。

こゝに、一つの不思議といふのは、外の家でこしらへるパンは、コネて居る間に、カサ／＼になつて終つたり、黄色になつて終つたりするのに、この男の造るパンに限つて、やわらかくて、眞白でした。

外の家の家畜には、すい分やせて、きたなくて、歩くのさへやつとの様なのが居るのに、若者の主人の家の家畜は、皆元氣で丈夫でした。生れて間のない馬でさへ、肥つて、綺麗で、高い山の頂邊までも馳け上りさうでした。

人々は不思議がりました。けれど、主人は知つて居ました。何も彼も、この眞面目な奉公人の御蔭だ

と思ひましたので、一年経つと、今度は、今迄の、三四倍もある大きな袋の中へ、入る丈金貨をつめ込んで、テーブルの上へ置きました。

「何も彼も、あんたの働きのお蔭だ！ 働きの多ければ、お禮も多くなければいけない！ 何うかい、太取つて下さい！」

若者にさう云つて、主人は出て行きました。

併し、若者は、去年迄と同じ様に、また金貨を一つだけポケットへ入れて、水を飲みに出かけました。今年も、金貨がすべり出て来ません。若者が、前かゞみになつて、つるべへ手をかけると、不思議！ 井戸の底の方から、キラ／＼光る物が、すうつと浮き上つて来ました。

見ると、それは、去年と一昨年、この井戸へ落した金貨でした。

「あゝ、今度は神様が下さつたのだ！」

若者はさう云つて、三枚の金貨を、ポケットへ藏

ひ込むと、太さうよろこんで、

「これで、私の労働もすんだ！ 暫らくお暇を頂いて、廣い世界を見て来ませう！ いろ／＼な事を知りたいから！」

さう云つて若者は主人に別れて旅に上りました。

廣い野原へさしかると、一匹の小さな野鼠が、灰色の毛を逆立て、若者の方へ走つて来ましたが、

「今日は、小父さん！ 私に金貨を一つ下さいな！

いつか御恩を返しますから！」

と突然、妙な事を云ひ出しました。

若者は、何と思つたのか、おしげもなくポケットから金貨を出して、一つ野鼠にやりました。

だん／＼進んで、森の中の、せまい路を歩いて居る時でした。若者は、今少して、枯草の根元をはつて居る甲虫を、踏みつけて終ふ所でした。

「さて旦那様！ 私に金貨を一枚下さいませぬか？ いつかは私も、御役に立ちます！」



その、威張りやの甲虫が、こんな事を云ふのです。若者は、また金貨を一つ甲虫にやつて、歩

間もなく森がつきて、また野へ出ました。困った事には、ちようと、春

先きで、積った雪がまだ野をうづめて居ましたが、それが、べとべ

とに解け初めて、白い雪割草の花が下の方でもう咲き初めて居

ました。それで、ちようと、其處を流れて居た河にも、氷

が、張つて居る事は居ましたが、もうすい分薄くなつ

て、うつかり踏むと、氷が割れて河の中へ落ちさう

でした。

で若者は要心して、なる丈厚さうな所を見て、

ひよいと飛びました。

「ギンッ！」

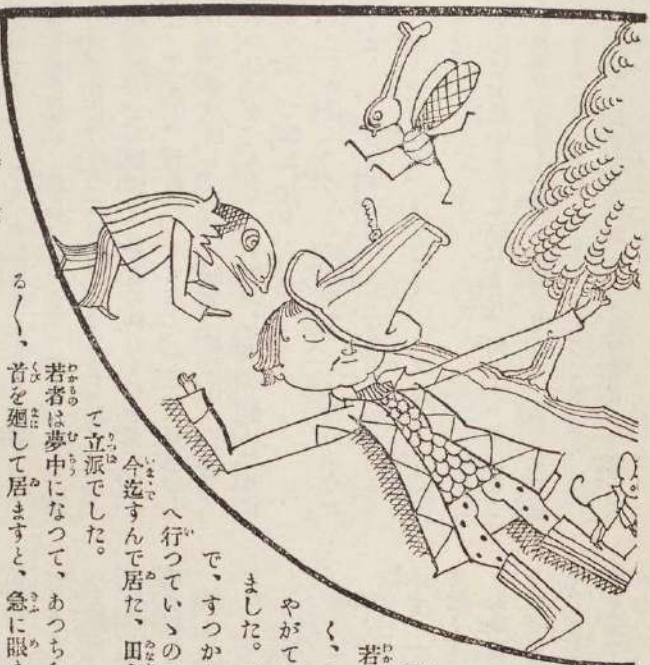
と、氣味の悪い音がして、もう少しで、

落ちるところでした。と、忽ち氷の下

の、青い水の中から聲がして、

「何うか私に、金貨を下さい！ いつ

かは、私も、あなたの爲になります！」



失つて終ひました。

若者は夢中になつて、あつちを見たり、こつちを見たり、ぐる／＼、ぐ

首を廻して居ますと、急に眼まひがして、往來の真中へ、倒れて、氣を

失つて終ひました。

今迄すんで居た、田舎に比べると、何も彼も、廣くて、大きく

て立派でした。

やがて、若者は、賑やかな、大きな町へ入つて來

ました。この貧しい労働者は、あんまり賑やかなの

で、すつかり驚いて終つて、何を見ていゝのか、何方

へ行つていゝのか、まるでわからなくなつて終ひました。

若者は、三年間の、はげしい労働のかひもな

く、また元の、一文無しになつて終ひました。

若者は、また、おしげもなく、最後の金

貨をしやけにやつて終ひました。斯うして、

氷の割れ目から、頭を出して、さう云

つて居るのです。

と、いふものがあります。見ると、そ

れは、しやけでした。大きなしやけが、

氷の割れ目から、頭を出して、さう云

つて居るのです。

お空が青い (推薦)

甲府 石倉 眞造

お空が青い

一ばい一ばい

青い



お池が青い

一ばい一ばい

青い

お水が青い

一ばい一ばい

青い

柳のかげ (推薦)

神戸 酒井 朗

柳が青い

葉をつけて

さやりさやりと

揺れてゐる

道ばたに

すはつて煙草

吸つてゐる

七つ星さま (推薦)

山梨 吉川 行雄

七つ星さま

長柄杓

かはりばんこで

水くんだ

水は みづうみ

山のかげ あの山のかげ



荷物をひいた

黒馬が

ぼんやりそばに

立つてゐる

馬子のちいさん

七つ星さま
 長柄杓
 水溜れ天の川へ
 水ために
 七つ星さま
 ビーカリコ



鈴の音 (推薦)
 長崎西岡水朗
 紅い椿の
 かけゆくお馬
 鈴が鳴ります
 ちやらちやらご
 空の青さに
 お馬の鈴は
 澄んで鳴ります
 ちやらちやらご
 花の峠を



螢の姉さん
 越えてくお馬
 鈴が鳴ります
 ちやらちやらご
 螢の姉さん (推薦)
 名古屋 鳥本 夫 二

螢の姉さん
 しやれ姉さん
 葦の葉の上から
 ちらほらご
 うつる姿を 見てみます
 ホラ見てみます
 螢の姉さん
 しやれ姉さん
 提灯ごもして
 ちらほらご
 水に姿を うつします
 ホラうつします



不 思 議 な 夢

水 島 爾 保 布

同 登

三〇

單衣にはまだ少し早い、かさね着では汗ばむといふ初夏の頃、朧る月夜といふ程ではないが、まだ幾分春霞の名残を見せて薄ら烟るやうに、うるみをもつた月が、やうやく中空近く廻つた宵過ぎ、町外れの川べりの橋の袂で、たつた今ひよつこり出會ひでもしたらしい二人が、立ちながら話をして居りました。一人はどこかの御隠居さんといつたやうな老人で、やゝ焼りかけた腰を杖で支へて居ました。もう一人の方はまだ二十そこそこの若い男で、早くも扇を手にしてゐるところなどは、大分のせつかららしい容子でした。

『ほんとにいゝ時候になりました。それに何といふ麗かな月夜なんぞや。かうやつて御散步なさるところをお見受けしますと、嗚かし御名吟が澤山御出来で御座いませう。お伺ひ致したいものですね。』

『ところが、一向……私よりも君の方に御名作が

あるに違ひない。聞かせて頂き度いな。』

『どう致しまして、お聞かせ申し上げたいにも、一句はおろか片ことも浮んでまゐりませぬ。』

『それはいつもの君にも似合はない。……では、一つ、こゝで出會つたのを幸、これからこの月に浮れて、川傳ひに、上の湖水まで行つて見やうではないか、あすこには月見の亭といふのもある。』

『それは又一段と面白い事で御座いませう。ではお伴致しませうか。』

と、そんな事をいひながら、二人は静々と歩き出しました。

この二人の話のやり取りを直ぐ橋の下の小舟の中で、釣をしながら聞くとともになしに聞いてゐた目明しの甲吉は、思はず居さまひを直して、眼を見張りました。

『どうも二人ながら訝しな事をいつてゐるな。川傳ひに上の湖水遊行かう。……上の湖水といへば、こ

こから八里半、いや十里はたつぶりある。若い方は兎に角、老寄り杖を突張つてゐる。どんな達者な足でも行きつくのは真夜中過ぎ、悪くすると白々明けになつて了ふ。』

さては化け物かな。——と思ひました。

何にせよたゞ者ではない。さう思ふと甲吉は俄に職務からこれも何かの手掛りになるかも知れないと氣がつかしました。

『よし、一つ二人の跡をつけてやらう。』

と、早速に帯を締め直し尻をからげて陸へ飛び上りました。二人はと見ると、既に三四丁も彼方にあるかして、ぼんやりと小さな影になつて動いて居りました。

もとより早足は自慢の甲吉、直ぐさまに追ひつけるつもりで小刻みの馳け足でつけて行きましたが、どうしてどうして、その二人の足の早い事、若い者はもとより、老人の威勢のよさつたらありません。

手にした杖はてうど舟の棹のやうな具合で、とんと一つ地面を突くと、體はそのまゝする／＼と空を滑つて二間も三間も飛んで行くといったやうにも見えませんでした。



「てつきり魔者だ。」

甲吉はさう思ふと一しよに今度は別な好奇心さへ催して、まるでその二つの影と競走するやうに一筋路を息せき切つて走つて行きました。

やがて湖水の縁へ来ました。

真ん中に長々と突き出した長い堤の外れに在る月見の亭といふ小家の中へ、目當ての二人は、今てうど這入つて行くところでありました。甲吉も直ぐとそこを自指したことはいふ迄ありません。

「一體あの二人は何を話してゐるだらう。」

甲吉はさう思ふと直ぐに足音を忍ばせて、月見の亭のうしろへ廻りました。じつと耳を澄ませしゐると、二人は自分達の住んでゐる町内の出来事について何くれとなく評判をしてゐるのであります。

傘屋の二番息子は隣り村の同じ商賣の家へ婿に行つたが、その家は家内中が大の大好きで、家には



積のやうな大犬を三疋も飼つてゐる。それがどうしても婿になつかない。その爲めに到頭その家を逃げ出して來た。……とか、粉屋の惣張り婆さんは愈々死ぬといふ間際に、しきりと口を指示して何か食べ

たがる容子だつた。もう口がきけなくなつてゐるので、身寄りの者が假名でいろは四十八文字を書いて欲しいと思ふものを字で拾つて見せろといった。すると婆さんは初めに「か」の字を指しそれから「ね」の字を指した。さうして、その儘ぐたりとして了つた。あの婆さん最後の際には金を食べるつもりだつたらしい。……とか、そんな話をして大きな聲で笑ひさざめて居りました。

「時に、あの質屋の番頭さんの一件は、一體どうなつたんでせうな。たしかこの正月はじめの出来事でしたが……」

と、老人が云ひました。

甲吉はこの言葉を聞くと、俄に體中がぎゅつと引き締るやうな氣がしました。

といふのは……その質屋の番頭さんの一件に就いては、現在當の甲吉が、今に何の手がかりらしい手掛りも見つけ出せず、全く困り切つてゐる出来事な

のでありました。

質屋といふのは町内一番の本店で、番頭さんといふのはその家で丁稚時代から務め上げた律義な人でありました。十何年かの辛抱の間に彼は五百兩近くのお金を溜めたので、それを資本に國へ歸つて何か商賣でもしやうとこの正月のはじめに主人から暇を取つて生れ故郷へ旅立つたのであります。それからやがて一月餘りも経つたが、番頭からは何の音沙汰も無い。平常の實體にも似合はず何といふ事だらうと、最初は面白く思はなかつた主人も日が経つに従つてだん／＼と別な疑ひを持つて來ました。何よりも氣にかゝるのはその番頭が大金持つての一人旅といふ事でありました。

さう氣がついたので直ぐと國許へ手紙をやつて問ひ合せたところ、國の親元からは、當人からはこの正月に歸るといつて來て以來、今に何の消息もないといふ返事でありました。

になつて了ひました。

「まつたく盗賊吟味方の目明しのといつても、かういふ事件になると手も足も出ないんだから困りますね。一體あの人はどこへ眼をつけたり耳をつけたりしてゐるんでせう。」

と、若い男の聲がかういひました。

「またあんな事をいつてゐる。」

と、甲吉は苦笑ひをしました。

「といふと、君はあの事件について何か心當りでもあると見えるな。」

「あるといへばあります。私はどうも……あなたも多分御存知でせう。あの櫛の木の立場の餅屋を……」

「餅屋、知つてゐる。それがどうしたかね。」

「あすこの家は近頃商賣も休みがちださうですよ。しかも今迄月ならしにやつて來た質屋へはばつたり足を絶つたといふ事ですし、尙噂によれば追々に店も廢めるさうです。」

主人の驚き親の驚きはいふ迄も無い事、早速に両方かゝその事を詳しく狀にしてお上へ訴へて出たのであります。

この事のいきさつを取り調べるやう、上役から云ひつかつた甲吉は、それ以來寝る間も休まぬ程に精を出して、心當りのあちこち、これはと思ふ節々は殆ど残るくまもなく詮索したのであります。當の番頭は今に行き方知れず、死んだか生きてゐるかの風のたよりさへも嗅ぎ出す事が出來ず、ほと／＼手こすり切つてゐるのであります。主人親達をはじめ、この事件を知つてゐる限りの人々は、寄るとさると、役所や役人達を能無しの間拔けたのと隘口にいづつてゐますし、その上上役達は上役達で甲吉をさも／＼役立たずの意け者か何かのやうに罵りました。が、いくら口惜しがつても、全くどう手の下しやうもないといふ有様で弱り返つてゐたのであります。さうして一月經ち二月經ち、到頭年も半ば

「それがあの質屋の番頭さんどういふ關係があるかね。うつかりした事をいふもんぢやないよ。」

「そりやさうですが、……もう一つ訝しいと思つてゐる事があります。あの餅屋の裏にお稻荷さんだか何か知らないが妙な社があります。あれです。あれの出來たのは今から六ヶ月前、恰度あの番頭さんが行衛不明になつたのとおつつかつつの頃なんです。」

「社を拵へたつて、それが別に餅屋を疑ふ理由にはならないぢやないかね。」

「ところが、私はあの社の下に何か怪しいものがあると思ふんです。まア餅屋のあの社を見る限つきに注意して御覽なさい。」

甲吉にはその若者の言葉に一々思ひ當る節があるやうな氣がして來ました。なる程櫛の木の立場に餅屋がある。あの家の主人は今迄も餘り評判のいゝ人間では無かつた。と氣がつきました。と又その一方一體この二人は何の爲めにこんな六ヶ月前の出來

事、大ていの人はずっかり忘れて了つてゐるあの事
について、今更のやうに噂をしてゐるのか疑はれて
も來ました。

「一つ、飛び込んで行つて訊きたゞして見ようか。」



いや……待て——」とつおいつしてゐる時、
「いやまあ、そんな事はどうでもいい。夜も大分に
更けたやうだ。そろ／＼と歸らうかな。」

と、老人は立ち上る氣配がしました。

「歸ると致しませうか。」

と、若い方もさういふなり腰を上げました。

二人の足なみは來た時よりも一さうに早く、まる
で風に乗つてゞもゐるやうに見えました。甲吉はあ
えぎあえぎその跡を追つて漸くの事でもとの町まで
戻つて來ましたが、その時はもう月は落ち東の空に
は水のやうな薄ら明るみが浮き上つてゐました。

「一體どの何て者だらう。」

と、思ひながら行つて行くと、裏町の小さな路次
の前で、二人はひたと立止まりました。

「どうも失禮いたしました。ではごゆつくりとお休
みなさい。」

「いや私こそ御無禮しました。ではさようなら。」

甲吉は直ぐとそこへ走り寄つて、戸の隙間から覗
いて見ると、老人は今てうどその路次の中程のどこ
ろを、前と同じ姿で片手を屈つた腰の上へかけ、片
手で杖をつきながら歩いてゐました。そしてその突
き當りの家の前まで來て一寸足を止めたかと思ふと
もうその姿は消えて無くなつてゐました。しかもそ
の表戸は嚴重に鎖された儘でありました。

「もう一人の若い方は？……」甲吉はすぐと別の一
人を追つかけてました。と、これはてうど家數で二十
軒程行つたかと思ふところの小さな格子作りの家の
前で、姿が掻き消すやうになつて了ひました。

「よろしい。一つ兩方の家の様子を見てやらう。」

と、甲吉は直ぐと、その若い方の姿を見失つた家
の表戸をどん／＼叩きました。

「もしもし、御主人に一寸起きて頂きたい。」

と、大きな聲でさういひました。

「ハイ、ハイ」と、寢呆聲がして人の起る氣配、間



と、お互に挨拶を済ませると、老人の方はその
路次口の木戸の中へすうと消え込んで了ひました。
しかもその木戸はコトリといふ音一つせずに、閉さ
れたまんまになつて居たのであります。

もなく戸をがらりとあけたのを見ると、たつた今烟のやうに消えて無くなった若いその人でした。

「お、やつぱりお前さんだ。お前さんはたつた今外から歸つたばかりな筈なのに、いつの間に……」

甲吉はその人の寝亂れた姿、さうして眼の底にはまだ充分夢の暈が残つてゐるといつた風な、ぼんやりした顔がどうも不思議でならなかつたのです。

「今歸つたばかり、……い、え、そんな事はありません。しかも今夜は宵から床へ入つて居りました。」

「どうも訝しいな、實は……」

と甲吉は、二人の跡をつけて、川傳ひに上の湖水の月見の亭迄行つて來た事を話しました。

「さう仰れば、なる程そんな夢を見て居ました。」

「夢を……して老人と一しよだつたのですか。」

「左様、老人の連れがあつたやうでもありません。」

で、甲吉はその足で再び先に見届けておいた路次の奥の家を訪ねました。起きて來たのは矢張り先刻

の老人に違ひありませんでしたが、これも夜に入る間もなく寢込んで了つた。月に浮かれて遊び歩いた事は歩いたが、それ等は皆夢の中の出來事で、何事を話し合つたかは皆目覚えてゐない。といふのでありました。

折角の骨折れも夢であつて見れば何とも仕様がな。しかし不思議は不思議だ。萬に一つ何かの手掛りになるかも知れないといふので、甲吉は直ぐと手配をして檜の木の餅屋に目をつけました。さうして怪しいといはれた裏のお宮の土臺の下を掘つて見たところ、そこには澤山の小判やその他の金銀を入れた瓶が埋めてありました。

六ヶ月に渡つて問題になつてゐた事件はすべて甲吉が追つかけた夢の二人の話した通りでありました。餅屋の主人の白状した通り今迄行く方の判らなかつた番頭さんは、村外れの墓所の隅から、すつかり骨になつて現はれて來ました。(をばり)

木乃くんが知つてる

鳴海 要吉

岩岡とも枝畫



浅草の観音様にお詣りしても、うつかりするとあの大きな五重の塔は見落します。観音様のお堂の手前の、すぐ右手に建つてゐるのですけれども。

あの五重の塔に去年(大正十五年)の夏、不思議な出來事がありました。それは、だれ言ふとなく、五重の塔の屋根や欄干の飾り金具が盗まれたと言ふ噂が、人々の耳に傳はつたのであります。

大勢の人達が、五重の塔の周圍に立つて、上を見



上げました。なるほど何千本と知れないあの屋根の垂木の先端について居る赤銅らしい金具が澤山なくなつて居ります。また欄干についた金具も所々なくなつてをります。そのはげたあとと幾分白くなつて居り、近頃とれたものと誰にも氣付かれました。何しろその金具の無くなつたあたりは梯子をかけ

てもどう

しても容

易に手の届

くところでは

ありませんし

つかりした足場

でも作つたらばと

もかくも、逆も人業

では盗みとられさうも

無いところですよ。それで

人々はみんな唯「あれ、あ

れ」とばかり不思議がつて見

てるばかりです。

中には、もう警察にその犯人は

捕まつてるといふ人もありましたし、或はまた、今

まで毎日竝へ来ても此の五重の塔のあることすら氣

付かない人さへある位だから、これは今盗まれたの



四〇
ではなく、何百年前から、雨風に晒されて自然に、
一つ二つと剥落ちたのを、このごろ誰かが氣付いた
のに違ひない、と尤もらしく言ふ若い學生もありま
した。

此の金具の無くなつた譯をよく知つて居る人は此の
廣い世界にたつた一人、乞食の木乃くんだけです。

——木乃君を木乃伊君と間違へてはいけません——
木乃くんは此の事をたしかに知つて居る筈です。それ
は斯ういふわけです。

二

木乃くんは乞食です。毎日ノ一東京を貰ひに歩い
てる、十五歳になるお乞食です。よく貰へる時は木
賃宿などにも泊ることがありますが、たいていはそ
んなに貰へませんから、どこにでも寝ます。橋の下
でも、ごみくたの中にも寝ます。相手のあること

もありませんが、たいていはたつた一人ですよ。小さい
時からの慣れつこですから、そんなに辛いとは思ひ
ません。

その日——去年の夏のその晩——はとう／＼淺草
の觀音様のお堂の下にもぐりこみました。あすこは
中々もぐれないやうに金網を張つたりしてありますけ
れども、木乃くん等にはやつぱりうまい工夫があり
まして、ともかくも中にもぐつて、引すつて行つた
庭の上に落ちつきました。

その日は貰ひがあまり少かつたので、確に物も食
べませんので、お腹が減つてべこ／＼です。それで
もタイして苦しいとも思はずに居ましたが、蚊など
も居て何だか眠れないで困りました。

木乃くんは、七歳の時に深川の八幡様のお祭りの
日に、何とかいふ橋の上ではぐれたきり逢はないお
母の事を、その晩に限つて思ひ出されて仕方があり
ませんでした。あまり眠れないので、觀音様の床下

から、仲店の明るい方を眺めて居りました。すると
仁王さまの門の側のところで、覗き眼鏡を見せてお
た婆さんは、お詣りの人も段々薄くなり、他の店は
大概仕舞つたのに、一人残つて相變らず覗き眼鏡の屋
臺を飾つてゐます。あたりは段々に静かになつて來
ます。直ぐそばの交番の巡查も、交番の中に這入つ
て影を見せなくなりました。それなのに、覗き眼鏡
の婆さんばかりは其處から動きません。そして、夜
深くなるにつれて、段々霧のやうなものがかゝつて
來て、薄明りの中にぼんやりとその婆さんが見えて
居ります。

木乃くんは、その婆さんが不思議で不思議でたま
りません。もう誰も一錢出して覗くお客さんも無か
らうに、あの婆さんはなせあすこにあつて動かな
いのだらうと思ふと、何とか氣の毒なやうにもなり
ました。すると、ふと、七歳の時に別れたきり逢は
ないお母のことが思はれました。



の眼鏡の先には箱も何も無いのですもの。
 『お客さん。そこが此の眼鏡の世界一等といふところですよ。まあもう少し辛抱して見ていらつしやい。これから段々いゝところが見えるのです。』
 と婆さんが言ひますので、木乃くんもその氣になり一生懸命目を凝らして眼鏡の先を覗

きこみました。すると、不思議！
 五重の塔の下の方に何萬と數の知れない小さな人聲が聞え出しました。よく見ると、澤山の蟻が手に取るやうにハツキリと見えます。而も、その蟻が、小さい聲ながらも皆、人間と同じ言葉で物を言つて居ます。
 その蟻達の言ふところから察しますと、今夜、觀音堂の蜂の國から攻め寄せて來るので、向ふには、尻の劍があり、空飛ぶ羽があるので、これに對抗するにはどうしたらいかと、たいへんな騒ぎでありました。
 木乃くんは興味をわいて來、息を殺し、眼をすゑて、それを見つめました。觀音堂の方を見ますと、これまた、蜂達が出たり這入つたり中々の騒ぎであります。堂の後の方に多くかくれて、蟻の方のほどよく見えませんが、ともかく五重の塔の方だけに氣をつけてみました。

『あれは、おれのお母ちや無いかしら？』
 と、何となく思はれて來ました。

『ともかくも、泊る所がなくてあゝしてるのだらうから、おれの此の室——堂の下——が廣いから連れて來て泊めてやらう。』

と、斯う思ひまして、木乃くんは堂の下から這ひ出しました。そして、

『お婆さん、なせ其處に何時までも立つてるんだい？』

と、斯う申しました。すると、

『お客さん、いらつしやい。え、これは、近頃發明になつたラヂオ仕掛けの、世界一等の覗き眼鏡でございます。お代は見てのあとで結構でございます。』

と、婆さんはあべこべに斯う申しましたので、木乃くんは面喰つてしまひました。そして、おれのお母ちやないかとも、おれの堂の下へお出でよとも言はれなくなつてしまひました。

『その覗き眼鏡はいくらなんだい。おらあ乞食で貰ひが今日無かつたから、一錢も無いんだ。』
 と申しますと、

『然うかい。何だかお前さんはわたしの息子のやうな氣がするから唯で見せて上げよう。』
 と婆さんが申しますので、木乃くんは、

『それではお前さんはおれの本當のお母だ。』
 と言はうと喉まで出ましたけれども、とにかく、

覗きを見せて貰つてからでも遅くないと思ひ、それでは見せて貰はうと、木乃くんは眼鏡に顔をつけました。

『何だえ。此の眼鏡は向ふまで素通しぢやないか。五重の塔も觀音様のお堂も丸見えだねえ。何んにも有りあしなないぢやないか。』
 と、木乃くんはすぐ言ひました。その善です。そ

すると、蟻王が非常召集を行ひ、蜂との對戰協議が始まりました。

「蜂の劍に刺された時は、薯の葉の絞り汁をつければいい。」といふ説が出るやら、

「土の穴にもぐつてさへ居れば大丈夫。」といふやうな意氣地のないことを云ふ者もあるやらで、容易に相談がまとまりませんでした。すると體の割合に小柄な一匹の蟻がそこに出て、

「吾等に、劍も羽も無いがその變りに智恵がある。一體、高等動物には、生れながらの羽や劍は無いものである。あの人間を御覽なさい。人間は劍も鐵砲も飛行機もみんな自分の智恵でもつて拵へて居る。吾々も劍や鐵砲をこれから拵へれば、あの下等動物の蜂ぐらゐ何でも無い話だ。」と、云ひだしました。

王は之を聞いて、
「それは尤もの話だが、鐵砲や劍にする材料は無いではないか。」

す。中々勝負は付きません。實に三四時間此の戰爭はつゞきました。蜂や蟻の世界では、何十年かの戰爭であつたのでせう。

五重の塔の金具の大部分は、蟻軍の武器に變つてしまひました。

やうやく夜が明けかけて來ますと、今までかゝつて居た霧も段々にはげ、その戰爭も自然に消えて見えなくなりしました。

婆さんはと見ますと影も形もありません。木乃くんはやはり、觀音さんの堂の下の庭に坐つてゐるのでした。

「お母の事をあんまり考へつめたので、あんな夢を見たのだな。」

と思ひましたが、どうも、五重の塔の金具が落ちて來て、そして、それが蟻どもの武器になつたことだけは、本當らしく仕様がなないので、堂の下から

と申しますと、先の小蟻は、また、
「材料は、五重の塔の金具でいくらでもあるぢやありませんか。」

と申しまして、それから、蟻が何萬となく五重の塔に傳はつて上つたかと思ふと、金具が、彼方からも此方からもばらばらと落ちて來ました。下では、小さな焚火をして、その金具を熔かして見る／＼うちに鐵砲やら彈丸やら、劍やらを拵へあげました。その早いこと、まつたく眼にも止らぬ有様です。何しろ、あんなに小さい動物ですから、時間も随つて小さいのでせう。蟻の一分が、人間の一年にも十年にもあたるのかもわかりません。

然う斯うしてうちに、戰爭がはじまりました。蟻の方から、鐵砲を放します。まるで粟粒を撒くやうです。蜂はまた空をぐんぐんと飛び廻り、時々降りて來て蟻を刺します。蟻は、小さな赤銅の劍で應戦します。丁度、鷲と人間と戰爭するやうな有様で

這ひ出し、五重の塔のところへ行つて上を見上げて見ましたら、なるほど澤山の金具のとれた跡が見えます。

木乃くんは、昨夕の事を詳しく人に話したいのですけれども、乞食ですから遠慮をして、通りかゝりの人に一寸、

「五重の塔の金具がどつさり無くなつたぞ。」

とこれだけ、口走りしました。
木乃くんはそれからまた、七歳の時に別れたお母を探しながら、毎日毎日あてもなく東京市中を貰ひに廻つて居ります。

今以つて、淺草五重の塔の、屋根や欄干の金具の無くなつた譯は、此の乞食の木乃君の他に誰も知る人は無いといふことです。

(をはり)

小石の塔

杜 仙之介
川上四郎 畫

小石 つみましよ
むぎわらごんぼ

砂のお山に
お山の上に

小石の塔は



いつまでかかる

つめば くづれる

むぎわらごんぼ

小石 つめたら

小石の塔に

ちよいこ ごまれよ

むぎわらごんぼ



大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫



【前回の梗概】元禄十四年三月十四日、淺野内匠頭は江戸の芝、要宿下、田村右京大夫の邸で切腹させられました。十八日の眞夜中頃、二挺の早駕籠が、大石内藏助のところへ江戸表の巻ろしい「知らせ」を持って来ました。ついで十九日の晩方、内匠頭は「知らせ」を持って来ました。ついで十九日の晩方、内匠頭は切腹、家は断絶——城も取り上げられさうな「知らせ」がありました。赤穂の家中は、初め、天下の兵を引受けて籠城しようと思ひました。主税は、多くの家中と一緒に、城を討つに討死する覚悟をしてゐました。ところが、お城、明渡しと評定がきまつたので、主税は不平でうたまりませんでした。けれども、お城は、お上に召上げられて了りました。家中の重立った者も、多くは、罵詈雑言にして、赤穂を立退いて行きました。赤穂は、一日々々に淋しくなりました。

内藏助は、禮儀をつくつて、お城受取りの役人を迎へました。その

態度が、實に立派でした。そして、主税の知らないうちに、「復讐をしよう」といふ同盟を作つて、その人々と共に、いろ／＼、お城、明渡しの支度や、その後の始末をしました。

主税は、父と共に浪人になつて、家族と一緒に、生まれた家を立退くことになりました。殿様から頼まれた馬とも別れました。伺明れた黨も彼から出して逃がしてやりました。さうして、すべての物が主税から離れて行つて了りました……

七、血判をゆるされて

内藏助の一家は、一ツたん、遠林寺に移つて、それから、また、五月の七日に、赤穂の近在、尾崎村——老僕八助のある村へ引つこして、そこに、しばらく、百姓家を借りて住まつてゐました。

その頃、内藏助は、腕に「疔」といふ腫物を出して、どツと床につきました。すゐぶん、ひどい熱が幾日かつさましました。でも、六月に入ると、その腫物が、だん／＼、瘡くなりしました。そして、眞夏の日光が、毎日／＼、カン／＼、照りつけて来るやう

になりました。

「近いうちに、都の山科の方へ引移る。それ／＼、出發の支度をして置くが可いぞ」

内藏助は、ある日、主税を始め、家内一同の者にさう云渡しました。

主税は「いよ／＼、赤穂の土地を離れて了ふのだな。」と、さう、思ひました。主税は、何んとも云はれぬ淋しい心もちになりました。——お城に離れ、家に離れ、友に別れ、馬に別れ、さうして、今、また、生まれた故郷からも離れて了ふ。主税は、涙ぐむでは、いつも、うなだれてゐるやうな心もちになつてゐました。

内藏助は、主税の其の心もちを知つてか、知らないでか、相變らず、何を一ツ、主税に話してはうとしました。

「旦那様は、どうなさるお積ですか。わしには、都の山科に地所を購つて、家を建て、一生、氣樂に

暮らすのだと云はれましたが……」

ある時、八助爺さんが、ひよつくり、やツて来て、主税に、さう云ひました。

「さうか」

と、主税は、嫌な顔をして、さう云つたきり、何んとも云ひませんでした。

「殿様は御切腹、お家は断絶。お城は、オメ〜と明渡して置いて、御自分は、氣樂に、山科へお引込みになる……。わしには、どうしても、旦那様のお心もちが解りません。」

と、八助爺さんは、「お前は、どう考へるか」と、しふやうに、グン〜、追ツて来ました。

「うん……」

主税は、生返事をしたまゝ、やはり、何んとも云ひませんでした。

「若様も、やツぱり、旦那様について行きなさいますか」

黙ッて了ひました。主税も、それきりで、何んとも云ひませんでした。

六月の二十四日は、内匠頭の「百ヶ日」に當りました。その日、内藏助は、淺野家の菩提所、花岳寺で、懇に、内匠頭の「法要」を営みました。さうして、その翌くる日、いよ〜、故郷の地をはなれて新濱岬から、船で、都に出發しました。主税も、旅装束で、その船に一緒に乗りました。母のりく子も弟の吉千代も、妹のり子も、皆な一緒にした。皆な顔は、涙に濡むでゐました。

「爺も、もう十年、若ければ、お供をするのでございますが……」

と、八助爺さんは、船まで見送ツて来て、ポロポロ、涙を零してゐました。

主税等の母、りく子も、臉を泣膨らして、眞ッ赤にしてゐました。

「うん」

「然うですかネ。すると、誰一人、お殿様のお恨みをはらす人もないわけだ。」

と、八助爺さんは、残念で、耐らないやうに云ひました。

「うん……」

主税は、やはり、何んとも云ひませんでした。残念で、胸が、ぐら〜、煮えかへるやうでした。

「だから、世間でも、いろ〜、旦那様の悪口を云ひますよ。さらす藏だとか、鯨の重しにもならない石だとか云ツて……」

「爺や……」

と、鋭く、一と言。主税は、さつと顔色を變えしました。「お父上のことを、左や右云ふと、ゆるさんぞ」と、いふ、氣もち——その烈しい氣もちに、唇が、ビリ〜、動きました。

と、氣がつくと、爺さんは、少し、ヘドモドして

「お道中を御大切に……」

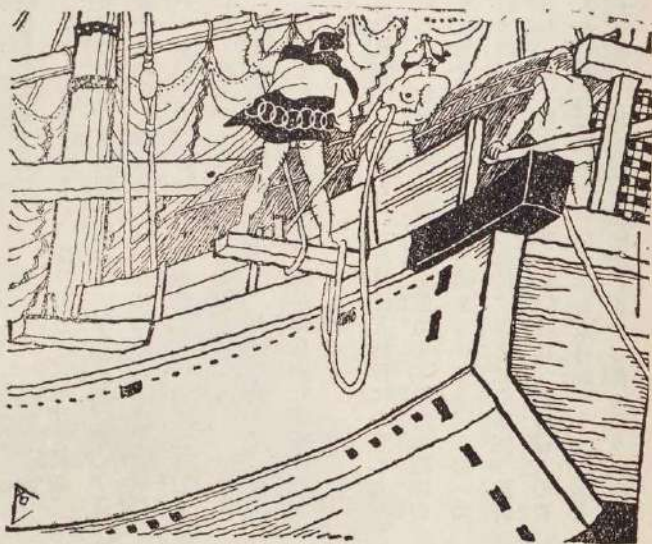
尾崎村の者やなど、見送ツて来た大勢の者は、口々に、さう云ひました。ガヤ〜してゐても、それは、悲しい聲でした。

内藏助は腕を拱いたまゝ、黙然としてゐました。

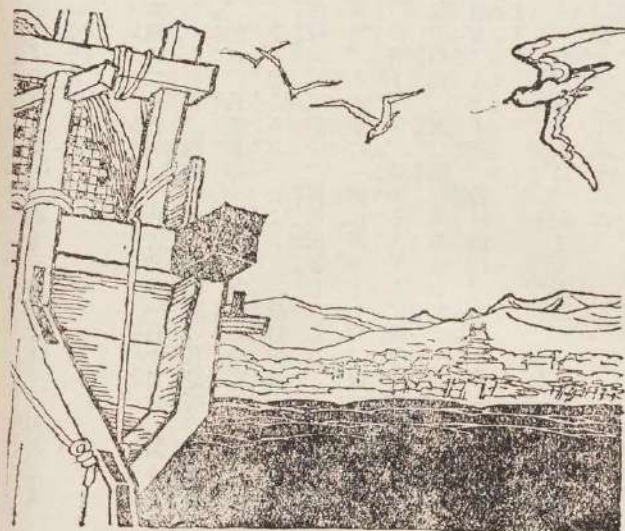
眞夏の海は、静でした。船は、スル〜と岸を離れて、やがて、帆を上げました。白帆は、ゆるやかに順風をうけて、滑るやうに駛りました。

お城を繞る松は、薄霧につゝまれて、夢のやうに静に見えました。その松の翠の間に、お城の白堊が、カツキリと浮上がって、いつものやうに輝いてゐました。

主税は、その白堊を、じつと見つめてゐては、ホロリ、ホロリ、涙を落しました。そして、「御先祖から代々、朝に晩に親むで来たお城……もう、そこには、家中の人が一人も残ツてゐない。そして、もう二度と、あの白堊も見ることが出来ない」



もちろん、主税もまだ、父の眞との心を知りませんでした。内藏助は、主税にさへ、眞との心を知らさないやうに用心して、しかも、小野寺十内父子や、間瀬久太夫父子、大高源吾、瀬田又之丞、中村勘助、大石瀧左衛門、勝田新左衛門、原惣右衛門、千馬三郎兵衛——このうちには、大阪の方にいた人もありますが、たいがい、京都、または、その近く



と、思ふと、後から後から、底止もなく、涙が湧いて來ました。

その白壁も、だん／＼、遠くなりました。主税は、その白壁が、かすかに／＼見えるやうになるまで、いくたびとなく、お城の方を振り向いて見ました。

「ア、青は、どうしてゐるかな。」

どうかすると、「青」のことも思出しました。さうして、涙の眼を拭つて、お城が見えなくなつて了ふ頃には、主税の臉は膨れて、眞ッ紅になつてゐました。

吉良上野介には、上杉家十五萬石といふ、大きな味方がありました。上杉の主、彈正 大弼綱憲は、上野介の眞との子でした。

「もし、上野介を、上杉の本國、羽前の米澤へ連れて行つて了はれたら、もう、どうすることも出來な

い、盟約に加はつた者も、忠義の心を抱いて、空しく死んで了ふより他はない。」

内藏助には、この大きな心配がありました。そこで、吉良や上杉の方へ「敵討なんかしないぞ。」と、見せかけることが、何よりも、大切なことでした。

内藏助は、都の東、山科に落ちつくと、まづ、そこに、大きな地面を購ひました。それから、立派な家を建築しました。次に、庭を作り、藏を建てました。さうして、そこに、子孫が、永く住むやうに見せかけました。

にゐて、互に聯絡を取って、ひそかに、「敵討」の相談をして居りました。

さうかうするうちに、江戸の方の、堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛などの躍起組は、やいぐ云って、「疾く敵討をしなければならん。すぐに、江戸へおいでなさい」と、内藏助に、一日も疾く江戸に出て来るやうに催促しました。

内藏助は、十月の二十日に、山科を發つて、江戸に行きました。奥野將監、河村傳兵衛なども一緒にした。

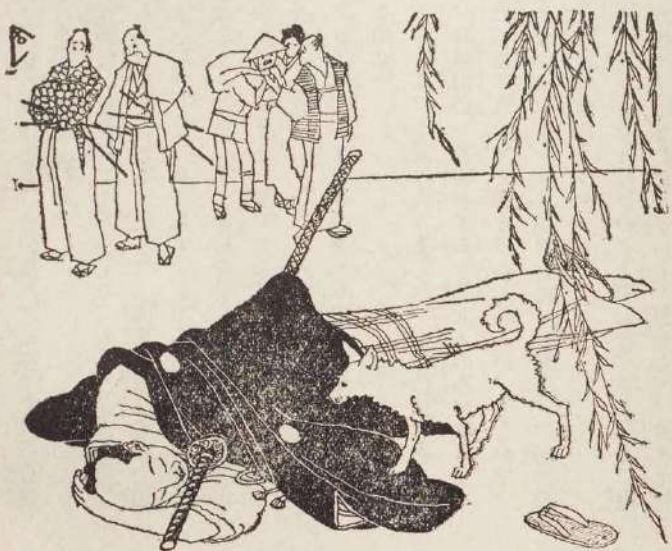
内藏助は、ざつと、一ヶ月ほど江戸にゐました。そして、安兵衛等の躍起組を慰めて、「敵討の時機は来るまで、辛抱せよ」と、説きつけたり、その「時機」の打合をしたり、または、内匠頭の本家、淺野安藝守や、親類の戸田采女正、或は、幕府役人の荒木十左衛門などをたづねて、「お家再興」——つまり、大塚頭に、内匠頭の家を立てさせて貰ふやうに運動

をしました。また、泉岳寺の内匠頭の墓にもお詣をすれば、麻布南部坂の内匠頭の後室（奥方）瑞泉院のところも、たづねました。さうして、十一月の廿三日に江戸を發つて、山科に歸りました。

あくれば、元禄十五年。はやくも内匠頭の「一週忌」が來ました。内藏助は、一人、こつそり、赤穂に歸つて、花岳寺で、内匠頭の「法要」を営みました。その頃から、上杉家では、いよいよ、多くの「間諜」を出して、内藏助の様子を探りました。

「これは、可かん」——内藏助は、いろ／＼に考を練りました。「地面を購ひ、家を建て、一生、安樂に暮さうと見せかけた位のことでは、敵は、ナカナカ、油断しない……よし、それならば」

と、きつと、決心をしました。さうして、赤穂から歸ると、思切つて、放蕩を始めました。毎日／＼料理屋へ行つて、酒を飲み、妓に戯れて、大へんな



のら／＼者のやうになりました。そして、どうかすると、往來の眞中に酔倒れて、グウ／＼、眠つてゐることもありました。

赤穂浪人であうて、あほう浪人

大石かるく、張りぬきの石

京洛の口の悪い者は、皆な、さう云つて、後指をさして、嘲けりました。

主税は、それを聞き、父の「亂行」を見ると、情けなくて、口惜涙が、ボロ／＼、流れました。そして、「思切つて、諫めて見ようか」と、思つたことも何度あつたか知れません。で、内藏助が、ぐでんぐでんに酔つたらつて、駕籠に乗つて歸つて來た時などは、「お父上……」

と、杖にすがつて、思ふだけのことを云つて見ようとしたこともありました。しかし、怵へました。「お父上が、こんな事をなさるには、何か深いお考へがあるのだらう。」

と、思ひなほして、その度に、出来るだけの介抱をしたりしてゐました。

主税は、父を信じてゐました。たとへ、内藏助が、どんな真似をしても、決して「馬鹿阿爺」とは、思ひませんでした。さうして、もちろん、去年四月、籠城のあてがはづれた時のやうに、不平でムカ／＼したり、ブン／＼、憤ツたりするやうなことはありませんでした。

それでも、やッぱり「あんな事をしてゐて、どうなるのだ」

と、いふ、不安はありました。主税には、まツたく、内藏助の「放蕩をする」眞ンとの心が解りませんでした。只、父と子との心と心が、どこかで、通じ合つて、ボンヤリ「たぶん、お父上に、何かお考があるのだらう」

と、思つてゐるだけのことでした。さうして、黙ツて休へてゐました。幸い／＼思をして、黙ツて休

「かしこまりました」

と、すなほに、そして、かந்தんに、その意味の返事をしました。

さうして、あくる日、三人の子をつれて、實家の但馬の豊岡へ歸つて行きました。

主税は、父の許に残つて、

「いくら、何んでも、お父上も、亂暴過ぎる。ひよツとすると、眞ンとに、放蕩に、お心が狂はれたのかも知れないぞ」

と、心配して、もん／＼として、一と晩、寝ないで明かして了ふやうなこともありました。

そのうちに、奥野將監を始め、小光源五右衛門、進藤源四郎など、「連判」に加はつた重立ッた人等が内藏助にあいそをつかして、だん／＼「盟約」の仲間を脱けて行きました。

けれども、内藏助は、平気で落ちついてゐました。そして、放蕩をつゞけてゐました。

へてゐました。

五月になりました。

内藏助は、だしぬけに、妻のりく子に向つて、「わしに、考がある。今日限り、離縁をする。子ども等をつれて、豊岡へ歸るが宜しい。主税だけは、もう十五歳になつてゐる、わしの方に置くぞ」と、云渡しました。

りく子は、「あッ」と呆れて了ひました。春以来、他人のやうに疎々しくされてゐても、まさかに、夫婦の縁を切られようとは考へてゐませんでした。「何故、離縁なさるのですか」——泣いて、さう、問ひつめようとするのが人情です。けれども、りく子は、武士の妻として鍛えられた賢女でした。しばらく、じつと考へてゐて、「これは、何か、深い譯があらう」と思つて、

上杉の方の「間牒」は、内藏助の此の様子を探つて「あいつは、赤穂を明渡す時に、一萬兩の金をくすねたとか聞いたが、眞ンとに然うかも知れない。何んの、あんな奴が、敵討の企なぞするものか。内藏助といふ奴は、風上に置けん大腰拔だ。もう、この上、探る必要はない。歸りましょう／＼」

と、云つて、皆な、スツカリ、安心して、江戸へ歸つて了ひました——その實、内藏助の方では、神崎與五郎、前原爲助、倉橋傳助などが、あへこへに上野介の邸の様子やなどを探つてゐたのですが……

夏も過ぎて、朝夕には、初秋の風が、スイ／＼と吹く頃のことでした。

ある日、内藏助は、稀らしく家にあて、主税を膝下へ呼よせました。そして「主税、そちも、十五になつたな」

と、無雜作に云ひかけて、さて、少し改まつて、小聲になりました。

「十五といふと、一人前の男の仲間入りをするのだ。近いうちに、元服をしなければなるまいぞ……そこで、改めて云つて聞かすが、凡そ、武士として「義」の一字ほど大切なものはない。その義も、君臣の道が、最も重しとしてあるぞ」

「それは、かねて、心得て居ります」と、いふやうに、主税は、靜に、うなづきました。

「そちは、元より、ちぎ／＼に、先君内匠頭（ごんじゆう）に御奉公申上げたといふのではないが、しかし、祖父様から父へ、三代の御恩がある。況して、そちは、初めてお目見得の折に、お馬を賜つたほど、格別にお目をかけられた……これは、忘れてはならんことだ。今こそ云ふが、父が、オメ／＼、お城を明渡したのは、犬死をせず、眞の義を盡して、先君の御恩に報ゐたく思ふたからぢや。先君の御爲に、この命を抛

そして、くどく云ふ言葉のうちから、

「嫌なら嫌で、よろしい。父は、許すぞ」

と、いふ、やさしい親心が滴るやうでした。

「お父上、死ぬ時に死なねば、末代までの恥辱だとお申します。わたくしは、眞の武士として死にたうございます。況して、殿様のお爲でございます」

主税は、涼しい眼に、マジ／＼と父の顔を見ながら、少し、にこつて、潔く云ひました。

「さうか。ム、……よく云つた。それでこそ、父が子ぢや」

と、内藏助は、けなげな我が子の心を悦んで、ハラ／＼と、涙を落しました。

そして、懐中から「連判狀」を取出して、主税の前に展べました。

「見よ、これは、先君の敵を討たうといふ、盟約の連判ぢや」

「はッ」

つ……どうぢや、そちも、父と一緒に、一命を先君に捧げようと思はぬか」

「捧げます」

と、主税は、「喫べぬか」と、云はれたものを「喫べます」と、云ふやうに、たんぱくに答へました。

「捧げるか」

と、内藏助は、少し、こたはつたやうに、念を押しました。

「はい」

と、主税は、やはり、あかるく答へました。

「これ／＼、思違をしては可かん……父は、そちに無理に命を捨てよといふのではないぞ。そちの命はそちのものぢや。どつちにしよう、そちが心任……父は、決して／＼、無理に勧めはせぬぞ。生きてゐたくば、豊岡に行つて、母につけ。遠慮は要らん……自由にせい」

その言葉も、様子も、慈悲が籠つて寛大でした。

と、主税は胸を跳らせました。そして、吸ひつけられるやうに、連判狀を見て行くうちに、「あッ」と感激して、胸が、ふさがつて了りました。

「そちも盟約に加はれ」

「はッ」

「待て／＼。今日から、主税良金と名告るのぢや。さう書け」

「はッ」

主税は、勇むで、名前を書き、指を切つて、血判しました。

さうして、父の心の底も、自分等の行く道も、ハツキリと解りました。

もや／＼してゐた心も胸も、急に、日本晴の空のやうに、はれ／＼しくなりました。

(つゞく)



自轉車發明物語

犬田 卯

岩岡 とも枝 畫

一、ドレジーヌ

エルネスト・ミシヨオは毎日學校から歸ると、北部鐵道の發車場へ行つて、機關車があつちへ行つたり此方へ來たりするのを眺めてゐるのだつた。北部鐵道の發車場は、その名の示すとほり、フランス北部地方へ出て行く列車の基點で、巴里郊外のサン・デニーに在り、實に澤山の客車や機關車が出たり入つたりしてゐるのである。

エルネストは他の子供達のやうにたゞ機關車の動くのが面白くて見てゐるのではなかつた。どうして

あんなにうまく動くのであるか、どうしてあんなにも澤山の列車を引つばつて行く力があるのか、さうしたことをちつと頭の中で考へてゐたのである。彼の家はサン・デニーの町端れの馬車製造業だつた。大勢の職人を使つて、父が先に立つてやつてゐる。或る日彼はいつものやうに夕方遅くまで機關車を眺めてゐて家に歸つた。ちようどその晩は彼の家に小さな集りがある晩で、近所に住む父の友人達が四五人もう客間に陣取つて話し合つてゐた。お客の中にはエルネストの好きな巴里の伯父さんも交つてゐた。巴里の伯父さんはエルネストの姿を

認めると、にこ／＼しながら直ぐに抱き上げて頬ずりしてくれた。

エルネストはお腹が空いてゐたので、食卓について御馳走を食べた。さうしてゐるうちにもお客達の間にはいろいろの新しい珍らしい話しがつゞいてゐた。やがて巴里の伯父さんがエルネストを呼んで、

「うむ、エルネスト、お前の好きさうな話を伯父さんがして上げよう。遂ひこないだ巴里ぢや大變な噂だつたよ。今時分またあのドレジーヌを持ち出して乗り廻した變り者が有つたんだ……」

「ドレジーヌつて何？ 伯父さん？」

「あ、なるほど、ドレジーヌたつてお前は知らないな……それはかういふもんだ。いゝか、車が二つ前と後にあつて、その上へ棒を渡し、鞍のやうなもの置いて、その上に人間が馬に乗るやうに跨り、そして足で地面をついて走らせる。前の車へは棍をつけて置いて左へでも右へでも自由に廻れる……」

あさういふものだ……」

頭のよいエルネストには、もうそれだけの説明でドレジーヌなるものが、はつきりと分つた。彼は眼をかゞやかして訊ねた。

「それでどうしたの、伯父さん？」

「まあ聞け、ドレジーヌの起りから話さう。それはな、今から三十九年ばかり前の一八一六年のことだ。(註、この發明物語は今から)巴里にドレ男爵と呼ぶ變り者があつた。その男爵が馬の代りか何か知らないが、そんな變挺なものを發明して街を乗り廻し、見物人をあつ！と云はせて有頂天になつてゐたんだ。然も十五世紀頃の古い衣装を引張り出して着てゐるんだからまるで月世界から降つて來た人間でも見るやうに巴里中が大評判だつた。それで物好きな巴里人は、早速それを真似だした。名前もドレ男爵が發明したんだからドレジーヌさ。だがもと／＼物好きでやつたんで、實用にやならない。そんなことで



何時ともなくドレジーヌに乗るものもなくなつてしまつてゐた。ところが三十九年も忘れられてゐたドレジーヌを、また引つぱり出した奴があるんだ……」巴里の伯父さんは得意さうに話して一息入れ、そしてあとをつけた。

「ところが滑稽なんだ。そいつを引ぱり出した奴はこの金持か知らんがとも立派な身装をしてゐた。十五世紀頃の着物の代りに今流行の紳士風さ。そこで奴さん、得々然と大通りを走つて行つた。ところがそつちからもこつちからも犬がわん／＼わん／＼とやつて来た。何しろ會て見たことのないものが走つて来たんだから、犬共もこいつは可怪しいとにらんだに違ひないんだ。たうとうドレジーヌに追ひついて吠え廻つたからたまらない、紳士の奴さんまご／＼しちまつて、棍も何もあつたものでない、そのまゝ溝の中へすつてんころりんとのめり込んだ始末さ、いやはや！」

みんながどつと笑つた。

「お蔭で紳士は泥すつこ、ドレジーヌは滅茶々々さ。味噌の代りに泥をつけたつてあのことだよ。あつはつは、あつはつは……」

エルネストは然し別のことを考へてゐた。彼はドレジーヌなるものを一目見たくてたまらなかつた。お客さん達が歸り、伯父さんも巴里へ歸つた夜半過ぎ、エルネストは寢床の中で、その珍らしい古道具のことを頭に描きつゞけて夜明けまでも眠ることが出来なかつた。

二、朝の不思議

翌朝、エルネストは眠い眼をこすりながら起き出し、學校へ行く支度をしてゐた。前にも云つたやうに彼の家は馬車製造業だつた。

父や職工達はもう仕事場で仕事にかゝつてゐた。その時仕事場の方をふと見ると、見馴れない立派な

紳士が入口に立つてゐる。エルネストは何気なく紳士の足許をみた。と、不思議な車だ。てつきりドレジーヌだ。

彼は仕事場の入口へ駆けて行つた。紳士が一人の老職工シブリアンと話し會つてゐる。

「これを繕つて貰ひたいんだ。出来るかね。」

「へえ、出来ますとも。雑作もないことです。」

「何日位かゝるかね？」

「左様ですね、まあ十日間……」

「そんなにかゝつちや仕様がな、一週間で出来るかね？」

「一週間、へえ……いや、やつて見ませう。」

「一週間で出来るね？」

「へえ、出来ます、必ずやつて置きます。」

「ぢや、頼むよ。」

紳士は壊れたドレジーヌを置いてとつとと去つて行つた。エルネストは考へた。これはてつきり昨

夜伯父さんが話してくれたドレジーエースだ。そしてあの紳士は、巴里で修繕するのが氣まじ悪くて、わざ／＼サン・デニーまで持つて来たんだ。ドレジーエースに乗って犬に吠えられ、泥すつこになつたのはあの紳士なんだ……」

それからエルネストは老職工シブリアンに訊ねてみた。

「これ繕ふのに一週間もかゝるの？」

「なかに、坊ちやま！ そんなにかゝるもんかね。」
老職工はにこ／＼して答へた。「さう云はないとお金にならないからね。」

「直ぐ直せるか知ら？ 僕が乗つてみたいんだから……」

「乗つてみたい、物好きな坊ちやんだから……よし、學校から歸つたら、ちやんと直して置いて上げる！」シブリアンは請け合つた。

エルネストは學校へ行つたが授業なんか身に入ら

て地面を足でついでみた。おゝ！ 走る！ 走る！ こいつは面白い！

彼はこの悦びを一人で味つてゐるには忍びなかつた。早速友達達のレオン・デイネルを呼びに行つた。

「レオン君、今日學校で僕が話したドレジーエースが出来たんだ。一しよに乗らうよ！ 僕はもう乗つてみたんだ……」

早速レオンがやつて来た。レオンは團子のやうに肥つて少しのろまな少年だつたが、悪戯にかけてはなか／＼人後に落ちない。ドレジーエースを見るや、よし来た！ とばかり、彼は鞍へ跨つた。

「棍棒をしつかと持つて、足で地面をついで御覽！」
エルネストが云つた。

レオンは云はれたやうにやつた。なるほど走る！ 走る！ こいつは面白い！

老職工シブリアン始め、多數の職工達が仕事場からこの珍らしい光景を眺めてゐた。二人の少年は交

なかつた。時間が過ぎるや、矢のやうに走つて家へ歸つた。

ドレジーエースはすつかり修繕されてゐた。仕事場の裏には少々広い庭がある。エルネストは鞆を部屋へさらへ投げて置いて、庭へドレジーエースを持ち出した。

ところが父親に見つかつてしまつた。

「エルネスト、何をするんだ！」

エルネストはびつくりして言葉もなかつた。

「そんなもの持ち出して、そりやお客様のものぢやないか、壊したらどうする。止せ！ 止せ！」

睨めつけられて仕方なしに、エルネストはドレジーエースを措いた。が、うらめしくて仕方がなかつたところが、いゝ具合に、父親は用事があつて外出した。

エルネストはうまいぞとばかり、またドレジーエースを庭へ出し、そして馬に跨るやうに鞍の上へ乗つ

る／＼乗つた。そしてエルネストはもう上達し、庭を一周することさへ出来た。が、團子の如きレオン少年にはまださう旨くは行かなかつた。たうとうお調子に乗つて、いと強く地面を突き、くる／＼／＼と走つて行つたはいゝが、小石につまつてあはやと思ふ間に蛙をへしつぶしたやうに四つん這ひになつてしまつた。

幸ひにして怪我はなかつた。が、レオン少年はいゝ切つて、そのまゝ家へ歸つてしまつた。

エルネストも父親が歸つて来さうなので、そのままだドレジーエースを措いた。それにしても彼はそれ切りドレジーエースのことを忘れてしまつたのではなかつた。彼は考へてゐた。何とかして地面を足で突くなんて方法でなしに旨く何處まででも走らすことは出来ないものであらうか？ 足で突くのでは突いただけの力を走ると止つてしまひ、また突かなくてはならない。然るにどうだ、あの機關車は？……足で



突かなくてもあんなに旨く動き、あんなに力があるではないか。

三、成功！ 成功！

エルネストは考へた。學校から歸ると直ぐに北部停車場へ行き、穴のあくほど機關車を見て研究し、飽きると歸つて来て庭へドレジーエヌを持ち出して遊んだ。そしてその度毎に父親に叱られる。

「エルネスト、またそんなものを持ち出す、復習もしないで遊んでばかりゐる！」

考へても／＼考へつかなかつた。夜眠つてゐても彼はそのことを考へつゞけて夢にうなされた。三日四日……でも、いゝ考へが浮ばない。ところが五日目の晩であつた。彼は真夜中にふと眼をさました。一つの形が彼の眼底に刻みつけられてゐた。それはZ字に似た形である。

「占めた！」と彼は思つた。「これだ！ 機關車が蒸

氣の力で車を動かす形を、心棒を中心にして描いてみると、これに似た形になる。」

翌日は學校が休みだつた。エルネストは仕事場へ行つて、老職工ジブリアンに云つた。

「をちさん、僕たうとう考へついたので！ ドレジーエヌを足で突かないで動かす方法を考へついたので！」

さう云つて彼はクレエオンを取つて壁へその形を描いた。(挿圖参照)

父親もそこへ来て、エルネストの書いた圖を眺めてゐた。

「これを心棒へ嵌め込むんだ。そして足で踏めば車はひとりで動く！」

老職工ジブリアンは直ぐにその方法を理解して手を叩いた。

「そりや素的々々！ 坊ちゃん萬歳！」
然し父親は理解しなかつた。

「何が動くもんか。そんなことはどうでもいゝからさあ、復習をやれ！ 復習を！」

然しエルネストはジブリアンに云つて鐵棒を圖の如く曲げて貫ひ、ドレジーエヌの前輪へ取りつけて鞍の上へ跨り、兩足をそこへかけて踏みはじめた。

おゝ、何といふ奇蹟！ ドレジーエヌは足で突かなくとも、くる／＼／＼と走り出した。職工一同これを見てわあ／＼／＼とはやし立てた。かうなるといくら頑固な父親でもエルネストの神の如き考案に賛成しないわけには行かない。

「うむ、こいつなかく／＼味をやつたわい！」

エルネストは早速レオ君を呼びに行つて連れて來た。レオンはこないだの轉落にこりて再び乗らうとは云はなかつたが、エルネストの巧妙な工夫でドレジーエヌがひとりで動き走のを見ると大喜びに喜んだ。そしてたうとう堪らなくなり、エルネストに眞似て自分でも乗り出した。



二人の少年は次の日も
 学校から歸ると改良され
 たドレジーヌに乗つて
 遊んだ。だが、七日目が
 來てしまつた。このドレ
 ジーヌは自分達のもの
 ではない。あの紳士がお
 金をもつて受取りにやつ
 て來るだらう。
 『つまらないな、持つて
 行かれちもうなんて！』
 エルネストは云つた。と
 ころがレオ君は、
 『いや、大丈夫だよ君！
 …』といふのであつた。
 『金持ちの旦那なんでも
 のはいろ／＼他に慰みが

あるんだから、そんなドレジーヌのことなんか忘
 れてしまつて取りにやつて來やしないよ！ ドレジ
 エーヌは僕達のものになつちもうよ！』
 云ひ終らぬうちに紳士がやつて來た。
 『約束の日だ。ドレジーヌの修繕は出來てゐるか
 え？』
 二人の失望ははたの見る眼も氣の毒なほどであつ
 た。紳士はポケットから金をつかみ出して拂はふと
 したが、そこへ老職工シブリアンが出て來て、エル
 ネストがいかに巧妙に工夫を加へたかを言葉短かに
 説明した。と、紳士は感に堪へぬやうにドレジー
 ヌを眺めて、それからエルネストの肩を叩いた。
 『うむ、君は天才だ！』
 紳士——ロオズレー子爵は出した金をポケットへ
 仕舞つて、更にエルネストに云つた。
 『君、これへ乗つて見せてくれ給へ！』
 そこでエルネストは北部停車場の鐵路傳ひにつゞ



いてゐる眞直ぐな往還へドレジーヌを持ち出して
 乗つてみせた。それは大成功だつた。地面を突く代
 りにペダルを踏んで十米突でも三十米突でも百米突
 でも走つて行く。
 ロオズレー子爵はじめ、シブリアンもエルネスト
 の父親も見物人も、この巧妙な乗物に感嘆してしま
 つた。子爵はエルネストが乗り戻つて來るや否や、
 自分の息子のやうに抱き上げて云つた。
 『君は天才だ！ 褒美にこのドレジーヌは君にや
 る！』

一八六七年の博覽會にミシヨオ家ではいくらかこ
 れに再び改良を加へて出品し、世間から大歓迎を受
 けた。その後幾多の人々によつて改良に改良が加へ
 られ、木製の車輪も鋼鐵製となり、今日見るやうな
 ものになつたことは諸君すでに御承知のことであら
 う。(をばり) (ライバル・ロオズ、三〇七に依る)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

あさ

増田 實 (美瑛)

さあらし小笹の

ゆれる朝

花の雨つぶ

ゆれる朝

ゆれゆれ雨つぶ

ひかる朝

秋

檀上 春清 (和歌山)

稲はかられて

畦豆は

こそばい

揺れてゐる

日はあたくかく

掛け稲に

鴉かかを

ないてゐる

畦のさいかち

おいしいか

窩雀がだれて

食べに来る

島

武田 幸一 (福岡)

沖の小島が

るねむりしてる

とろりとろりと

るねむりしてる

千鳥ちろちろ

春の日ながい

浪にゆられて

るねむりしてる

もう出て来い

森 ほたる (愛知)

かくれんぼかくれんぼ

もう出て来い

げんげ煙げんげ煙

七〇

もう寒い

暗なる暗なる

もう出て来い

げんげ煙げんげ煙

もう出て来い

ながれ

佐々木和子 (廣島)

ちろちろちろ

をがはのながれ

ちろちろちろ

ながれのはやこ

ちろちろちろ

こどもがおへば

ちろちろちろ

くさのねへはひ

ちろちろちろ

をがはのながれ

た

わらび山

土居 斬花 (愛媛)

たんたら草山

わらび山

お山の霞は

昨日今日

ゆつたり重そに

流れてる

たんたら草山

わらび山

お山のきどすは

昨日今日

わらびがもえたと

鳴いてます

お目々

佐藤 緋出緒 (東京)

うさぎのお目々は

あーかいお目々

眞晝とろく

ねむたいお目々

お馬のお目々は

大きなお目々

坊やのかほが

うつつたお目々

坊やのお目々は

可愛いお目々

父さんおひざで

笑つたお目々

一軒家の夜

八重樫 草笛 (東京)

電氣の来ない山奥の

山の一軒家は

しづかだな

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

サヤサヤと

お窓の草の葉

七一

背戸で鳴きや

お馬も厭で

眼を覺まし

さびしくお月を

ながめてる

つばくろめ

川島 秀雄 (東京)

サンサン

雨の中

くぐつて

つばくろめ

サンサン

雨の中

ぬれのれ

飛んた

つばくろめ

かやかり

小堀 義夫 (群馬)

ちよろり

かや野はあけの星

はいはい

お馬はつゆのみち

さらさら

かやの穂あさのかせ

ゆれては

なびくかや野原

お馬と

かやかる人のかげ

七夕

林 宵 雨 (東京)

笹ふれ 笹ふれ

笹振れば

雨降りたんぼの

雨も止む

今日は七夕星祭

雨が降るから星が出ぬ

笹ふれ 笹ふれ

笹振れば

雨降りたんぼに

星が出る

裏のほそみち

廣瀬 正 (茨城)

裏のほそみち

じめじめ

くろい

くろい土ふんで

雀が飛んだ

雀 小雀

また来て

おりた

裏のほそみち

椿がおちる。

草みち

種田 實 (東京)

夕立はれた

虹の輪 まるいな

たんばはぬれて

そよそよ風だ

畔道行くと

いなごがとんだ

ざうりが濡れた

草道長い

七二

虹の輪 消えるな

ざうりが重い。

ちんころ小猫

市川 博江 (京都)

ちんころ ちんころ

ちんころ

ちんころ 小猫は

かはいいな

お首に 小さな

すざさげて

ちんころ ちんころ

あるきます

ちんころ 小猫は

かはいいな

ちんころ ちんころ

あるくたび

すゞの なるのに

じやれて みる

ちんころ 小猫は

かはいいな

蟹の子

千葉 仔細 (東京)

子供の蟹つ子だ

横ちよに

ちよろり

ちつちやい敏だ

しよつてみた

ちよろり

もらつたの

かつたの

かくれた

ちよろり

石ころ影だよ



しやがんでた
ちよろり

雀と露の臺

吉川 行雄 (山梨)

お日様 おつとりこ

丘の露の臺こつくりこ

親子で うそを

夢見てる

ヒヨッコロコと雀が

空から

飛んで出た

お日様 おつとりこ

親子の露の臺こつくりこ

雀も つい つい

こつくりこ

こつくりこ 三人

いんちんち

寝ちまつた

若葉の山みち

島村ちぐさ (群馬)

若葉の山みち

日でり道

つちがま赤に

咲いてゐる

若葉の山みち

うねりみち

小蛇がニヨロニヨロ

逃げてゆく

わか葉の山道

見返せば

ふもと流れる

川白



（前號迄の経緯）行衛知れぬ父を尋ねて、巡邏の旅に出た春之介と赤格の二人は、途中種々の苦しみを経験し、母には死に別れ自分達は海賊に捕まり、まさに殺されぬとす時、すきな組つて危い所を逃げ出しました。その時助けてやつた大阪の役人の家に養子となつてゐる中、その養父の役人は海賊赤格子の爲に殺されたので、春之介は直ぐに仇討しようとするが、不思議な盜賊、臙ろ惣兵衛が飛出して、赤格子と戦ふ始めました。

白帆の唄

小城 庄一
寺内 萬治郎 畫

邸の中の騒ぎも城裏の此處までは聞えず、凄じ程静まり返つた四邊の空気を破つて、チャリン／＼と響き渡る烈しい刃の音。一方は名代の海賊、赤格子九郎衛門、相手は中國、大阪の道筋かけて役人達の臙を冷やさせた盜賊、臙ろ惣兵衛。悪事の功名争ひから命がけの勝負です。そしてその後から少年春之介が刀を引抜き迫り寄つてゆきます。

を洩れ縫ひ乍ら、細々たる三ヶ月が顔をのぞかせました。微かな光りが地上を照らします。

「えい！」鋭い氣合。それは臙ろ惣兵衛が打込んだ掛聲の響です。

「何をッ」

赤格子はせせら笑つて、バチンと跳ね返し、「それッ真二つだッ」と斬り下ろした太刀風の物凄さ。流石の惣兵衛も受けきれずあはや顔から血をふいて倒れたかと思はれた間一髪、

「やあッ」と、赤格子の背の所に春之介の刃が躍りました。

前にはかり氣をとられてゐた赤格子は、この不意の斬込みに餘程驚いたと見えて、今惣兵衛の頭に振り下ろさうとした刀を宙に止めた儘、びゆつと横に飛びました。全く危い所で、今一寸春之介の斬りこみが遅かつたら惣兵衛はやられたでせうし、又今一寸逃げ方が遅かつたら赤格子は背を斬られて倒れて

ゐたに違ひありません。惣兵衛とても忍びの賊と言はれた早業の男です。それを前に廻して子供の様にあしらひ、而も不意に後から、少年乍らも陀羅尼仙人に敵はつて劍術に丈けた春之介の一心こめた太刀風を、巧く躲した赤格子は、餘程の達人と見えます。

「何奴ぢや、卑怯な」

赤格子は怒つてどなりました。

「養父の仇だッ、覺悟しろ」

春之介は大丈夫止めるものと思つた最初の一撃を外されて、いらだちつつ、大聲に叫んで刀を構へました。すると今度は臙ろ惣兵衛が、

「仇が何か知らぬが、俺達の折角の勝負を邪魔すると承知せぬぞ。おい赤格子、こいつから先に片づけ、ゆつくりやらうではないか」

と、言ひ出しました。

「よからう」

そこで二人の賊が春之介に刃を向けて迫りよつて

來ます。

「待て、待つて下さい、臆る惣兵衛殿。私はいつかあなたの御恩になつた春之介です。養父の仇を討つのですから、どうか手を出さないで下さいませ」

一生懸命の春之介の言葉を聞くと、惣兵衛はぎつくりして、じつと顔を透かして見ましたが、

「お、それではいつぞや姫路の城下で父を尋ねて旅してゐたあの三人親子の子供だな」

さう言つた聲は何故か懐へてゐました。赤格子も「春之介」といふ言葉に、ひよいと刀を下ろして少年の傍に寄つて來ましたが、

「やつ！ 貴様は惣兵衛との戦のどさくさにまぎれて俺の船を逃げ出したあの小僧だな。いい所で會つた、ぶち斬つてくれる」

と叫んで、刀を取直した時、
「赤格子、貴様は自分の子を殺すのか」
と、惣兵衛の烈しい聲が響きました。



「そんな事はない、それは何かの間違ひだ」少年は心の中で叫んで、強く頭を振りました。が、眼はひ

「えッ？」意外な言葉に、赤格子も少年もはつと打驚きました。

「自分の子とは？」

赤格子の奮る聲を抑えて、惣兵衛はゆつくりと、

「赤格子九郎衛門とは世をしのぶ假りの名、貴様の本當の名は梶原長兵衛といふのだらう」

「それをどうしたのだ」
「もとをただせば伊豫松山藩の武士。海賊百合若大次郎を匿つた爲に國を逐はれ、世を呪つて百合若と共に海賊をはじめたといふ事をちやんと俺は知つてゐる」

惣兵衛はいよ／＼落着いて言ひます。春之介は「さては！」といふ、何だか今までぼんやり考へてゐた恐ろしい事が、事實となつてはつきり眼の前に現はれた様な氣がして、眼が眞暗になりました。かつて自分を死刑にし様とした時の赤格子の意味ありげな言葉がちら／＼と頭を掠めます。

きつり、口はこぼはり、身體さへがた／＼と慄へます。

「いかにもさうだ」赤格子は答へました。

「國を出る時、貴様は妻子三人を残しただらう。姉の名は峯枝、弟の名は春之介といふ筈だ。その三人が父をたづねて巡禮の旅に出た途中、ふとした事がかかり合ひになり、俺が危難を救つてやつた事がある。其時、その行衛知れぬ父の名を問へば、梶原長兵衛といふ。俺は餘りのいたはしさに、お前達の父の梶原は赤格子といふ海賊だとは言ひかねて、今船乗りとなつて海で暮してゐる。大阪へ行けば何時かは逢へるかも知れぬとなくさめて別れた。不憫な親子だつたわい」

「ええッ。ではその我が子が此處にゐる春之介だつたか」
刀を投げ捨てた赤格子は、呆然と突立ちました。が、それよりも惨めなのは春之介です。

「違ふ、違ふ、何かの間違ひだ。私の父上は赤格子
なんて……そんな……そんな悪い者とは違ふ」
狂ふ様に叫んで地面に膝つくつと、わつと泣き出し
ました。

暫く腕を組んで考へ込んでゐた赤格子は、つかつかと歩み寄つて、少年の腰に差しした小刀を抜き取りました。鞘を拂つてほのかな弦月に照らして見ると粉ふ方ない備前長船の名刀です。更に目釘を外して銘の彫つてある所をよく見ると、あり／＼と刻まれた自分の筆蹟に、

「あゝ！」と赤格子はよろめきました。

二

「不思議な巡り合はせだ。赤格子、俺はもう争ひをやめる。哀れな子供をいたはつてやれ」

惣兵衛は、じつと腕をくんで涙をのみました。赤格子の榎原長兵衛はその聲に觸まされて、少年の傍

ふれ合ひ……。何方からともなく、ぐつと手は握りしめられました。

「は、は、春之介……」

唯それだけ言つたきり、赤格子の言葉は咽喉にまつて、切ない涙が流れるだけです。

「お父上様！」

少年は轟としがみつきました。

もう其處には養父への義理も、重なる怨みも、人目も何もありません。永の年月、この日、この時を希つてこそその苦勞。仇が何でせう。悪人が何でせう。親と子、血と血、肉と肉、それだけがあるばかりです。

「して母様はどうなされた。峯枝は何處にある」

暫くして長兵衛は、涙を噎り上げて聞きました。

少年は尙泣きつつ、

「母上は大阪につくと直ぐ病でお亡くなり遊ばしました。姉上は矢張り私と同じく此の邸に貰はれて、

に歩み寄り、

「春之介、悪かつた許してくれ。一日とても忘れる事の出来なかつた可愛いお前に、斯んな浅ましい巡り會ひをしようとは思はなかつた。許してくれ、な、この生みの父が手をついて謝る」

その聲には、苦しみとも懐しみとも又悲しみとも嬉しさともつかぬ、絡み重なつた肉親の深い心の響きがありました。そして赤格子はべつたりと大地に手をついたのでした。

それを見ると、又春之介の心にも何とも言へない複雑な氣持が湧いて來ました。

「勿體ない、お父様！」

それはたつた一分の間に、自分でも氣づく事の出來ぬ大きな心の變り方でした。少年は、大地に仕へた長兵衛の手をとつて、地から上げようとしたのです。そのせつな、びつたりと手と手が重なり合ひました。血を分けた温い身體と身體との、絶えて久しい

今では水澤の娘です」

「たつた一目でもいいから會ひたいなあ——」

「父上はお會ひなされた筈です」

「何といふ？」

「それ、あの船の中に押し込められて追使はれ、後で私と一緒に小舟で逃げた女が姉上です」

「ええッ！」

重ね／＼の事に、長兵衛はもう悪夢にうなされてゐる様な氣持です。

「何といふ俺は呪はれた人間だ。憶れ慕ふ二人の子供を、二人乍ら苦しめたとは……」

呻く様にさう言ふと、頭をかきむしつて長兵衛は地に倒れました。

「父上様、どうぞ／＼心を改めて正しい人になつて下さい、お願ひです」

「いいや、もう今となつては遅いのだ……あゝ、取返しつかぬ恐ろしい事になつて了つた……」

その時、突然、惣兵衛が聲をかけました。

「おい、捕手が来たぞ！」

聲に驚いて、二人がはつと振向くと、怪しい人影と見てか、一人の役人が十四五人の捕手を引連れてこちらに走つて来ます。

「うむ、如何に運命が迫つたとは云へ、俺はまだ木ッ葉役人の手にはかからぬ」

長兵衛はすつくと立上つて、刀を取りました。その様を見ると何思つたか、春之介はいきなり小刀を拾つて腹に突刺さうとします。

「な、何をやる」

躍りかかつて長兵衛は小刀をもぎとりました。

「止めないで下さいませ、父上様。私は役人水澤文之丞の養子です。恩を思へば仇を討たねばならず、仇を討てば生みの父に逆らはねばなりません。春之介はもう母上様のお後を慕ふより外に道がないのです」

「よく判つた。だがお前を死なせ度くはない。せめての罪亡ぼしに此父は、お前と峯枝の手にかかつて縛られよう。さうすればお前達の義理も立ち、又此の父の心も済む。さあ、峯枝を連れて海岸に来るのだ。判つたか」

さう言ひ捨てると長兵衛は、捕手の方に向つて走り出しました。

「何奴ぢや、貴様は？」

先に立つた役人が咎めると、長兵衛は冷笑つて、

「俺はたつた今水澤文之丞を撃殺した海賊の頭、赤格子九郎衛門だ。今から安治川尻の海岸に繋いだ船に歸る所だが、俺の首が欲しくば、何百人でも連れてやつて来い、戦つてやらう」

と言ひ捨て、餘りの大膽さにおしけ立つた役人を尻目に向け、飛ぶやうに月夜の路を走り去りました。

惣兵衛はその間に、ぼんと少年の肩を叩いて、

「おい、今父上が言はれたやうにした方がいいぞ。切腹などしては義理も立たず又た生みの親へも不孝だから」

と言ひ含め、ひらりと塀へ飛上つて、蝙蝠の様に姿を消して了ひました。

三

「それ、赤格子を捕へろ」とばかり、安治川尻の海岸に數百人の役人隊が駆けつけたのは、それから暫く後の事でした。

海賊の方でもちやんと用意したものと見えて、本船から頻りに鐵砲を撃ち放



るといふ事を姉に話してゐませんでした。

して戦ひます。沖の方は舟手方役人が漕ぎ出した數知れぬ小舟が、提灯の灯りを海に映して、右へ左へ動いてゐます。砂濱は砂濱で御用提灯の津波です。戦ひが次第に烈しくなつて來ると、必死になつた海賊は陸へ陸へと小舟を漕ぎ寄せて砂濱の上は繪に見る様な凄まじい亂戦となりました。

姉の峯枝の手をとつて春之介が駆けつけたのは丁度其頃でした。

春之介は、未だ赤格子が自分達の父親原長兵衛であ

「姉上、私達二人で赤格子を捕へるのですよ」少年は強く囁きました。

「だつてあんな強い男を私達だけで……」
峯枝は恐ろしさに顔色を變へてゐます。

「いいえ、命を捨てても捕へねばなりません。養父文之丞様の仇討です」

二人がさう話してゐる時、向ふの高い砂丘から、緋色の燃える様な陣羽織に大髷の髪を振亂し、胸には鎧胸をあて腰には垂直の下に野袴を着た大將らしい大男が、血刀を振り振り、誰かを見つめるやうな眼ざしで、近づく捕手を斬り拂ひつつ此方へ走つて來るのが見えました。言はずと知れた赤格子です。

「それ、あれだッ」

春之介は懐から捕縄を出し、一條を峯枝に持たせて、手をひいて走り出しました。

「危い〜」捕手の役人達が叫ぶのを耳にも入れずまつしぐらに突進んで赤格子の前に立塞がると、び

ゆつと繩をしごいて打かけました。

「お、よく來てくれた」

二人の姿を見ると、赤格子は低く叫んで、打ちかかる繩を拂ひもせず、吾と自らくる〜と巻かれま

す。

「姉上、早く」

せき立てられて峯枝も、直ぐに繩を投げて巻きつかせました。赤格子はどつかと安坐をかいて、

「春之介、峯枝、顔を見せてくれ、此世の名残だ」

春之介は峯枝の手をぐいと引張つて赤格子の前に出つつ、耳に口をあてて、

「姉上、探し尋ねた生みの父上ですよ」

「峯枝、濟まなかつた。赦してくれ。わしがお前達の父長兵衛なのだ」

二人から代る〜言はれて峯枝はそこに立慄みました。が、直ぐに兩手を顔に當てて、

「お父様！」といふなり、ばつたりと砂の上に打つ

伏して聲を放つて泣きました。

「赤格子が捕まつたぞ」

小躍りした役人達はどつと三人を取巻き、夢中になつて騒ぎ立てます。春之介は、泣きくづれた姉を無理に引き起し、自分は涙をかくして大聲に、
「御船手方與力(役名)水澤文之丞の一子、水澤春之介、只今海賊赤格子九郎衛門を召捕つた」

と叫びますと、どつと一時に喚聲があがりました。頭がやられたと知つて乾分の賊共はめい〜海へ飛込んだり、自害したり、縛られたりして、さしもの戦も手もなく役人方の勝利になつて了りました。

「さあ、二人で繩をひいてくれ」

さう言つて起立つた長兵衛の眼には嬉しさうな涙が溢えられてゐます。三人は變と暫く顔を見合はせました。周圍をかこんだ役人達は變な顔をしてゐます。

「赤格子、立ちませい」

春之介はもう一度高聲で叫びました。そして赤格子を先に立てて、繩尻を取つた峯枝と、春之介の手は何れもぶる〜と慄へました。

海賊船には何時の間にか火がかかつたと見えて、紅い焔が天を焦がし、それが海面に映つて、まるで血を流した様です。

いたいけな子供の身で、養父の仇を取つてあの恐ろしい海賊を捕へた、といふので、大阪は愚か近郷近園、姉弟の噂は高く擴がりました。

問もなく赤格子は、獄門鼻首になりました。

けれ共その頃は、姉弟の姿は大阪には見えませんでした。

哀れな二人はこつそり邸を脱け出して、あの静かな故郷の濱邊の村に立歸り、蒼く廣い海の前で、毎日白帆の姿に寂びしい涙を絞つてゐたのです。

(をばり)

山羊

平木二六

岩岡とも枝畫

山羊の母さん

草のうへ

紅いお乳首が

垂れてます

けふは

めでたい



お祝ひ日

かはい

坊やの

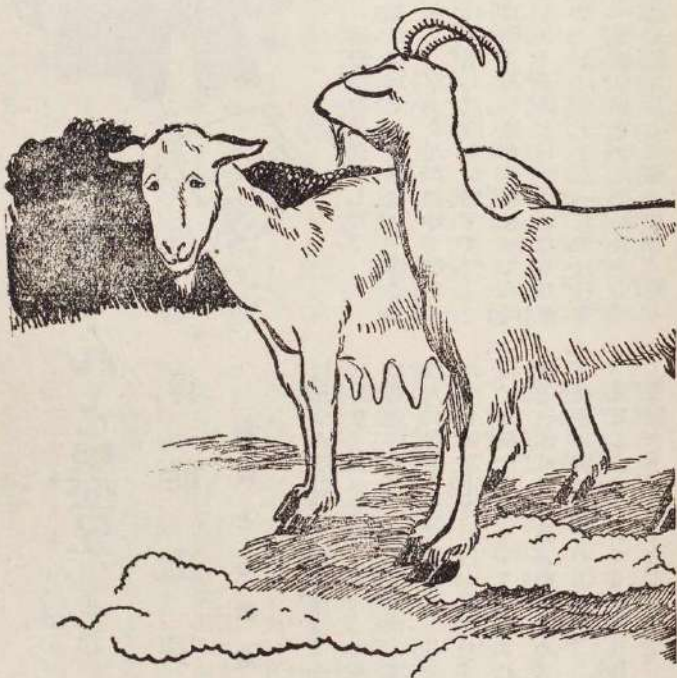
うまれる日

山羊の父さん

うれしなき

白いお髯が

をびります





京子さんと黒豆 (推薦)

得能愛子

岩岡とも枝 畫

京子さんは、色の淺黒い鳩の様な眼をした活潑な可愛い子供です。お兄さんの廣さんは、青白い顔をして、極く内氣なおとなしい惘然な子供でした。京子さん廣さん達のお父様は、昔の武士氣質な頑固一徹な、けれど又一方極く親切なかたでした。お母様は、ほんとに女らしい、優しい思ひやりの

深い惘然なお母様でした。これは京子さんが七ツ、廣さんが九ツ、京子さんが初めて尋常一年に入學した時のお話です。京子さんの家から學校まで八町あまり、子供としてはかなりな道程で、まだ京子さん一人では往き歸へりが出来ませんでしたから、朝はお兄さんと一緒に往き、歸り

は兄さんのひけるのを待つて一緒に仲良く歸へるのでした。お父様は昔風の人でしたから、決して此二人に金銭を持たせませんでした。金銭を小さい内から持たす事は、人柄を卑しくすると申されて鉛筆一本紙一枚買ふ時も、わざわざ女中を買はせるのでした。或日二人は、いつもの様に仲良く學校から歸らうとしますと、朝

出る時あんなに快よく晴れてゐた天候が、だん／＼曇つて来て、はてはぼつぼつと雨が降つて来ました。二人はどうしようと思ひました。雨具の用意を何もして来ませんでした。今に家から誰れか傘でも持つて来てくれるだらうと思つてしばらく待つて見ましたが、なかなか来さうにもありません。大した雨でもなし、少し急いで歸る事にしました。二人は道々今日學校にあつた事を話しながら、學校から少し離れた坂の下の曲り角の處まで来ますと、辻侍の車夫が、「坊ちゃん、お嬢さん、車に乗りませんか。雨が降つてつめたいでせう。」と申しました。

電車や自働車など一つもありません。繁華な街の角に車屋がゐて通行する人に聲をかけて、乗せて居たものです。その辻侍の車屋が、何と思つたか、此小さい二人に聲をかけたのです。二人は、始めはびつくりしましたが、何んだか見た事のあるやうな此俵夫を見つめました。俵夫はもう一度「お嬢さんお乗なさい。お家まで御送りませう。」と申しました。京子さんはお兄さんと顔を見合せました。そして申しました。「お兄さん、あんなに親切に、俵夫さんが云ふんですもの、乗つて行つて上げませう。お母様が人の親切を無にしてはいけませんとおつしやつたでせう。」と申しました。

廣さんは少し考へてゐたやうですが、「うん、さうしよう。」二人は車の中で、大得意で、唱歌を歌ひながら、いつも違ひ道も、少しの間にかへと着きました。門から玄關までの敷石の上を威勢よく走つて「お歸り——」と大きな聲で、いつもお父様のお歸りの時の様に、俵夫さんがどなたの時など、二人とも急に偉らくなつた様な氣がして、手をたたいて喜びました。家の中からは書生の清田さんが驚いた顔をして出て来ました。二人は得意然と、車から降りました。雨はもう晴れて、夕陽が二人の上を照つてゐました。お母様もびつくりしたお顔をして、

「まあ廣さん、京子さんも、どうしたの。どこか悪いの？」と申されました。二人は俵夫さんがあんまり親切に云つたから、乗つて来て上げた事を申しますと、お母様も清田さんも、お腹を抱へて笑ひました。俵夫さんは少し氣まりの悪い顔をしてゐました。

お母様は俵夫さんに何程ですかと聞いて、お錢を拂はれました。京子さんは驚いた顔をして「あらやつぱりお錢出すの。」と申して又皆に笑はれました。俵夫さんは間の悪さうに急いで歸つて行きました。夜になつて、お母様はお父様にこの事をお話しなさいました。いつもむつちりした顔をしたお父様も、思はずお笑ひになりました。

した。
あの美味しさうなびか／＼艶のある黒豆を、京子さんは暫らく見詰めて、それこそ豆ほどの涙が出さうでしたが、大急ぎの時でもあり、きまりも悪いので、やつとがまんして御飯ばかりのお辨當を押し込んで、教室へ入りました。
けれど京子さんは、先刻のお豆の事が氣になつて、いつもの様にお勉強にも身が入りません。お遊び時間の時も、一人でそつと先刻の豆を見にいつて見ようかしら、もう小使さんが掃除してしまつたかしら、それとも犬でも這入つて喰べてしまつたかしら、けれどそれより一番心配な事は、お辨當の時に、何んで御飯をたべようかと

こんな事をして居る内にも、だん／＼日が経つて、其後京子さんも、一人で學校へ行ける様になりました。長い夏休みもすんで、又二學期の初めになりました。京子さんは又嬉しい事が一つふえました。それは京子さんが入學した時から待つてゐた事、學校でお辨當をたべるやうになつた事です。京子さんは嬉しくて耐まりません。いつも學校へ行く途々も今日は何んのお菜かしら、大好な黒豆かしら、それとも鮭かしら、お玉子かしら、と考へながら行くのでした。そしてある朝京子さんはいつもより寢坊をしてしまひました。大急ぎでお道具を風呂敷に包んで、大急ぎで學校へ走りまゐりました。勿論大

いふ事です。
とら／＼そのお辨當の時間が来ました。先生はいつもの通り優しく教壇の上に腰かけて、
「さー皆さん、静かによく噛んでお上りなさい。」と申されました。
京子さんはもう仕方がないから先生に申上ようと決心しました。赤い顔して、京子さんが手を上げた時、先生は不思議さうに
「京子さん何ですか。」
京子さんは今朝の出来事を申しました。先生は笑ひながら
「それはこまりましたねー」と少し考へてから「ああ京子さん、あなたのお兄さんは何年ですか。」と申されました。
京子さんはどうして先生がそんな

88
事なお辨當は忘れませんでしたがあんまり急いだもので、風呂敷がぐざ／＼になつて、中から筆入れや、お辨當が落ちさうになるので手でしつかりおさへながら、走つて行くのでした。

其の時分は今と違つて、男の子の他は皆な風呂敷に包んで、手で抱へて行くのです。で京子が學校の門へ着くと同時に、始業の鐘が鳴りました。京子さんはもう夢中です。下駄箱の處まで飛んで行きお荷物を下にをき、上草履を穿きお荷物を持たうともち上げた拍子に、ぐざ／＼の包の内から、大事なお辨當が飛び出して、京子さんの大好きな黒豆が、ころ／＼とたたきの上に皆な飛び出して終ひま

な事お聞きになるかと思ひながら「三年です。」と申しますと、先生は「それは丁度近くてよいです。一つ置いてお隣りだから、いつてお兄さんにお菜を半分戴いていらつしやい。」と申されました。
京子さんは一人で行く事が随分こまりましたが、何しろお腹もすいてる事ですし、大好なお豆でもあり、それに先生のおいひつけですから、すこ／＼お辨當の蓋を持つて、三年の男生の教室まで行きました。
こは／＼教室の戸を開けますと中では今齡老いた瘡せた脊の高い先生が、お辨當を半分ほど召し上つた處です。びつくりして戸口をごらんになると、一年の女生徒が



お辨當の蓋を持って立つてゐるの
で、先生は静かにお辨當の蓋をし

て歩いていらつしやいました。ど
うしたのです。何しにきたのです

か。」とお聞きになりました。
京子さんは先生から申された通
りお答へしますと、先生は又笑ひ
ながら「ちやあ半分お兄さんに貰
つていらつしやい。」と申されまし
た。他の生徒達は皆なくす〜笑
つてゐます。京子さんはどこがお
兄さんのお座かと思廻しますと、
皆なの笑つてゐる中で、可哀さう
にお兄さん一人、まつ赤な顔して
下をむいてゐます。京子さんもや
つと思ひで、お兄さんの傍まで
行つて、小さい聲で
「お兄さん、お豆半分頂戴。」と申
しますと、お兄さんは黙つてにら
みつけました。京子さんは困つて
少し大きい聲で
「だつて、私しらすにこぼしたん

ですもの。」と申しますと、又近所
にゐる子供はくす〜笑ひまし
た。お兄さんは眼にいつばい涙を
ためて、いつにない突慥どんに
「ばか、誰れがやるもんか。」とお
辨當の蓋をしてしまひました。
京子さんは仕方なく、すご〜
お教室へ歸つて來ました。先生は
わざ〜京子さんの歸るのを待つ
てゐて下さいましたが、京子さん
が空ばの蓋を持ってべそかいて歸
つて來たのを見て、笑ひながら先
生のお菜の銚を、半分下さいまし
た。それでやつと思ひでお辨當
もすみしました。授業もすんで、歸
る時間が來ました。京子さんは早
く家に歸つて今日の事をお母様に
申さうと思ひながら、急いで歸つ

て行くと、先の方に兄さんが一人
下をむいて行くのが見えます。
京子は、後から大きな聲で「お
兄さん〜」と呼びますと、お兄さ
んは一寸振り返つて見て、恐しい
顔をして、睨みつけて、馳け出し
ました。京子さんも負けない氣で
追ひかけて馳け出しました。
二人は夢中で馳けて、まるでマ
ラソン競争の様に家まで走りつゞ
けて、家に着いた時、二人ともハ
ア〜息をついてゐました。家へ
はひるなり、お兄さんは
「お母さん、僕もう京ちゃんなん
か大きらひだ。あんなやつ、追ん
出した方がいゝや」と申しました。
京子は京子で、泣きながら
「お兄さんはひどいわ〜。」

廣さんと京子さんは、代り代り
にお母様にい〜つけ合ひました。
お母さんは笑ひながら
「まあ二人とも良い子だから、怒
るのはおよしなさい。お兄さん、
京ちゃんはまだ小さくて恥かしい
事がよくわからないし、お腹もす
いてゐたし、それに大好きな豆だつ
たのだから、勘忍して上げて下さ
いね。京ちゃんはお寝坊
しないこと、そしてお包をしつか
り包むやうにしませう。」と申され
ました。そして「二人とも仲なほ
りに、大好きな甘納豆を澤山あげま
せう。」と申されて、いつもより澤
山下さいました。二人ともいつか
心もやわらいで、いつもの通り仲
よく遊びました。（をばり）
（作者住所、岩手縣盛岡市内丸倉内）

漂流二百三十日

久米 舷一
岩岡とも 枝霊



【前編までの梗概】カザロンと云ふ人が、帆船に乗つて、大西洋の真中へ出ました。ところが、突然、船底から火事が起つて、船はたうとう、沈没してしまひました。幸せと船長のカーチスは、優れた航海者でしたから、乗組員一同、その指圖によつて、小さな筏に乗り移る事が出来ました。

筏は、波のまにまに、大海原を漂よひました。来る日も、陸の姿は見えず、食物や飲水は無くなる一がです。船員の内の幾人が

は、病氣になつて死んでしまひました。残つた人々も、船中のやうに痛せ衰へて、眼ばかりが氣味悪く光つてゐました。人々は、互ひに相手の様子を探りあひました。自分が生きる爲めならば、相手を殺しても生きたい人々は皆んな、かう思つてゐました。

もう口を大きく元氣もありませんでした。筏には今、一片の内、一枚のビスケットも無いのです。たゞ、一つの樽に、水が半分ほど残つてゐるだけでした。私共は、毎朝、コップに半杯だけの水を分けて貰ひました。或る者は、その水を貰ひうけると、一息にぐいと呑みこんでしまひました。又、或る者は、丁度ウイスキーでも嘗めるやうに、チベリチピリと情しさに嘗めてゐる者もありました。喉の鳴きと云ふものは、餓よりも一層辛いものです。私は、舌が厚ぼつたく腹が割つて喉の奥が、セメントのやうに、乾いてゐました。

今日は一體、何月の何日になるのでせう、チヤンセラ一號と別れてから、どれほど経つたか、それも判りません。なんだが、頭が奥がボーンとして、これまでの事をスツカリ忘れてしまつたやうな氣がしました。

「カザロンさん。どうか本當のことを云つて下さいね……私は、ほんとうの事を云つて来た方が嬉しいんですから……」 スコットはかう云つて、ぢいツと私の顔を見詰めた。「カザロンさん、どうでせう、私は助かりました。

せうか？」と、訊ねました。

私は、冷やかな顔をして、この男の顔を見
てみました。私は何人と云ふかと思つて、ス
コットも、又、傍にあるハービー嬢も、息を
殺して私の口許を見てみました。

『さうですわ……』その時、私の口許には、
殘酷なほい込みが浮かびました。「スコットさ
ん。もう私どもは死ぬとが生きたか云つて
る時ではありませんよ。遅かれ早かれ、死ぬ
んですからな……」たゞ、一日か二日の遊びで
せうよ……貴方が今……』

私はかう云ひかけて、ハツと思つて口を閉
ぢました。しまつた、こんな事を云ふんぢや
なかつたと思ひましたが、もうおツつきませ
ん。ハービー嬢は驚いて、私の腕を掴みま
した。スコットは、私を何と云はうとしたか
を察したらしく、眼を大きく見張つて、穴の
あくほど私の顔を見詰めてみました。私は、
そのスコットの顔を見送すことが出来ません
でした。云ひやうのない後悔の念が、ひし
ひと心を打ちました。



スコットはそれ以来、再び口を開きませ
んでした。そして、その日の晩方、最後の息
を引きとつてしまひました。

二

スコットの死體は、後の前の方へうつちや
つて置かれました。もう誰れもそんな物には
手を觸れようとしなかつたのです。

私はその晩、恐ろしい夢を見ました。スコ
ットが死ぬ少し前に、私の殘酷な言葉に驚い
て、ぢいッとした顔を見詰めた事がありました。
わたしはその時のスコットの凄まじく青くな
つた顔を、歷々と夢の中で見ました。

私は、ハツとして眼が曇りました。身體中
グツシヨリと痙攣をかくてあります。東の水
平線のあたりは、もうちき太陽が出るころ
と見えて、橙色に染つてあります。私は、身
體を起して、まだ薄暗い後の上を見廻しまし
た。彼方にもごろり、此方にもごろり、と云
つた風に、人々は未だグツシヨリと睡りこんで
あります。私は、後の前の方を見ました。そこ

にはスコットの死體が、昨日と同じやうな位
置に置いてあります。

私は、人々の眼を覺さないやうに、コ
ツツリと死體の方へ近づいて行きました。此の
時、何故私がかんな事をしたのか、今考へ
て見ても分りません。兎に角、なんとなくス
コットの死體が見てみたくなつたのです。

スコットは、眼を冥つて、安らかに眠つて
ゐるやうに見えました。私は、そのスコット
の尖つた鼻のあたりから、首、胸と云つた工
合に、順々に見下ろして行きました。その
私の眼が、スコットの足のところまで来た
時、私は突然、恐ろしい驚きに打たれて、息
の根が止まつたかと思ひました。

私は眼を大きく見張つて、スコットの足を
見詰めました。どうでせう。スコットの右足
は、膝から下がボツクリと無くなつてゐるの
です。恰度、鋭い刃物で、切り去られたやう
に、切目が白ちやけて、林蔭を割つたやうに
なつてゐます。私は驚きと情れの餘り、眼の先が暗くな

るやうな気がしました。一體、どうしたと云
ふのでせう。誰か酸が水面から躍りあがつて
スコットの足を喰ひちぎつて行つたのでせう
か？ いや、死體は骸骨から遠く離れて
ゐるのだから、そんな筈はない。これは確か
に、後の上の誰れか、刃物で切りとつたも
のに違ひない！ だが、一體、なんの爲にこ
んな酷たらしい事をしたのでせう。併し、私
には、なんの爲にこんな事をしたか、分りす
ぎるほど分つてゐました。これから後に起る
事件で、皆様にもよくその譯がお分りになる
ことと思ひます。

三

また幾日か日が経ちました。もう今は後の
上には、一滴の水もありません。頭の上から
は太陽がぢり〜と照りつけて、恰度、焙烙
で煎りつけられるやうな気がします。

水が欲しい、水が欲しい、一滴でもい、か
ら水が飲みたい！ 今、コップに一杯の水を
貰ふことが出来たら、すぐに死んでもいい。

私は、狂風が吹きた眼をあげて、あたりを見
廻しました。水！ 水！ と云ひながら、後
の廻りは、皆んな水ではありませんか。飲み
たいだけ飲んだらいいぢやないか。この廣い
海の水は、皆んなお前の物なのだ。さア、欲
しいだけお上り……と云ふやうな聲が、どこ
からか聞えてくるやうな気がしました。私は
幾度、骸骨から身を乗りだして、海の水を口
に含んでみた事です！ 併し、その度毎に
堪えがたい吐氣を催はして、直ぐに吐き出さ
なければならませんでした。そして、鹽水を
口に入れた結果は、前よりも一層苦しみが増
しました。

皆が半狂氣になつてゐるのに拘はらず、
船長のカーチスばかりは、普段と少しも違
はぬ態度をしてゐました。勿論カーチスとて
も、骨と皮ばかりに附せこけてはゐましたが
その口からは、ついぞ會つて、泣事だとか怒
みかましい言葉の洩れた事はありませんでし
た。他の者とは一言も口をきかずに、何時も
後の先頭に立つて、西の方の水水平線を熱

心に眺めたり、羅針盤と海
圖を見比べたりしてゐまし
た。

併し、私は、そのカーチ
スの浴付いた態度に、一寸
も感心しませんでした。却
つて、無性に腹立たしかつ
たのです。

「奴め、いやに浴付いてや
がるな……」

こんな事を思つて、憎し
みに満ちた眼で、カーチマ
の姿を眺めたりしました。

この頃から、病気になる
ものが次々と出て来ました。
普段丈夫な水夫達が、かう
云ふ時には案外弱いと見
えて、二三日愚らつたかと
思ふと、他愛もなく死んで
行きました。死骸には誰れ



も手を附ける者がなく、後の上へ放つて置か
れましたが、その内に腐りだして、堪らない
臭氣が鼻をうつので、後にはカーチスが弾儀
人夫になつて、一々、鮫桶から海へ抛りこみ
ました。その死骸には、恰度池の金魚が黙に
集まるやうに、鮫や鯨が黒いなるほど集ま
つて来て、手を持つて行き、足を持つて行き
隣り合ひに食ひ盡してしまひました。

チャンセラー號から後に移つた時には
二十三人の者がありましたが、かうして次々と
死んで行くので、今では十一人しかありません
でした。船員の方では、カーチスを始めとし
て、船大工のドーラス、水夫のワイルソン、
カーチン、ウヰルコクス、ホバート、都合六
人です。又、船客の方は、レイモンド氏、
その息子のアンドレ、技師長ホルステン、ハ
ービー嬢、及び私、都合五人です。

水夫のカーチンは、何時も凄く眼を光らせ
て、私達船客の方をチロロ〜と覗みつけ
てゐました。私達船客が、案外丈夫
なのが驚かされたかも知れません。カーチン

四

カーチンは、喜びの色を顔に現はして、
皆んなを呼び集めました。

「さア、皆んな来い、圖を引くんだ、圖を引
くんだ！」

「なんの圖ですか？」と、傍にゐたレイモン
ド氏が訊ねました。

「きまつてるぢやないか、全はれる人間を決
めるんだ。」

「食はれる人間を？」

「さうよ、誰れが一人犠牲になつて、自分の
身體を皆んなに御馳走するんだ、分つたか。」

それを聞いても、レイモンド氏は、格別驚
いたやうな様子も見せませんでした。皆んな
も、大凡そは覺悟してゐたのです。

「此處にある者は皆んなですか？」

「さうだ、一人残らず圖を引くんだ。」

「女もですか？」

は、時々カーチンに向つて、
「船長、私共は何時間を引きませうか？」
と云つて、訊ねました。その度毎にカーチ
ンは苦い顔をして、首を振つてゐました。
「船長、私共は、何時圖を引ませうか？」
それは一體、なんのことです。
或る日の事、カーチンは又同じことを云つ
て、カーチンに願つてゐました。
「船長、私の願ひは、決して間違つた事だ
はないと思ひます。もし、この圖を引かな
かつたら、私共は一人残らず死んでしまふで
せう。船長、どうかこの願ひを聞いて下さい。
若し聽いて下さらなげりや、私は貴方に逆
らつてでもやります。」

カーチンは、暫く黙つて考へてゐまし
たが、やがて、
「仕方がない、君のいふやうにしたまへ。」
と云つて、彼の前方の方へ歩いて行き、
そこへ腰を下ろして、両手で頭を抱えこん
でしまひました。

「さうだ。」
「女だけは例外にしろやいけませんか。」
「いけない。そんな不公平な事は出来ない。」
アンドレは、悲しうな顔をして、ソツと
ハービー嬢の方を見返りました。併し、ハー
ビー嬢は、普段と同じやうに、平氣な顔をし
てゐました。
十一枚の紙が用意されて、それに、各々の
名前が書き込まれました。この名札を帽子に
入れて、一人の男が眼を突つたま、中か
ら一枚づつ名札を取り出すのです。早く出た
者は無事、一番最後に帽子の底へ残つた者が
犠牲になるのです。
併し、いざとなると、誰れも帽子がかりに
なる者がありません。すると、レイモンド氏
が何んと思つたか、
「私がやります。」と云つて、帽子を手に
取りました。
「さうだ、お前なら大丈夫だ。一枚づつ取り
だして、名前を呼びあげて呉れ。」と、カーチ
ンが云ひました。

レイモンド氏は、左手に高く帽子をかかげ、右手をその中へ突っ込み、名札を取

出さうとしました。あたりはシーンとして、皆んな引き締つた顔をしてゐました。眼を血走らせてゐる者もあり、キョロキョロと落付かぬ顔をして、皆んなの顔を見廻してゐる者もありました。

「ドーラス。」と、第一番に、船大工の名前が出ました。ドーラスは、喜びの聲をあけて、手に持つ袋で、袋中になつて袋の上を叩きだしました。

「ホルステン」と、第二の聲。これは、技師長です。

「次を認め、次を！」オーエンは、唸みつくやうに叫びました。

「ワキルコクス」
「カーチス。ロバート、カーチス……」
と、船長の名前が出ました。併しカーチスは、やはり他だれたまゝ、船をあげやうともしません。

「次は、アンドレです。」レイモンド氏は、かう云つて、息子の方を振り返り、一寸笑顔を見せました。

「次を讀めつたら、次を！」
オーエンは、眼をギョロギョロさせながら、レイモンド氏に詰めよつて來ました。

「ご安心なさい、今度は貴方です。」
レイモンド氏は、落付いてかう云つて、オーエンに名札を見せました。オーエンは、ニヤリとしましたが、直ぐに元の激猛な顔に歸つて、

「よし……」
と、一言、應揚に答へました。

「次は、ハービー嬢です。」
皆んな、ハービー嬢の方を見ました。併しハービー嬢は、顔の條一つ動かしません。却つて、アンドレが喜こんで、思はず叫び聲をあけたくらゐでした。

私の名はまだ出ません。もうあと四人しか無いと云ふのに……私は、心臓が破裂するかと思はれるくらゐドキドキとして、眼の

先が昏くなるやうな気がしました。

「次はロバート……その次は、カザロン。」
あゝ、たうとう私の名前が出ました。私は、その聲を聞くと同時に、ヘタウヘと袋の上へたり込んでしまひました。

残つたのは二人きり、レイモンド氏と、水夫のワイルソンです。ワイルソンは、眞背になつて、唇をブルブル震はせながら、レイモンド氏に詰めより、

「さア……さア……」
と云つてゐるばかりです。

その時、レイモンド氏は、帽子をクルクルと丸めて、ポケットの中へ隠ひこんでしまひました。そして、皆んなの顔を見渡しながら

「皆さん。私が一番最後になります。」
と、云ひました。併しオーエンは、承知して

「いけない！ それでは規則に反する。何處までも公平にやらなくちやいかん！」
と云つて、レイモンド氏のポケットから、又、帽子を引取りました。レイモンド氏



は仕方なく、再び帽子をかかげて、中から最後の札を取り出しました。
「ワイルソンです。」
レイモンド氏の聲が、靜かな四邊に響きました。それと同時に、袋の上では大へんな騒ぎが始まりました。嘔吐する者、足踏みかする者、息子のアンドレは、狂気のやうになつて、父親の所へ纏りつかうとしました。併し、直ぐにワキルコ



クスに捕へられて、橋のところへ縛りつけられました。

レイモンド氏は、流石に背に氣をして、ぢいッ息子の方を眺めながら、何か考へこんでゐました。

オーエンは、手に斧を持つて、レイモンド氏の前へ近づいて行きました。

「レイモンドさん。ぢやアお氣毒だが、約束だから仕方がない。さア、上衣を脱いで下さい……それとも斧が厭なら、あんた自分でこれをやるかね？」

オーエンはかう云つて、自分で首を絞める眞似をしました。

私はその時のレイモンド氏の顔を、今でも歷々と眼の前に浮べる事が出來ます。レイモンド氏は、背くはなつてゐましたが、そこには一點の恐れの見えませんでした。

「一寸一寸待つて下さい……」
と、レイモンド氏が云ひました。そして、

オーエンの顔を見詰めながら、
「貴方がたは、私の身體をまさか今日一日

で食つてしまふわけでもあるまい……』
と、云ひました。
オーエンは、一寸度臍をぬかれて、モジ
モジしてゐましたが、やがて、
『そりやさうだ、今日一日ではとても食ひ切
れない……』
と云ひました。

『ちやア、濟まないが、今日はこの二本の腕
だけにして置いて貰ひたい……。明日になつ
たら、残りの全部を提供するから……』
レイモンド氏は、かう云つて、上衣を脱い
で、裸體になりました。そして、オーエンの
前に、癢さかけて筋だらけになつた兩腕を差
出しました。

『うん、い、度胸だ……』
オーエンは、かう云つて、一寸で、れ隠し
のやうに笑ひましたが、やがて大奔を振りあ
けて、
『い、いか？』
と、云ひました。

『よし……』

と、レイモンド氏の聲。
私は思はず眼を掩ひました。
その時、突然、私は叫び聲を聞いて、眼
を見開きました。見ると、オーエンと、レイ
モンド氏の間に、ハーベール嬢が身を投げ
てゐるのです。ハーベール嬢は、オーエンの足に
とり纏つて、
『待つて下さい、お願ひです、どうかあと一
日だけ待つて下さい……』と云つて、必死に
なつて願ふのでした。

オーエンは、奔を振り下ろすことが出来ま
せん。
『ちまつ、邪魔だなア。おい、ウキルコクス、
此奴も其方へ連れて行つて突れ！』
ウキルコクスは、ハーベール嬢の腕を引張つ
て、後の方へ連れて行かうとしました。

その時、もう一人、レイモンド氏の味方が現
はれました。それは、船長のカーチスでした。
カーチスは、つか／＼とオーエンの傍へ歩み
よつて、その奔をもぎ取らうとしました。

『なにをするんだ、船長！』 それでは約束が

違ふぢやないか！』
『いや、俺は、こんな所を見て黙つてゐる
事は出来ん！』
カーチスはかう云つて、力任せに奔をも
ぎ取りました。忽ち二人の間に、物凄い
格闘が始まりました。

オーエンは、カーチスと取つ組みあひなが
ら、仲間の方を振りかへつて、
『ウイルソン！』
『ハバート！』
早く来て手傳
へ！』
と、叫びました。

ウイルソンは、手に短刀を閃めかして、い
きなりカーチスに打つてかゝりました。併し
カーチスは、その時危く身を翻したので、
短刀は勢ひ削つて、オーエンの脇腹深く
突き立ちました。

オーエンは苦痛の叫び聲を演じて、ベツタ
リと倒れてしまひました。
それを見た、私は、急に元氣附いて來まし
た。今まで引ッこんでゐた勇氣が、急に身體
中に漲り渡るのを感じました。私は、後

にあつた棒を握つ
て、猛然とハーバ
ートに向つて打つて
かへりました。
併し、私のや
うな者は、到底
力強い水夫に手
向ふ事は出来ませ
んでした。私は
直ぐに棒をもぎ取
られて、あへんべ
に頭が脳天を打
ち据ゑられ、横い
で海の中へ突落さ
れてしまひまし
た。



して來たのだから、かう云ふ心持ちで、却
つて私の心は安らかになつてゐました。
私は殆んど夢心地で、ガブ／＼と海の水を
飲みました。
ところが、どうでせう。その水は一寸も鹽
辛くはなかつたのです！
『おや！』と思つて、水面へ浮び出るのが早い
か、もう一度がぶり飲んで見ました。確かに
淡水です！ 水が喉を通るとき、なんとも云
へぬ快よさを覺えさせました。確かに淡水
に違ひありません。
あ、一體どうしたと云ふ事だせう。
私は、夢川になつて後の方へ泳ぎなが
ら、『淡水！ 淡水！ 淡水！』
と、叫びつゞけました。
後の上の人々は、一瞬間、争ひを止め
て、不思議さうに此方を見返りました。私
は、やつとの思ひで、後へ仰ひ上るが早いか
『淡水だ、皆んな呑め、皆んな呑め！』
と云つて、又、後の際へ腹仰ひになつて
狂氣のやうに水を飲み出しました。



泥棒の鑑札

西川喜平

水島爾保布畫

町々の角、橋々の袂に、大きな高札が建てられ
 した。
 その高札の前には、黒山のやうな人ばかりで、高
 札の面の文字を讀んでは、アアワツと云ふ騒ぎです。
 『どうも驚きましたな、泥棒を免して鑑札を下げ渡
 すなんて、昔から聞いた事もありません。』
 『大變な世の中になつたものだ。今におてんとうさ
 まが、二つ出るかも知れない。』
 『ナニシロ今まで泥棒の多いので評判のこの國に、
 この上泥棒が殖えたら大變だ、外の國へでも逃げ出
 さなければならぬ。』
 『お奉行様がチヨイ／＼替るのは、泥棒が多くて取
 り締りが出来ないからです。今度のお奉行は、大層
 な知識者でエライ方だと聞いたが、大違ひだ。泥棒
 を助けて町人を苦しめるなんて……』
 『ソ一怒りなさんな、己達などは、稼ぎたくも手に
 職はなし、商賈をしたくも資本はなし、毎日食ふに

構なんも、初めの内は疑ひ深かきうに、
 海の水に口をつけて見ましたがそれが本當に
 淡水だと分つたとき、どんなに驚いた事だ
 せう。誰れも彼れも、昔んな花の間に腹が
 になつて、夢中になつて水を呑みました。暫
 くは、誰一人として言を云ふ者もありません。
 呑んで／＼、お腹がハチ切れるほど呑みまし
 た。

思ふ存分水を呑んだ一同は、ぐつたりと
 なつて後の上へ坐りこみ、互ひに顔を見合
 せました。昔んな馬鹿のやうな顔をして、一
 人として口を大きく者もありませんでした。そ
 れは、一瞬間前の騒ぎと較べて、なんと云
 ふ違ひでありましたらう。

『カーチス。一體、これはどうした譯ですか』
 と、第一番に口を開いたのは、レイモンド氏
 でありました。カーチスはその時、軍道鏡
 を手にとつて、熱心に西の方角を眺めてゐま
 したが、やがて顔色を輝やかして、私達の方
 を振りかへり、
 『皆さん！ 私達は助かりました。私達

は今、陸地から約六十哩ほど離れた地點に
 ゐるのです。』
 と、云ひました。

『えッ、陸地？』
 私達は一篇に叫びました。

『さうです。私達は今、南アメリカのア
 マゾン河の河口近くにまで来てゐるのです。
 海の中へ六十哩も淡水を送りだす河は、ア
 マゾン河を除いて外にはありません。私達
 は今、アマゾン河の水を飲んだのです。』

五

カーチスの云つた言葉は、誤りませんでした。
 私達はその次の日、数知れぬほど多く
 の海鳥が、白い腹を見せながら群がり飛んで
 ゐるのを見ました。又、木の實の附いた枝な
 どが、波の上を漂よつてくるのを見ました。
 三日目になると、遂に、私共の眼の前に、
 懐かしい陸の姿が現はれました。緑の椰
 子に包まれたアマゾン河の流域——あ、私
 達は約八ヶ月ぶり、再び陸の影を見る事

が出来たのです。その日の夕方、私達は一
 隻の漁船に救はれて、無事にパロの港へ着
 く事が出来ました。
 それは、一八九七年の四月三十日の事だ
 りました。昨年の五月、チャールストン
 港を出發して以來、丁度、二百二十七日目
 に當ります。

かうして、私の水い／＼漂流物語は
 終りをつけました。私達十一人の者が、そ
 れ以來なみ／＼ならぬ親密さをもつて交際つ
 たことは、申すまでもありません。とりわけ、
 私共のカーチスに對する感謝の念と云ふも
 のは、言葉にも筆にも盡せぬものでありまし
 た。カーチスは、今でも矢張り船乗りをして
 ゐると云ふ事です。私はかうやつて皆様に
 お話をしたるが、あゝ、あの時のカーチ
 スの類なり委なりが、眼の前にチラ附いて
 仕舞がありません。カーチスこそ、眞の勇
 者でありませう。

困つてゐるのだ。資本いらすの商賣をお免しになるなんて、有がたいお奉行様々だ。」

「オヤッ此奴どうも目つきが怪しいと思つたら、内内やつてゐるのか。」

「ナニこれから鑑札を買つて始めやうと云ふのだ。」

「ナルホド高札に書いてあるな、エート。」

「どうか大きい聲で読んで下さい。」

「ヨシ／＼、エート「盗渡世の者は免許の鑑札下渡を願ひ出づべし」 エート、……ヤッ大變／＼金入を盗られたツ。」

「誰だ／＼。」

「彼奴だ／＼。」

「アッお城の方へ駆けて行く、鑑札を受けない中に早く捕へろ／＼。」

こんな騒ぎが方々に始まつて、町中ヒックリ返るやうな大騒ぎになりました。

泥棒免許の高札を建て、から、一日もたぬ中に

城内の奉行所へ鑑札を願ひ出た者が、何百人と云ふ數で、奉行所の溜りが一杯になりました。

やがて、願ひ出た者一同を白洲へ呼び入れまして城の門をピツタリ閉めてしまひました。

しばらくして、お奉行は高い正座へ出まして、大勢を見下ろし、

「一同の者、願ひによつて、盗人渡世免許の鑑札を下渡すぞ。若し、鑑札を白儘に取り棄る者、又は無鑑札にて渡世をなす者は、見付次第、重き罪科に行ふぞ。」と厳しく云ひ渡しました。

一同はどんな鑑札を下げ渡してくれるかと、楽しみに待つてゐると、お奉行は立ち上つて、ソレツと命令をすると、大勢の役人は、兼て用意をしてある大きな板を持あ出して、片ツ端から、一人に一枚づつ、首ツ玉へ、紐でく／＼り付け、背へシツカリと背負はせました。

これに驚いて、逃げ出さうとしても、城の門は閉

つてゐる上に、取り捲いてゐる役人は棒で、ビシビシと搦りつけるので、皆んな泣く／＼、大きな板を背負はされてしまひました。

お奉行は、一人も残らず、板を背負つたのを見

て「鑑札の下げ渡し済む上は、一同引取れ／＼。」と云ひました。

大勢の役人に、棒で追つ立てられて、泥棒一同は泣ッ面をして城門を出ました。

町中の人は、城内へ入つた泥棒の大勢なのに驚きこの人數で町中を荒らされては大變と、急に引越しを始める者もあれば、鎗、刀を用意して、泥棒を防がうと力む者もあり、大騒ぎの中に、城内へ入つた泥棒は、どんな顔をして出て來るか心配やら、物好きやらで、城門の前へ群集して、出て來るのを待つてゐました。

ほどなく、城の門がギョツと開くと、大勢出て來る影が見えるので、ソラ來たツと片唾を呑んで待つ

てゐると、やがてゾロ／＼續いて行列を作つて出て來ました。

その行列の人數は、皆んな大きい板を背負つてゐるので、コレハ妙だとよく見ると、どれも、これも同じやうに、板の面に墨、黒々と、太い文字で

「盗人」と書いてありました。

これを見た町の人は、一度にドツト聲を上げて笑ひました。

泥棒はチリ／＼になつて、思ひ／＼の方に分れましたが、この鑑札を背負つては、自分の家へ歸れません。眞ツ晝間キマリが悪いので、手拭で顔を包んで、往來を通ると、

「そこへ行くのは慾兵衛さんではないか。オヤ／＼いつから泥棒の仲間入りをしたのだ。エツ、とうからやつてゐる、驚いたね。」

「此間から町内で、度々盗難があつたのは、お前の仕業だらう。」

「そんな商賣の者に家は貸されぬ、ナア〜立て立
て〜と立ち退きをさせられました。
又他國から来た泥棒で、宿屋住居をしてゐる者は



宿屋へ荷物が置いてあるので、コン〜と裏口から
入ると、女中はビックリして、泥棒々々と、怒鳴つ
たので、家中の者は、棒や、箒を持って出て来て見
ると、

「オヤッこの間から泊つてゐるお客ぢやあないか。」
「道理でやうすが怪しいと思つた。」

「ソナ奴は泊て置かれぬ、追い出せ〜。ナニ荷
物がある、この前から失くなり物があるから差引き
だ。」と荷物を取り上げられて追ひ出されました。

何所へ行つても、背負つてゐる鑑札で、泥棒がむ
き出しにわかるので、誰も相手にしてくれず、途方
にくれて人氣のない所で、ソツト背の鑑札を取り外
づさうとすると、何所で見えてゐるのか、役人がツカ
〜出て来て、「ヤイ此奴、自儘に取り外づしはな
らぬぞ。」と叱りつけられてしまひました。

大勢の泥棒は、腹は空る、寝る場所もなく、もう
身體もフラ〜として、夜、晝、當てどもなく歩行

いてゐると、アツチの町では打たれ、コツチの町で
は叩かれ、散々な目に遇ひ、どうする事も出来なく
なつてしまひました。



泥棒一同は、これでは命もつかなないと、とうと
う寄り合つて相談を始めました。

さうして相談の果は、泥棒商賣をやめて、この鑑
札をお返しするより外に道はないと、一同揃つて、
奉行所へ、鑑札返上の願ひをしました。

お奉行は、一同の願ひを許し、背の鑑札の板を取
り外づしてやつたので皆んなホツ息をついて、こ
れで命が助かつたと喜び合ひました。

そこで奉行は一同に向つて、
「お前達一同、よく盗人渡世をやめた。その神妙な
心に感じ、褒美をやるぞ。」と云ひました。

皆んな鑑札で、散々懲りてゐる所なので、この智
慧のあるお奉行は、また旨い事を云つて、どんな目
に遇はされるかと、ビク〜してゐると、

「一同に褒美として、廣大な土地をやるぞ。」と云つ
て、一人残らず大きな船に乗せ、遠い〜無人島へ
送つてしまひました。

(をはり)

童 心 句 野口雨情選

○にはとりが遊びに出てく春の朝
神奈川 鈴木 葵夫
評、僕もあとから行くよ。

日のながさうつらくと晝の月
神奈川 河邊 すみ子

日つぶつてお家のせとまで行つてみよか
大分 大塚 一仁

青い空いつまで見てても青い空
札幌 三浦 一

○渡舟線の土手へつきました
東京 河合 英太郎
評、さアさ皆んなあがりましょ。

山里のどこで鳴くのかメジロ鳥
和歌山 前 節子

○陽炎の中にたんぼ顔出した
岡山 新田 勝
評、陽炎、春だよー春だよー

不明 笠井 正英
櫻の木静かにく芽を出した

横濱 吉富 九果
もう来たか酒屋ののきのつばくらめ

○半かけの鉢がころがる庭のすみ
静岡 山崎 孝
評、何れ植えてあつたのかしら。

野も山もみんないつしよに青くなり
東京 稲垣 秀坊

朝早く下女のたまげる雪げしき
岡山 永瀬 孝子

猫柳猫ならにやごと鳴いてみる
茨城 石川 亮三郎

親犬と仔犬とろくろねむりだ
東京 宮内 清二

お陽様はあつちの山へかくれんぼ
長野 望月 壽 薫

○春の山青いやぐきてねんねした
富山 村瀬 春次郎
評、何んの夢を見てるんだらう。

千葉 高橋 統治
ホーホケキヨ一聲鳴くともう春だ

○影法師僕のまねしてあそんでる
千葉 貴田 勝造
評、影法師「貴田君が僕のまねしてあそんでる」

宮崎 相川 登志子
にはか雨庭ばつかりと妹いひ

長野 飯島 守夫
うぐひすが春をしらせにとんできた

東京 金子 虹詩
縁側で花チヤン手毬をてんでん

○たんぼほをつみつみかへる町の人
滋賀 原田 四郎
評、見てゐる村の人。

神奈川 中里 繁行
にはとりが影といつしよにコケツコウ

○お人形が抱っこしてゐるお人形
東京 小林 一路
評、それ抱っこしてゐる小林さん。

東京 齋谷 正治
ひよこがよ小さい芋を掘つてみた

京都 杉原 はぎの
山でねるホーホケキヨ寒から淋しから

愛媛 土居 新花
涼風に夢もゆれてるハンモック

不明 濱井 美舟
遠足の朝先生の靴が新しい

○大雨に目高がどこかへ流された
神奈川 原田 小太郎
評、どれががしに行かうかな。

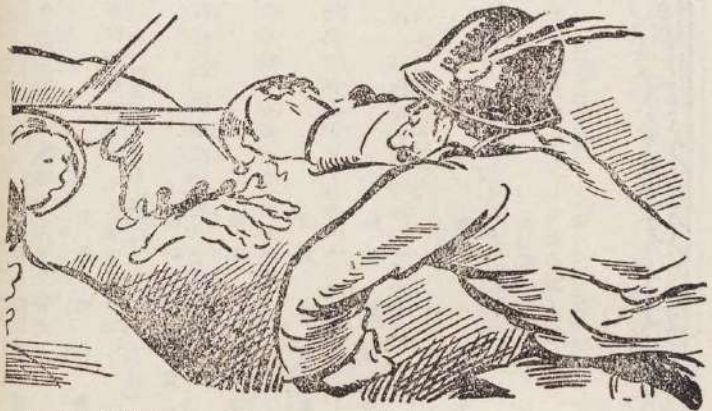
東京 篠崎 保正
十五夜お月さんだんごでまんぶくだ

東京 石山 一翠
陽炎が土筆のゆりかごゆすつてる

○山大將蜂にさされてゐる
愛媛 西岡 種雄
評、い、氣味だヤーイ。

暗闇城

小島政二郎
寺内萬治郎畫



前にも云つたやうに、その部屋は、劍闘が出来る程充分廣くなかつた。

デユロツクは、僕の前のテーブルと壁との間の狭い通路に立つてゐるので、僕は唯彼の首筋を見てゐるだけで、それ以上進んで彼を助けることが出来なかつた。僕は自分の劍の纏を握り締めたがら、デユロツクと相手の男とを見守つてゐた。相手は、大分劍の使ひやうを知つてゐるらしく、まるで山猫のやうに弾猛に、敏



捷によく
闘つた。
しかし、
こんな狭
い自由に
動きの取
れない場

の一撃を受け留めた。

「御免。エチエン・デエラールがお相手を致す。」

彼は後ずさりすると、壁掛の掛つてゐる處に凭れて、ちよつと息を入れた。荒々しく喘ぐその様子では、不徳を働いて來た彼の體も、もうかなり弱つてゐるやうだつた。

「まあ、息を入れ給へ。いつまででも、お待ち致さう。」と僕が云つた。

「君は」彼は喘いで云つた。「君は何も僕と争ふ謂はれがないぢやないか。」

「然らば申し上げるが……。」と僕が云つた。「よくもあんな納屋の中へ、閉め込んで頂けた。いや、そんなことはどうでもいい。それよりもあの御婦人の腕の傷だけでも、劍を取るに十分だ。」

「ならば、來い！」

彼はうめくと同時に、氣違のやうに僕に飛び掛つて來た。暫くの間は、彼の燃え立つてゐる青い瞳と

所では、相手の大きな體格の重みと力とが、どうも敵に有利らしかつた。その上に、何と云つても、彼はなかくの使ひ手だつた。防ぎ方と云ひ、突き返して來方と云ひ、稻妻のやうに、鋭く素早かつた。彼は見てゐる間に二度もデユロツクの肩を突いた。デユロツクは苛つて突きに出ようとした拍子に、足を踏みこらしてスルリと倒れた。立ち直らうとする隙も與へずに、敵はこの時とばかり劍を振り卸して來た。

しかし、僕の方が早かつた。僕は僕の欄頭で、そ

右に左に拂つても拂つても、忽ちまた僕の喉と胸先とへ返つて来る赤く血に染んだ切尖ばかりを、僕は見詰めてゐた。

革命當時の巴里に、こんな上手な剣士がゐようとは、少しも知らなかつた。僕も今までに随分多くの剣士と刃を交へたが、この男より上手な剣士を六人以上思ひ浮べることは困難だつた。しかし同時に、彼は彼で、僕の方がすつと腕の立ち勝つてゐることを知つてゐた。彼は、僕の目の中に自分の死を、まざ／＼と知つたやうだつた。僕には、それがよく分つた。彼の顔からは一刻一刻血の氣が消えて行つた。彼の息はだん／＼と短く、多く、絶え／＼に喘ぐやうになつて行つた。しかし、最後の突きを見舞はれるまで彼は闘つてゐた。さうして遂に、醜い叫びを擧げると同時に、あの赤いモジャ／＼の鬚を血に染めながら、死んでしまつた。

及ばなかつたのである。しかし、ふと變な匂が鼻を衝き、突然に赤黄い焔が、あの色の褪せた壁掛の上へ映るのに氣付くと、

程澤山の戦争で、さま／＼の恐ろしい光景も見て来た。しかし、赤い鬚の真中の傷口から、どく／＼と血潮が涌き出してあたりを染めて行く中に倒れた、この時の彼の顔ほど物凄く有様はあんまり見たことが無かつた。僕は靜かに疵口からサーベルを抜いた。

十一

こんなことを考へたのは、しかし、みんなすつと後からのことだ。——その時、彼の偉大な體が、ドサリと床に倒れるや否や、隅に身を縮めて恐ろしさに震へてゐた例の女は、急に兩手を握り合せて喜びの叫びを擧げた。僕はこの時、その様子を見て、女の人がこんな血腥い出来事を、そんな風に喜ぶのをちよつと嫌な氣がしたことを覺えてゐる。女のしとやかさも、つゝしみも、優しい感情も忘れさせて、こんな風に狂喜するまでにされてしまつた彼女の今日までの不遇な境遇に就ては、その時は少しも思ひ

揺りながら「火事だぞ。」

青年は傷口の痛手に、人事不省になつて横たはつてゐた。僕は廣間に飛び出ると、どこから燃え始め



今度は僕の方が大きな聲を擧げて、「靜かに。」と叫ばすにはゐられなかつた。「デユロツク。デユロツク。」僕は彼の肩を持つて、

たのかを調べ廻つた。僕達が、さつき爆破した火があの乾いた扉の材木に移つたのだつた。納屋の中では、もう二三の箱が盛んに炎を擧げて燃えてゐる。

そこを覗き込んだ僕の瞳が、あの火薬の樽の山と、あの床の上にこぼれて積つてゐる火薬を見た時、僕は忽ち、背筋から水を浴せられたやうな氣がして、ぞつとして足が辣んだ。

一秒、二秒、遅くて一分も経たない間に、炎はあの傍まで行くだらう。さうすれば諸君、僕が茫然として、このチロ／＼と這ひ込んで行く炎を見てゐるうちに、僕達の目は永久に閉ぢられなければならなくなるのだ。嗚呼。

その後どうしたか、どうなつたのか殆んど覚えてゐない。非常な勢で、素の死人のゐる部屋へ駆け込み、いきなりデユロツクの片手を引つ掴むと、その廣間から引ッ張り出したことだけは覚えてゐる。何でもあの女の人も一緒に、デユロツクのもう一方の腕を引ッ張つて手傳つてくれたらしかつた。さうして、いきなり門口の方へ駆け出して行つて、雪の積つた小路を走つて、やつとあの樅の林の傍まで行つ

してくれた。

彼の話によれば、あの二度目の爆發の時、大きな材木の破片が飛んで来て、それが僕を打ち倒してしまつたのださうだ。それから又、あの波蘭士の婦人が、このアレンスドルフの宿屋へ駆け付けて来て、部下の輕騎兵達を起して大急ぎでみんなで引ッ返した時には、一足違ひで、雪道を馬を飛ばして黒鬣の秘書役が迎へに行つたコサツクよりも先きに着くことが出来た事、それで無事に彼等の槍先から逃れることが出来たのだと云ふ事など、デユロツクは感慨に堪へぬといふ様子で、手を振りながら熱心に語るのだった。

二度までも、僕達の危い生命を救つてくれたその勇敢な婦人に就いては、その時デユロツクは別に詳しい話はしてくれなかつた。偶然な事から、危険な運命の道づれになつた僕とデユロツクは、兄弟のやうに親しくなつた。僕がすっかり體が快復するまで

たことは覚えてゐる。丁度そこへ行き着くや否や、僕達の後に大きな大きな爆音を聞いた。振り返つて見ると、凄じい火柱が、冬の空にはつと閃いてゐるのが映つた。すぐその後で、前のよりも、もつともつと大きな爆音が續いて起つた。僕はその瞬間、樅の木や、空や、星が、僕の周圍をぐる／＼廻つたやうな氣がしたが、それつきり知覺を失つて、デユロツクの體の上へ折り重なつて倒れてしまつたことを覚えてゐる。

十二

アレンスドルフの宿屋の寢臺の上で、僕が正氣に返つたのは、それから二三週間も後の話である。

しかも、あれから後に起つた事どもを僕が聞いたのは、又それからすつと後のことだつた。デユロツクは僕より先に勤けるやうになり、軍務に就けるやうになつて、僕の寝てゐる枕許へ来て、詳しい話を彼は毎日のやうに暇を見ては、見舞に來てくれた。

二年の後、ワグラムの戦を終へて巴里へ歸つた時僕が第一に訪問したのは、デユロツクだつた。このなつかしい青年は、僕の聲を聞くと、子供のやうに階段を駆け下りて來た。見ると、彼の後に、同じやうな喜びのこぼれた表情をして、いそ／＼と續く女性があつた。一目見るより、僕は思はず驚きの聲をあげた。

彼の花嫁は、別に新しく紹介して貰ふ必要は無かつたのである。

その晩、僕達は、どんなに楽しく三人で語り合つたことだらうか。

デユロツクは、あの不思議な運命の下にある財産を選まれて自分の物とし、今度は彼自身がストローペンタル男爵と名乗り、あの焼け落ちた暗闇城の廢趾の主となつてゐたのである。

(をばり)

後の年十三

和美石立

畫郎四上川



一一六

—

町は、夕ぐれが、つて居ました。さうでなくてさへ、繁華なニューヨークの街に、急に街燈や店頭の電氣がきらめき出して、薄暗の中を、急がしうに、往來する人や、馬車や、車や自轉車や、止度ない混雜を走馬燈籠の様に浮き出させると、何とも云へない、あわたしい物の響をともなつて、なれない人達にはめまいを起させる様な、いらだちを感じさせるのでした。

街角の、奥まつた書店の店にも燈がつかました。けれど、この店の中は、まるで、外の狂氣じみた混亂とは、何の係りもないかの様に、しいんとして、静まり返つて居ました。



さつきから、あつちこつちの棚から、本を引き出しては、熱心に、撰り分けて居る、若い紳士が居ました。

この紳士は、東部の方の、小さい町に住んで居る若い實業家で、小さい銀行の頭取も務めて居れば、四つ五つの事業會社にも關係して居る人でした。この紳士の只一つの趣味は、かうして、月に一度

一一七

か、二月に一度、ニューヨークの町へ出て来る序に、書店を訪れる事で、自分の好きな文学や、美術や、歴史——とりわけて、いろ／＼な人の傳記を書いた書物を、買つて歸るのを、何よりの楽しみにして居ました。

紳士は、もうかなり長い間、この店で、書物の撰りわけに耽つて居ました。

さつきから、氣がつくともなしに、氣づいて居たのですが、きつと、紳士がこの店へ来るよりも前から居たのかも知れません。一人の、みすばらしい態度をした少年が、さつきから、すうつと、この店に居て、何か熱心に書物に見入つて居るのでした。

紳士は、自分の、買つて歸る丈の書物の撰けも濟んだので、それを別に積み重ねて置いて、ホツとした様に、煙草へ火をつけました。

自然に、紳士の眼は、不思議な少年の舉動にそゝがれて居ました。

「少年の、心をそれ程集めて居る本は、一體何でせう。繪入冒險談？ それとも？ 紳士は立つて行つて、ちよつと、その本の表紙だけ見たいものだと思ひました。

少年は、まるで、熱にうかされて居る様に見えました。いつの間にか、一たん離れた場所へ歸つて来て、一たん離れた本を、また手にして居るのでした。

二

紳士は、二度と微笑む事が出来ませんでした。次第に變つて来た、少年の容子が、紳士の楽しい空想をうばつて終ひました。

本の上へ、前かゞみになつて居る少年の容子には、何んとも、例え様なない卑しさが漂つて居ました。少年は、決して、本を讀んでは居ませんでした。身體をこわばらして、そつと、様子をうかゞふ様に、上眼を使つては、店員のスキをねらつて居る様に見

長い、長い撰りごみの揚句に、少年は、何か決心した様に、大部な一冊の本を手に入れました。そして、注意深くその書物の定價を調べて居る風でしたが、やがて、深いため呼吸をついて、その書物を元の所へ歸しました。

少年は、また、何氣ない風で、外の本の頁をくり擴げて居ましたが、その空々しい様子を、紳士は見脱しませんでした。何故と云つて、少年の注意は、全く、くり擴げた書物の上へ注がれては居ないのでした。そして、片手を、ポケットへ深く差し入れてうわ目を使つて居る容子から察すると、少年は、手さきで、ポケットのお金の勘定をして居るのに異ひありませんでした。

「お金が足りない？」

少年は、さもがつかかりした様に、その場を離れました。

紳士は、心の中で微笑みました。この、みすばらええました。

「かつさらひ？」

紳士は、心臓がドキ／＼波打つのを、ちつとをさえ乍ら、素知らぬ顔つきで、少年を見守つて居ました。

やつぱりさうでした。

少年は、思ひ切つて、素早く本を取りあげると、スツと、小わきに抱え込んで、スタ／＼と出口へ歩き出しました。

「あつ！」

紳士は、口の中で小さく叫んで腰を浮しました。若し少年が、そのまゝ、走り出して、街の混雑に紛れ込んだとしたら、紳士も、自然の勢ひで、すぐ後を追つたに異ひありません。

「泥棒！」

さう叫んで、人を呼んだに異ひありません。併し店頭まで、出て行つた少年は、ぐるりと振り返つて、

またふら／＼と、中へ入つて來ました。

眼は、眞赤に充血して居ました。熱病にうかされて居る人の様に、顔は白くむくんで見えました。耻と、悔ひとの、堪え切れない様な悩みが、あり／＼とその顔に浮んで見えました。

ふと、少年の眼と、紳士の眼とが、一直線に向ひ會ひました。とがめるやうな、きびしく看視するやうな、いかつい紳士の視線に會ふと、少年は、はつとして立停つたまゝ、ガクリと首をうなだれて、身動きも出来ない程かたくなつて、オズ／＼と、抱えて居た本を、其處へ置くのでした。

紳士は、立ち上つて、ツカ／＼と少年の側へ歩み寄りました。

うなだれて居る、少年の首すじまで、眞赤に耻が染み出て居て、かすかな恐怖の震えさへ見えました。紳士は、黙つて、片手を少年の肩にかけました。をす／＼と、見上げた、少年の眼には恐れにみちた

哀願の情が、切なさうに動いて居ました。

「何の本？」

紳士は、呼吸づまるやうな思ひを、無理にも消して、氣輕さうに云ひ乍ら、今少年が、其處へ置いた本を取りあげて見ました。

何んなに面白い物語？

それともまた、怪奇冒険？

意外にも、その書物の表紙には、「現代の造船術と航海」といふ、全く、年の行かない子供の心を占めるのに、應はしくない、むすかしい題がついて居ました。

「あなたに、これ、分るの？」

紳士は、やさしく尋ねました。

「え／＼！」

かすかな聲で、答えると一緒に、少年の首すじは一層紅くなりました。

「學校は？」

「い／＼え。」

少年は首を振りました。

すぐ、紳士は、悪い事を聞いたと後悔しました。みすばらしい少年の姿態を見た丈で、こんな事を聞く必要がなかつたからです。

いた／＼しい、同情のこゝろが、紳士を占めをせました。

紳士は、その本を持って、少年の側を離れると、奥の椅子で、探偵小説に讀み耽つて居る、店員の肩をツ、いて、お金を拂ひました。勘定を済ませると、紳士は、黙つて、その本を、少年の手に手渡ししました。

少年は、暫らく、困惑して、もじ／＼し乍ら、本を受け取らうとはしませんでした。

紳士は、もう、全く氣輕になつて居ました。そして、優しく微笑み乍ら、

「勉強して下さい！」

さう云つて、最早一度、押しつける様にして、自分の椅子へ歸つて行きました。

突差！ 後を追つて來た少年は、リスのやうな素

ばしつこさで、ぐつと、紳士の手を掴んだと思ふと

「チュッ！」と、烈しい音を立て、紳士の手の甲へ、

熱いキッスを残したまゝ、本を抱へた少年は、横飛

びに、飛んで行つて終ひました。

紳士が、振り返つた時には、少年の姿は、もう何處にも、見る事が出来なかつた位すばやく！

三

幾年かの年が経つて行つて、實業家としての、紳士の位置が次第に高まつて行き、事業が次第に大きく、急がしさが加はつて行くにつれて、ニューヨークの街での、小さな出来事は、いつか、全く紳士の記憶から、消え去つて終ひました。

油田を手に入れて、石油會社を起してからといふ

ものは、紳士は、その經營の爲に、例えやうのない多忙な目をおくらねばなりませんでした。紳士の富は、日に日に大きくなつて、今では、東部の片田舎だけではなしに、その名が、廣く、アメリカ中に知れ渡る様になりました。

幸福が、絶えず、この人について廻つて居たのかも知れません。思ひがけず、新しい油田から、限りない石油が憤き出して來ました。

「新債油、一分間百三十石！ 一日二十萬石！」技師の報告を受け取つた時の、會社のさわざと云つたらありませんでした。この事が、すぐ世間へ知れ渡りました。同じ州の、町や村では、すぐ委員會の決議で、紳士にお祝ひの言葉を送つて來ました。何故と云つて、この、文明の世界に、なくてはならない原動力の産出は、決して、一つの會社や、一人のお金持ちの利益に終つて終ふものではありません。

すぐ、鐵道の問題が、起つて來ました。この、素晴らしい富を、遠くの町々や、港に運び出す爲に、新しい鐵道會社が、もくろまれました。その爲に、町は、委員會の一致で、フランスから、たくさんのお金を、借り入れる決議をしました。

町と、新しい鐵道會社を代表して、お金を借り入れる用務を果す爲に、フランスへ渡る人が撰ばれました。そして、私達の紳士が、矢張り、全會一致で、その人に撰ばれたのでした。

あの時から、もう三十年の月日が経つて居ました。で、私達の紳士も、六十歳を越した老人になつて居ました。隣人の信頼に報ひる爲に、國家の富源を拓く、大きな使命を果す爲に、遠く、フランスへ渡る決心をしました。

四

盛んな見送りをうけて、老紳士の乗り込んだ船が、ニューヨークの港を離れてから、もう二週間経ちます。

静かな航海を楽しんで居た一行が、この日の明け方から、吹き募つて來た暴風のために、誰一人、甲板は愚か、食堂へ出て來る人もなくなつて、終ひました。

船は、もの凄く大洋の響の中を、大きく揺れ動いて、高い波の頂きに持ちあげられた時と、その底につき落された時との、例へ様のない、氣味悪さの變化を、繰り返して、もう、大抵の人は、意識を失つて終つて、たゞ、言ひ現はせない苦痛にうめき續けて居ました。

夜に入つて、暴風は、底を抜いたやうな雨を伴つて、一層ひどく船を襲つて來ました。

夜が明けても、その次の夜が暮れても、嵐は、そ

の暴威を収めませんでした。

明けても暮れても、同じ様な、ほの暗い灰色の中で、雨はしぶきを飛ばし、暴風は、干切れる様な叫び聲を立て、海は物凄く咆哮して居ました。

「ミシリ、ミシリ！ 船は、氣味の悪いさしみ聲を立て初めました。」

甲板にあつた程のものは、皆流されて終ひました。机柱も、舵も、部厚な鐵の煙突さへもひしがれて、ある丈の重いかりを引きつたまま、船は、方向に關はずに、潮と風との、流れるまゝに流されて居ました。

老紳士は、もう、三日も四日も、何もたべる事さへも出來ませんでした。たゞ、眼を閉ぢて、ぢいつと苦痛を堪え乍ら、靜かに、最後の時の來るのを待つて居ました。

もう、人間の方では、何うする事も出來ない時が

来ました。

これが、助からうとは、神様も、云ふ事の出來ない場合でした。嵐は、まだ續いて居ます。



五

誰が、これ以上の人間の力を信じる事が出来たでせう！

どんなに、荒い航流に慣れた船員達も、最後の十字を切つて、天國を祈りました。海の外の、休みのない自然の雄叫びにひき返へて、船の中では、望を失つた、死の沈黙が、森閑として續いて居ました。

たゞ一人、最後まで、最後の最後の、最後の時まで、望を捨てずに、努力を續けて居た人がありました。それは、この船の船長でした。そして、とうとう、一週間後に、物狂はしい嵐の中から、抜け



出る事が出来たのでした。英國の陸地が、見え出した時、船員達は、感謝と尊敬の情を込めて、船長に抱きついて泣きました。乗り込んで居たお客達は、一人残らず船室から這ひ出して、荒れ果て、廢墟のやうになつた甲板を踏み鳴らして、よろこぶのでした。

それよりも、二週間も遅れて、この、働き過ぎた蜜蜂のやうに、機關のグタ／＼になつた廢船が、幽靈船のやうに、音もなく、バプールの港に、すべり込んだ時の英國人の驚き！

奇蹟に近い幸運と、船長の功勞

が、期せずして、人々の口をついて出ました。

六

人々は、一刻も早く、この、恐ろしかった記憶から脱れやうとするやうに、先を争つて棧橋へ上りました。

その人達の中に、私達の老紳士が、居た事は云ふまでもありません。

ちようど、老紳士が、船を離れて、五六歩棧橋の上を歩き初めた時でした。

「ゼントルマン！ ちよつと！」

さう云つて、後から、呼び止める人がありました。

振り返つて見ると、それは、この船の船長でした。暫らくのあひだに、頬骨が高く出て、のび放題にのびたひげの中から、勞苦にやつれた眼が、光つて居

ます。

いつの間にか、頭の毛は、すつかり灰色になつて、方のない白髪が、へたくとよちれて混つて居ます。

「あゝ、船長でしたか！ すみません！ お禮も申し上げないで！ あなたのお蔭で、命拾ひをしました！」

さう云つて、老紳士は手を差し出しました。

「いゝえ！」

すか／＼と近づいて來た船長は、老紳士の手を握つたまゝ、さう云つたぎり、黙つて、うなだれて終ふのでした。

見れば、握つた手を離さうともせず、黙つてうなだれて居る、船長の眼は、一杯の涙でうるほつて居る様でした。

「船長！ 何うなすつたのです？」

「あり難う！ あり難う！ あり難う御座います！」

さう云つて、船長は、涙だらけの眼で紳士を見あげました。

「何がですか？ 船長！ 私こそ、お禮を云はなければならぬ！ 貴方に……」

「貴方は、私を、すつかりお忘れになつて終つたのです！ 私は、私は貴方の顔を忘れる事が出来ません！」

「何の事ですか？」

「御尤もなんです！ もうあれから、三十年経ちます。ニューヨークの大通り、三十二番街の、角の本屋を覚えては、おいでになりませんか？ あの、本屋……」

「さう／＼、あの本屋へは、私は若い時分から、すか分通つたものでした……」

「その本屋で……」

「をゝ！ あなたは！」

すの分長い間かくれて居た記憶が、今、老紳士の

心に、繪を見るやうに、あざやかに蘇み返つて來ました。

見れば、年取つて、尊い苦勞にやつれた船長の眼に、まぎ／＼と、あの時の少年の、まなざしが動いて居ます。

「おゝ！ あなたは！」

老紳士は、今までに、覺えた事のない、熱情にかられるのを覺えました。

そして、思はず、船長の、大きい身體を抱きしめました。

その時には、もう、船長の首が、がつくりと、紳士の胸の中にくづれ落ちて居て、かすかな、すゝり泣きの聲さへもれて居ました。

二人の、立派な男の大人達は、子供のやうに、恥かしさも、何も知らないやうに、波止場の、人ごみの中で、長い間、抱き合つて居るのでした。

(をばり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

港の棧橋

大分 泉 朝彦

港の棧橋

しとく雨よ

ちよつくと下りて

雀よ遊べ

入船出船

るの音ばかり

積荷のかけに
雨降るばかり

引越し

無本 宮本のり美 (巻五)

あしたは

ちがつた

家に寝る

すゞめも

別れた

お別れた

草つみ

埼玉 小坂 敏明 (巻三)

おひなまつりが

近づいた

もち草つまなきや

ならないぞ

さひはひ今日は

日曜日

静な天気だ

草つみ行かう

ふんはりしてゐる

野原に行かう

きなしのねえ

ちやん

兵庫 芝地 一恵 (巻五)

私の大事なねえちやんは

京からもどつて

たんごへおよめに

行きなつた

さくらんぼ

愛知 鳥居 一平 (巻三)

ざあざあ雨がふつてきた
赤んぼ黒んぼさくらんぼ
にこにこゆら〜
おどつてる

小ねこ

東京 島津 弘子 (巻三)

おうちのおすゞは

かはいゝ小ねこ

まりにじやれては

でんぐりかへし

おてだまくはへて

チリリン〜

おうちのおすゞは

りこうな小ねこ

くらいやみよで

お目々が光る

ねずみはどこじやと

チリリン〜

うそ

埼玉 高野 竹美 (十三才)

あかうそくろうそ

かわい〜ね

びよびよないては

とびまわる

さしこの中に

入れられて

たべものたべて

ないてゐる

ぶた

京城 堀田 重忠 (巻二)

今日ぶた小屋

たてますと

ぶたはうれしい

ぶうぶうぶう

なくのがうれしい

ぶうぶうぶう

兎さん

東京 泉 涼子 (巻三)

うささん〜兎さん

あなたのおみみは

なせながい

わたしはおうたを

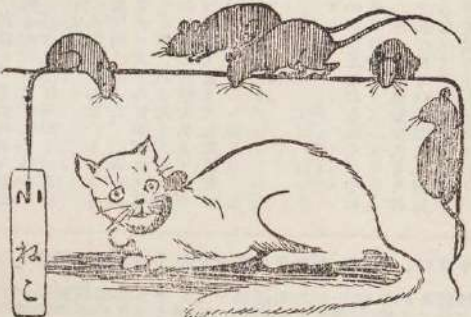
聞かたために

こんなにおみみが

長いのよ

うささん〜兎さん

あなたのおめめは



なせ赤い

わたしはにんじん

みなたべて

おやつ

大阪 中村 速生

チンチン三時が

なつたなら

ガラガラガラと

母ちやんが

お菓子の罐の

音させる

音を聞いたら

真先に

坊やがお部屋に

かけてくる

お庭にねてる

エスサへも

縁に出て来て

ちんちする

こんなに おめめが
赤いのよ

童謡と研究欄

ある斷想

古村徹三

意識せる無意識。有邪氣なる無邪氣。この言葉こそ、私たちが、つれに慨嘆して止まないものであります。一見、甚だ無邪氣な童謡を玩味して、私は、往々にこの恐るべき邪氣を発見します。邪氣を素朴らしく無邪氣で覆ひ、しかしして不然なるが如き自己欺瞞は、救ふべからざる童謡道の邪道であり、冒瀆であります。不幸、私は、この皮肉なる現象を、終始一貫童謡は氣分の藝術であるから意識的に作らるべきでない」と力説される、雨情先生の流れた胸入々に見受けま。

童謡一考

原まさる

私をはじめて此の道に足を踏み込んだのは大正十三年の春であつた。大正十五年の十二月、私は生意氣にもそれまでの自作童謡とそれに自分の感想なり意見みたいなものを書き加へて、百頁餘の冊子を『歩み』と名づけて贈答刷りにして出した。歩み夢中で作りに上つて知人友人に配布してしまつた時、私は心の冷くなるを感じた。案の如く私は長崎師範の江先生から次の様な意味のおたなひをいただいたのであつた。勿論江先生は、私とは一面識もない方であつ

いろは童謡 古村徹三

泊り舟 さいびしい、日のくれば。横の昔、きつちり、波の音。松原、うすい霧。荷物、いづばい、泊り舟。帆下げ、からから、夕餉時。へまき、ひとすじ、立つけむり。ともし灯、ちろちろ、暮れまじり。まづ虫 ちりり、うすれ陽、秋ふかい。りんりん、まつ虫、晝の月。沼の、ほとり、草のなが。瑠璃に、ほむ水、渡り鳥。尾を振り、ひねれ、空を見て。わが世の秋が、もうゆく。かなしい、唄を、うたひます。 摘 藤菜、つくしに、はこべ草。田雨、うれうれ、畦みぢは。れんげに埋れて、青大将。そつと、忍んで、あやせぬか。摘草、つみくさ、日がくれば。 實はれ子 實はれ、子どももの。羅漢の、恐ろしい、お寺なの。むかしの、むかしの、お寺なの。いつも、お友は、とつとなの。

た。『君の童謡を讀んで先づ最初に感じたのは君が女ではないかと思つた事だ。そしてこんな教師が習つてゐる児童達が非道く悲觀的な児童になりはしないかと心配した云々』と。私が女だとは聞遠へられたのはその時ばかりではない。私は陸軍歩兵上等兵、體重十八貫まあ昔より少し大きい男だ。私はその『歩み』を何の考へもなく出してしまつた事を後悔した。私は両親を完全に持たない者である。そして十數年前一人の弟をなくし、そして近く數年前たつた一人の兄まで失つてしまつた。私のその『歩み』の中に綴られた大部分は苦しい悲しい遺瀆ない私の過去の追想だつたからである。それ等の作のすべては、皆私の心の中におさめて置かなければならぬものであつた。或出来事に對して、大人と子供とが同時に喜びの聲をあげたとする。又或出来事に對して大人と子供とが、同時に歡き悲しんだとする。この様な場合の、 大人の喜び 子供の喜び 大人の悲しみ 子供の悲しみ 子供は大人の心で喜び悲しみ、子供は子供の心で喜び悲しんでゐるのだ。

子供の喜び子供の悲しみは、喜び悲しみそのものが、そのまゝ、美しい童謡であり詩である。大人の喜び大人の悲しみその喜び悲しみを本當の喜びとし、本當の悲しみとするには餘りにも多くの場合大人の心は汚れてゐる。私は弟が死んだ日かと思ひ出し、僅かその時七才であつた自分を想起して童謡を書いた。果してその童謡が七才の子供の語であるか云へるが私は全くはづかしくなつてくる。私は今の大人の私の心で考へた七才の頃の自分の考へを語つたのだ。とりもなほさず、それは今の自分の語でなければならぬ。今の自分の語が、たゞ簡単なやさしい言葉で書き現されたに過ぎない。長途の旅行に上るために汽車に乗る。子供達は、早や窓を開いて、汽車の二刻も早く動き出さん事を祈つてゐる。そしてやがて自分達の前に展開されるであらう種々のたのしいうれしい出来事を思ひ浮べてゐる。大人は先づ切符をふところへ入れる。財布を出して見ると、そして自分の胸の裏へ少しも美しい異性の乗る事を喜びはしないか。同じ道に歩調を揃へてゐる若き童謡詩人諸兄よ。ほんとうに仲よく進んで行きませう。互に固く握手して行きませう。私情を捨て、名利をはなれて、はるかなる理想への旅に、強く強くその新しい第一歩を踏の出さうじやありませんか。 ○編輯部より—こゝに掲げる研究に對して意見のある方はその意見を御寄稿下さい。

ノ オクマヤケマコテ エコフケマヤクオ 奥の、林の、手娘子は。山、い、く、い、もつて暗きました。山へ、朝か、もつてうぐれ。待てどくらせど、親娘子。ふんけん、い、ほろこ、かへらない。越えて、あの山、夢のなか。紙拾ひ、もじや、かりうどの。手綱に、なつたじや、ないかしら。 摘 雨が、しのんで、降るやうな。さびしい、音だ、床のなが。桐のおち花、うら如。夢みて散るか、戸をくれば。目に密む、目にしむ、深いもや。しづめりや、ほうつと、うすい花。しづめりや、静かに、こぼれます。 摘 椽に、やさしい、おてんとさん。 壺、こしかけて、見る本に。もよもよ、かげらう、草にたち。背戸から、むらさき、うすがすみ。李の、はたけに、かかります。 これは藤村氏の民謡『いろは加留多』にもじつたものでは無い。勿論、一句一句が獨立したものでない。常に想つてゐた一つのこゝろみでありませう。かうしたものは、第二義的な形式のみに墮しやすのですが、氣分を入れたらうと成苦心致しませんが、紙屑へ入れやうとしたのですが思ひ切て見て戴きます。

編輯室より

▽今月は誌面がいっぱいで、通信欄をとるこ
とが出来ませんでしたので、きゅうくつで
すが、この頁にわりこみました。
▽緩方の欄を今月一回休みにしたのも、頁
のためです。長い文章が多かつた爲めに、
緩方を投書した方にはお氣の毒ですが、一と
月がまんして下さい。
▽初山遊先生に本月から御寄稿がふこと
が出来ました。初山先生には、これから毎
月かいていただきます。金の星は挿画の方
面も大家の作で網羅したいと思ひます。
▽絶えず新しい、いい話を掲げること
に努力してまいります。今月の犬田卯先生の「自
傳車發明物語」などめづらしいお話だと思
ひます。長篇も「大石主税」の外は今月で全
部完結しましたので、次號からスベラシイ
長篇を掲げます。
▽真心句はいま一盛んです。全く白熱的
です。
▽野口雨晴先生は臺灣旅行から歸京されま
した。次號には臺灣から得た傑作が發表さ
れるでせう。
▽童話の今月の推薦は得能愛子さんの「京
子さんと黒豆」でした。杉宮狂詩さんの「煙
突掃除天になつて男の子の話」も、作で
した。
▽次月號は大に奮闘する積りで、(斎藤生)

新らしく出た本

ノートルダム の 駆 役 男

有名なフランスの、ヴェクトル・ユルゴーの
作です。活動寫眞になつて日本にも来まし
たから、皆さんもお馴染みの名作です。山羊
をつれて街を踊り歩く少女が、さかして二
人は悲惨な最後を遂げる。全篇涙の物語で
す。それを助けやうとするのが、ノートルダ
ムの寺院の鐘つきで、片眼でせむしでピ
アノの男です。その男の活躍に、また不思
議な幽霊僧が現れます。この本は世界名
篇物語叢書の第十一編として好評を得るこ
と、思はれます。(四六判箱入美本、一八一
頁三色版外挿畫數葉、定價九十錢、東京市
外巢鴨上町二八金蘭社發行)

世界童話叢書 オランダ童話集

○第十三編(加治亮介編、池上治義訳)
オランダは、昔徳川幕府の鎖國時代に、特
に通商を許された、關係の深い、我々にと
つて関心のある國であります。それでそ
の國の童話は、外の國とはつた、味のある
ものが多くあります。鬼の旅行外十六篇
何れも面白いものばかりです。(四六判箱入
美本、三〇六頁、三色版紙口繪挿畫數葉、
定價等五拾錢、東京市外巢鴨上町二八
金蘭社發行)

童心句掲載外佳作

- 小林 綾次(福島) 鈴木 正雄(東京)
吉田 眞次(新潟) 細川 公正(石川)
小川 眞郎(千葉) 南 良 介(東京)
伊藤 重久(静岡) 小西 勇(香川)
横島 愛子(東京) 岩谷 貞三(秋田)
小林やすこ(青森) 醍醐 正明(東京)
竹下 唯月(鳥根) 折原 静江(山梨)
江夏ひろし(東京) 松田 弘(山形)
月村 博光(東京) 山田 次郎(東京)
渡邊 俊吉(山形) 河野 青雨(朝鮮)
小野つと子(熊本) 磯貝金之助(東京)
戸籍 通忠(東京) 貴田 義司(埼玉)
林 正(青森) 野田 幸子(千葉)
千野 滋子(埼玉) 八重樫草笛(東京)
中村 蓬生(大阪) 近藤千恵喜(不明)
山口 吉三(滋賀) 近藤恭太郎(秋田)
村島 ウタ(東京) 永田 良作(宮城)
菅沼 益人(埼玉) 菱田 稔(不明)

童話掲載外佳作

- 大山 英志(鹿児島) 中岡 隆男(東京)
熊谷 正男(北海道) 塚田 喜重(兵庫)
小宮山琢二(東京) 石村 清(青森)
大島 政治(愛知) 茶本 七郎(神奈川)
川地 榮一(名古屋) 北村 陽子(茨城)
齋藤 教(神奈川) 三浦 一(札幌)
岩藤 幹一(東京) 古川 静人(山口)

童話掲載外佳作

- 山之井利世(神奈川) 堀田 信孝(京城)
逸見 子鳩(埼玉) 宮本 功夫(東京)
松田 陽雄(名古屋) 宍戸 美三(横濱)
坂井 羊子(東京) 服部 嘉喜(岡山)
小島 美子(大阪) 小山田津次(布哇)
今泉 定子(徳島) 千田 六郎(京都)
白石 正一(長野) 横山 省三(山形)
柴山 勝男(朝鮮) 岡村 ハナ(北海道)
今田 文子(岩手) 瀧山洋之介(東京)
波江 文二(廣島) 黒川 順一(東京)
村田 春子(和歌山) 佐藤 治伊(宮崎)
片岡 良一(千葉) 若宮 秋子(福岡)
朝井 隆二(神戶) 三好金之助(岡山)
渡邊 進(岐阜) 前田 金城(富山)
矢崎 剛(長崎) 藤藤 藤(東京)

大人篇

- 賤僧多味男(静岡) 本多 鐵磨(東京)
笠原 信雄(東京) 後藤 積根(愛媛)
竹下 野島(根) 西岡 種雄(大分)
阪野 酒大(大阪) 山野 達雄(長崎)
堀和 信雄(東京) 矢戸 功夫(東京)
長田 六郎(東京) 中村 里郎(兵庫)
小林 重蔵(東京) 鉄川 登平(千葉)
小山まうじ(模範) 伊藤 益平(岐阜)
石山 一翠(東京) 恒藤 孝夫(東京)
神津 清流(東京) 太田 貞夫(名古屋)
原 知一(山形) 林 通忠(東京)

新誌友名簿

- 高野 房一(埼玉) 谷本キヨ子(調練)
笠井 正美(不明) 竹内 健二(愛知)
伊藤 清彦(東京) 徳丸 喜一(埼玉)
村島 ウタ(東京) 夏目 基一(愛知)
小倉 正夫(茨城) 山村加枝子(熊本)
大久保 至(愛知) 中島とき恵(兵庫)
星 晃(富山) 岡本まつ子(埼玉)
山崎 孝(神岡) 渡邊 守夫(長野)
原田 善郎(神奈川) 飯島 清子(東京)
飯盛 晴子(東京) 高橋 清子(東京)
岩井 清次(千葉) 笹井 茂(千葉)
片山 ミヅ(新潟) 永也 正貞(群馬)
柏崎 ナカ(神奈川) 和代 タツ(埼玉)
竹内 ナカ(神奈川) 工藤 實(青森)
飯田松之助(東京) 松井長之介(朝鮮)
岩井 春吉(千葉) 山村 花子(大阪)
菱山 達男(神奈川) 鈴木 文夫(大阪)



金の星社 六月號

出版だより

近刊書のお知らせ

四月発行の豫定であつた五種の本は『繪入世界童話集』が一冊期日に遅れましたが、あとは全部豫定通り發行になりました。まだ發表されないで本月發行になる新刊書は左の四種であります。

- 小楠公 (實傳物語ノ四) ワゲネル物語 (名著大系ノ三十八)
- 白鳥の騎士 (名著大系ノ三十八)
- 幽霊船 (名著大系ノ三十八)
- 黒馬物語 (名著大系ノ三十八)

(少年文學名著選集ノ三)

『小楠公』三島崑川先生の『大楠公』を読まれた方は、その姉妹篇である『小楠公』を必ず讀まうと思はせて置きます。『大楠公』の終りに『小楠公』の預告があつた爲めか、すでに讀者から澤山の申込みがある程待たれてゐる本であります。有名な楠公父子櫻井の露の訣別から、正行が成人して、南朝のために忠義をつくし、最後に四條で討死するまでの勇ましい一生の物語りな、例によつて三島先生の深い研究によつて書いたものでありますから、いふまでもありません。青葉しげるの櫻井の里の別れの夕まぐれ

この歌は、今から十年程前の少年少女達が好んで歌つた歌であり

ますが、その歌を歌ふたび、その當時の少年少女達は、あはれにも勇ましい正行の物語を讀みたいと思つておりましたが、その當時は勿論のこと、正行の一生を書きたい本がなく、今もなほ無い時に、三島先生の、この尊い著書が出版されるのですから、どんなに讀書界に喜ばしい事かわかりません。これに三島崑川先生の苦心になる日本歴史實傳物新書も第四冊目を出す事が出来ました。これほどの力が入つた本がないので、今や、非常な評判になつて来ました。此の叢書の内一冊も、まだ讀まない方があつたとしたら、是非お讀みになる事をおすすめします。『小楠公』の装幀と挿畫は、例によつて羽鳥古山畫伯が苦心をされて、非常に立派なものであります。

○白鳥の騎士 (ワゲネル物語) ドイツの音楽の大家ワゲネルは、世界第一の音楽家といはれ、音楽の神様のやうに尊敬されてゐる人です。この人のオペラの物語は、ずぶぶん深山にありますが、この『白鳥

話を讀んだ者は、たまらなく後が讀みたくなるほどのものです。しかし、ハウフのお話はさう澤山はないのです。中でも、最も奇怪なお話で、そして不思議な面白味を持つたものは、『幽霊船』です。大海の中で此の幽霊船に出遇つた者は、誰でも離船してしまふのです。そして、このお話の主人公もその中の一人で、大海原の中で離船してしまつたもの、不思議にも助かつて、幽霊船へはひりまされた。

わかると共に、人間たちのことがよくわかつて非常な興味を感じるでせう。そして、此の本の中心になつてゐるのは、深い愛の精神でありますから、この本を讀んでゐる内に自然に心持ちが清められるやうになつて行くのを覺えます。そこに此の本の尊い價值があるのです。

(野) 原作は英國の女流作家ウィダの著である。犬と不遇の孤兒とを中心とした真話であつて、普通の童話にくらべて最も藝術味の濃いものである。そして、動物愛の心がよくあらはれてゐる。少しく我が國と風習の違ふところのあるのはやむを得ない。小學生級生の讀物としてさしつかへあるまいと思ふ。

童話にかきなほしたものである。童話といへば、西洋の童話が大部分を占めて、我が國獨特のものに乏しい今日、これなどは文學的價值からいつても興味といふ點から云つても推賞に値するものと思ふ。附録の『群がづき船』もおもしろい。小學生級生の讀物として適當であらう。

推薦書四種

『黒馬物語』英國の有名な少年小説でアンナ・シーウェル女史の作つたものです。黒馬の一生を物語りにしたのですが、たゞ動物の一生を書いたのではなく、口をきけない爲めにどんな氣持ちで暮してゐるか知られずにはいられないを送る動物たちの物語であると共に、一匹の黒馬が次から次へと人手に渡つて行く間に接する人間達の話を書いたものであります。讀者は動物の可哀相な生活が

- フランダーズの少年 (名著大系)
- みなし兒 (名著大系)
- 竹取物語 (名著大系)
- ジャンバルヂヤン (名著大系)
- フランダーズの少年 (定價九十錢)

若深會讀物調査會では、本社發行の次の四冊の本を、優秀なる書籍として推薦しました。

『みなし兒』(三井信衛著、定價同前、一六四頁) (譯) イギリスのデイツケンスの作を譯したものである。哀れな運命に磨かれた孤兒が、色々の艱難を経て後幸福の岸に達したと云ふ物語である。どんなに偉大な子供にも感激させずにはおかない力づよさがある。原作のあまりに可哀相すぎるところは幾分やほらけて書いてと譯者は云つてゐるがそれでもまだ殘酷すぎて子供によつては、讀ませておかないと思ふ。

『竹取物語』(久米絃一著、定價同前、一六一頁) (譯) 我が國の物語中最も古いとされてゐる竹取物語を現代語の

『ジャンバルヂヤン』(久米絃一著、定價同前、一六四頁) (譯) ユーゴーの名著ジャンバルヂヤンを子供の前に説き聞かすことは、かなりむづかしい仕事である。それはあのじめじめした重苦しい原作を子供向きに簡明な趣き取扱い、しかも作者の意圖を速くしめればならぬからである。本書はこの點先づ成功してゐると讀んだ。少年少女の好讀物。

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

『幽霊船』ドイツの有名な童話作家ハウフの作つたもので、これはまた類のない不思議なお話です。一體この人の作つたお話は、昔のファンタジック・ノットを新しくして、そして、つと面白くしたやうなもので、一度、この人のお

讀後感

『みなし兒』を讀む

東京市京橋區南金六町十四
山田 次郎

(十六才)

みなし兒、何と云ふ悲しい物語
でせう。

一人の父無し兒が、二度目の父
や、父の姉に、ヂヤケンにされて
遂に遺い、學校へやられてしま
ふ。その學校にある内、母に死な
れ、悲しみの涙も乾かぬ間に、家
を退出され、みなし兒となるが、
長い間の苦しみのけつが、トウト
ウやさしい叔母の家にとどつき
幸福に暮らすと云ふ、すぢ。その
中には、なつかしい乳母のベゴテ
イ、かはいさうなアンや、エマリ
イ等のみなし兒、友情のあつたス
テヤフォリス。意地悪なドーバ
ーの人達が出て、讀む人を泣かせた
り、笑はせたり、氣づかはせたり
します。岩岡とも枝先生の装幀、
挿畫も非常にけつこうです。私は
此の本によつて、淋しい雨の一夜
を面白くすこした事を、編者三井

信衛先生にお禮申上げます。

ジグフリード王子
物語小感

相州二ノ宮山内元海澤
松本 二郎

鈴木 信次

少年少女名著大系は本當に好い
本です。ジグフリード王子物語
私は一晩で息もつかずに讀破して
しまひました。偉大なるニイベル
グンの神話としてジグフリード
物語は、先程ドイツがどこかの活
動寫眞を觀て非常に良いと思ひま
した。

勇ましくも、神々しい勇壯な物
語。ジグフリード王子が魔の森
で大蛇を退治する時の思つまるよ
うな、そして神話的感じの深い此
の物語は、他の何よりも良い少年
少女の讀物と思ひました。勇ま
しいジグフリード王子と美しい
クリムヒルト姫。クリムヒルト姫
の復讐。變化の多い、美しい物語
活動寫眞で觀た時に非常な感激
を持つて是非一冊書物で讀んで見
たく思つておもしろい、ジグフ
リードはあまり珍譯になつて居な

いのらしく、遂に讀む機会なく過
ぎたところ、金の星社の少年少女
名著大系の中に刊行されたのを發
見して飛立つ思ひで讀みました。
原書で讀むと大體に長い物ださう
ですが、安い書物で、そして、此
れ程分り好く充分に面白く譯して
あるのは、少年少女名著系の書
物に感心させられました。

『人買物語』を讀み
終つて

府下窪橋町角八七六
武井方

稲垣 秀郎

僕は、金の星の新聞廣告に出た
『人買物語』を買はうと思つて、本
屋へ行つて見たら、まだ来ません
とことわられてがっかりした。そ
れから學校から歸ると直ぐ行つて
聞くと、
丁度五日目に來てゐた。僕は直
ぐに買つて來て讀んだ。僕は第一
に表紙の面白いのが氣にいつた。
内容を讀んでゐる内に、厨子王や
安壽姫の、けなげな心持に僕は強
く感づかされた。
見知らぬ處で、母さんと安壽姫
や厨子王等が、悪者の爲めに人買

船につれて行かれ、お母さんとは
なればなれになつて別れる所が、
僕には一番悲しかった。安壽姫が
悪者の爲めに殺され、自分の身を
もつて弟厨子王を逃がしてやつた。
姉様の心には、感心いたしました。
厨子王が後に、お家を復興させ
て悪者を縛り上げて國內を安らかに
した事等、僕は一頁一頁手にあせ
るにきつて讀みました。
丁度僕が讀終つた時、友達の手
君が來て、面白さうだねと云つた
から、食つてやつた。僕はあとで
あんな良い本は僕一人が讀むより
金の星愛讀者はみんな讀んでほし
いと思つた。

『家なき子』を讀む

朝鮮京城若草町一〇六
河野 砥吉

『家なき子』は、初から終まで主
人公ミミの爲めに泣かれます。
はじつて孤兒院へ賣られやうとす
る所、お母さんのあない時に、旅
役者の親方となつたらしい家を後
して行く所や、途中で休んで自分
の家をふりかへりみると、お母さ
んが自分をおかしてゐるとおぼえ
てたまらなくなつて叫ぶあたり、

眞に追つてゐます。又親方が二ヶ
月の間牢屋へ入れられて、その間
ルミが大や猿をつれて行くあたり
『白鳥號』で過す一日の出来事
親方が迎へに来て再びさまよひ歩
くあたり、本當にルミに同情しま
す。又猿の死、遂には親方の死に
逃ひ、全く一人ぼつちになるかと
思ひの外、親切な植木屋で救はれ
て、暮して行く中、植木屋の破産
の結果、とうとう一人で行く行
くけれども、道が開けてもう一人
ではなくなるあたり、實に名筆と
いふべきです。『家なき子』は實に
世界に誇る名作であると思ひます

愛 讀 書

京都六角通り堺町角
中澤 千太郎

私は昨年の七月からサトと金の
星を愛讀してゐる者です。十一日
の日かんで行つて、まづそのうっ
くしい表紙をみるのあたりのしみに
なりました。私は其の曲にまだ
金の星社版の本はギリギリ英雄物
語など四冊しかもつてありません
これからは金の星社ともつと親
しくなりたいと思つてあります。

『聖書物語』を讀みて

鳥取縣東伯郡三徳村門前
(姉友) 武部 政一

クリム色のクロス装幀に、
くつきりと浮き出したやうな原色
版は、ヤコブが鹿の肉の好きな父
親のイサクに、鹿の肉だと言つて
仔山羊の肉を食べさせて祝福を受
ける所です。口繪はアブラハムが
自分の獨り息子のイサクを殺して
神様に捧げ様としてゐる所です。
聖書物語の名前だけは知つてゐ
ても、今まで讀んだことのないか
つた私は、今度金の星社の名著大系
で發行になつた『聖書物語』を初め
て讀んであまり面白くて、スペ
ンシイ本なのに感心しました。本
書はユダヤの國の古い、お話を
神様と人間との不可思議な出来事
を書いたものです。信仰深いア
ラハム、イサクの嫁えらび、鹽の
柱になつたロトの妻、鹿の肉の好
きなイサク、神様と角力を取つた
話、モゼの夢判罰、河に流され
たモーセ、など古いお話です。
それは、面白い物ばかりです。
舊約聖書をまだお讀みにならな

い方へ切にお願ひします。
『コロンブス』を
讀んで

秋田縣仙北郡荒川村
上荒川 岩谷 貞三

私が『コロンブス』を讀んで、先
づ感じたのは、此の本は非常に教
育上有益なるものと考へられまし
た。學校の修身などにも、コロン
ブスの忍耐の事について書かれて
ありますが、此の本をよむと、細
々と其のコロンブスの精神が、心
の中へさざみ込まれます。私は毎
晩妹達に教科書の參考として讀ん
で知らせます。
妹達は熱心に聞きました。コロ
ンブスの困難を……妹達も悟る
所が多かつたせいか、一日一日と
心持が變りました。學藝會の時など
も、妹達が熱心に聞いて
呉れました。さうしてかつさいな
して呉れました。
ほんたうに『コロンブス』は教育
上よい本です。學生諸君に、是非
買つて讀んで貰ひたい事を私から
希望致します。

『源義經』を讀む

東京本郷根津宮永町三五
渡邊 秀雄

私は児童文學を研究してゐる者
ですが、中でも日本の歴史を題材
にして、これを小件に讀ませる事
を研究してあります。
それで、いろいろの作家の歴史
物語といふやうな本を讀んで見ま
したが、これまで讀んだ本ではど
うも餘り感心した本がありません
でしたが、三島崙川先生の『源義
經』にすつかり感服しました。

録目著名行發社星の金

<p>郎三岩野沖 著生先</p> <p>金のつるべ</p> <p>『赤い猫』と共に全国的に有名になつてゐる名著である。單純な教訓でなく面白おかしく讀んで行く内に、自ら深い教訓を與へられるのが沖野先生獨特の妙味である。</p> <p>金 一圓 送料 十錢</p>	<p>郎三岩野沖 著生先</p> <p>赤い猫</p> <p>沖野先生の傑作として何人も推奨してゐる名篇十五篇。これこそ讀本として少年少女必讀の書である。日本最初の童話讀本にして、又日本の童話讀本として最高のものであるとの評を得てゐる。</p> <p>金 一圓 送料 十錢</p>	<p>郎三岩野沖 著生先</p> <p>勞働の少年</p> <p>鐵山に働く二人の少年の物語である。父親は暴動の爲めに殺されて了ふ。孤兒となつた二少年は如何にして暮したか。その運命を書いた興味深い雄大な長篇である。沖野先生の大作である。</p> <p>金 一圓 送料 十錢</p>	<p>郎三岩野沖 著生先</p> <p>森林の祈り</p> <p>これ程清く尊い物語が他にあらうか。主人公は愛らしい少年と少女とである。家は破産、住つた家は人手に渡り、母は小學教員となる。少年と少女は都へ出て奮闘する。</p> <p>金 一圓 送料 十錢</p>	<p>郎三岩野沖 著生先</p> <p>日本の児童と藝術教育</p> <p>本當のいふ童話といふのはどういふものかをはつきり述べて、その作法までも明らかにし、日本の児童にはどういふ童話を與へなければならぬかといふ事まで懇切に説いてゐる。</p> <p>金 一圓 送料 十錢</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

集募作創賞懸

【意注】童童童 【意注】童綴童

童童童
心 句……………野 口 雨 情 先生選
話……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

童綴童
心 句……………野 口 雨 情 先生選
方……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

（一）一般讀者の創作）

童童童は十五行以内、童話には二十字詰二百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童心句には一圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返ししません。

童綴童は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことが諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題用してもかまひませんが、姓者は學校や學年（または住所と年齢）ともにおとさないやうにして下さい。（または半紙）用紙は童心句はハガキ、童話や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は五月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は八月號、宛名は東京市本郷區助坂町三五九番地金の星社。

定價 壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢

但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九九五六番

【意注】送 送金に振替が一番便利で御座います。御注文の節は「送金切手」一割増しです。御注文の節は「送金切手」一割増しです。住所姓名はつきり書いてください。

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和二年五月九日印刷納本（毎月一回）
昭和二年六月一日發行（日發行）

編輯發行人 齋藤 保
印刷所 小 端 安 之 助
東京市本郷區助坂町三五九番地
電話 神田二二三番

發行所 金の星社
東京市本郷區助坂町三五九番地
電話 神田二二三番
印刷所 安 之 助
東京市本郷區助坂町三五九番地
電話 神田二二三番



歯ブラシは、
ライオン歯ブラシが、
一番よろしく御座います。

いたい！ 歯がいたい！

いたい！ と泣く子供は、

ふだん 歯をみがかない子です。

ライオンはみがきを毎日使へば、

むし歯になんか

きつと きつと なりません。